

部 報

平成 20 年度 No.54

北海道大学馬術部



◇目次◇

巻頭書	井上 京	2
前主将より	宮本 亮	3
活動報告		4
戦績報告		10
調教報告		
北彗号	宮本 亮	20
北鳳号	吉村 誠司	22
エルグレイ号	山川 倫明	24
北翔号	野村 基惟	27
北椎号	武藤 将充	30
北煌号	谷口 善彦	32
北創号	谷口 善彦	36
北終号	山中 謙司	41
ネイチャーヒーラー号	山川 倫明	44
サクラフォルツァ号	宮本 亮	46
離厩報告		
北閃号	出戸 裕人	47
北遥号	小島 真宏	48
鎌田正人さん追悼特集		50
OB 寄稿		
北大復活に向けて	松井 亮	60
北京オリンピック in 香港	春田 泰彦	69
北大水産学部馬術部活動報告	長崎 諒	74
卒部にあたって		75
部員紹介		84
OB 名簿		92
現役部員名簿		102
編集後記		105

部長 井上 京

もう年度が改まっていること、お許し下さい。平成 21 年 5 月 6 日、ゴールデンウィーク最後の夜、NHK 7 時のニュースの終わりは、伊豆シャボテン公園で飼育されているチンパンジーの話題だった。シャボテン公園のチンパンジーといえば堤さん、北大馬術部の先輩だ。もしやと思って画面に入ると、蝶ネクタイに燕尾服の堤さんの姿が映った。この日の話題は、公園の人気者 30 歳の雌のパピーがこの日を最後に舞台を引退するというもの。パピーは 4 歳の時から 26 年間もショーをこなしてきた。体力の衰えと繁殖のために、相棒のダイゴ（雄 12 歳）とともに引退するらしい。この日も高い竹馬になかなか登っていけない。子供達から「ガンバレー」の声がかかる。ショーが終わって堤さんとパピー、ダイゴが深々とお辞儀をする。会場からは温かい拍手。連休の最後を飾るニュースだった。終わってすぐにパピーと堤さんのことをネットで調べてみた。3 月に終わってしまった番組「どうぶつ奇想天外」にも、今年冬に封切られた映画「旭山動物園物語」にも出演していたらしい。そしてあるニュースサイトで堤さんの次の言葉を見つけた。

「わたしは残念ながら、パピーの気持ちはわかりません。しかし、このパピーは、わたしの気持ちをいつでもわかっていました。長い間、26 年間、ずっと一緒に頑張ってきてくれました。

さて 26 年間パピーと連れ添ってきた堤さんにして、「残念ながら、パピーの気持ちはわかりません」と言わしめたのは何故だろう。そしてそれにもかかわらず、パピーは堤さんの気持ちをわかっていた。そう断言できる絆の太さはどこから生まれたのだろう。

動物全般の行動・心理・トレーニングに深い関心を持ってこられた堤さんの信条は、「お互い信頼しあう、尊敬しあう」だそう（伊豆シャボテン公園のニュースリリースより）。

平成 20 年 5 月 2 日、馬をこよなく愛された鎌田正人さんが逝去されました。今シーズンも馬術の大会でお目にかかれるものと思っていたのに、あまりに突然のことでした。いつも競技会では審判を務められ、部員達にさりげなく的確なアドバイスをいただいております。またこれまでに数多くの新馬を部にお世話いただいております。馬術部にとってまたかけがえのない先輩を失ってしまいました。心からご冥福をお祈りするばかりです。7 月 19 日の夜、ノーザンホースパークで鎌田正人さんを偲ぶ会が催されました。故人を偲ぶしめやかな、でも心に残る会でした。

昨シーズンは12頭の馬に対し25人の部員という構成で部を運営してきました。代が替わり、長い冬を超え、少し早い春を迎えると、後はあっという間に過ぎていきました。昨年は北日で山川・エルグレイが優勝し、野村・北翔も権利を獲ってくれました。またどの馬も無事にシーズンを終えてくれました。

主将として一年間部の運営に関わってきましたがやはり部員の意思統一には難しさを感じました。また部が今の規模で存続していくためには色々な物事に対して柔軟性が必要だとも感じました。現役の部員は部活に学業にと忙しく、余裕がないとは思いますが、この部をよりよくするために考え、行動に移して行ってほしいと思います。

部の運営において、OBの方々をはじめ、多くの関係者の方にお世話になりました。札幌競馬場乗馬センターの八巻さん、歌川さんにはとても親切にいただきました。「もう使わないから」と言ってくくださった物は部で即戦力として使わせてもらい、「馬事公苑の人に講習会開いてもらうから」と誘ってくださった際は、福島大輔氏によるほとんど北大のためだけのような講習会を受講させていただきました。忙しい中、北大に足を運んで下さったこともありました。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、僕たちが自分たちのやりたいようにできたのも顧問の井上先生がおられたからに他なりません。この場を借りて御礼申し上げます。

◇活動報告◇

<主将>

野村 基惟

現在部員は3年生6人・2年生7人・1年生3人の計16名、馬匹は以下の10頭で活動しております。部員16名に対して馬匹10頭はやや多い感もありますが、以下のように高齢馬と新馬が多い現状で、馬配を確保し調教を進めていくにはこの体制が妥当だと考えております。また、部員は男女8名ずつとなっています。

競技馬・・・北擘（16）、エルグレイ（20）、北翔（19）

練習馬・・・北鳳（13）、北椎（12）、北煌（9）

新馬・・・北柊（8）、北創（8）、ネイチャーヒーラー（11）、サクラフォルツァ（5）

<馬匹について>

現在の競技馬・練習馬・新馬のバランスは、安定した練習馬が少なく新馬が多いという問題があります。これまで総合馬として全日学出場を第1目標にしてきた北鳳号を、今年は下級生の練習をメインとした使い方をしていくことを決めたのも、このバランスを直していくことを期待したのが一因です。大学馬術部という性質から言っても練習馬の層は最も厚くあるべきであり、その上で新馬を練習馬へ、練習馬を競技馬へ、というサイクルを循環させていくことが理想であると思います。以前から言われていることではありますが、新馬を、ある程度の調教レベル、（例えば障害なら100cm、馬場なら第3課目）で安定した練習馬へと育てていくことが重要な課題となっています。

また競技馬であるエルグレイ号・北翔号は高齢であり、いつまでもその実力に頼ることはできません。幸い年齢的な衰えは大きくは表れていませんが、これまで以上に体調管理を徹底する必要があります。

<部員について>

1年目の人数が少ないこともあり、新入生を数多く迎え入れ部活に定着させることが重要です。「部活離れ」が叫ばれるこの頃ですが、新歓活動にも力を入れていきます。

現在の馬術部では、全日学出場を目標としたいいわゆる「競技志向」だけでは部全体のモチベーションには繋がらない現状があります。全日学出場という根幹は変わることはありませんが、各個が自分なりに目標を作ってモチベーションとし、お互いがそれを理解しあって努力していくという形が現在の部活では求められているかもしれません。意識の持ち方という面で、馬術部も過渡期に立っていると言えそうです。目標や方向性は、部を引っ張る4年目・3年目の考え方によっても、これまで以上に左右されてくると思います。ただそんな中でも、競技者・スポーツ選手に求められるメンタリティ、ある種のエゴイズムやストイックな部分も忘れずに持ち続けていって欲しいと思います。

〈調教方針／指導方針について〉

「北大には一貫した調教方針が無い」というのはとにかく長年の課題であり、現在練習馬として育てている馬が少ないのもこのことが1つの原因と考えられます。これを解決するために重要なのは、部全体で新馬を調教していく姿勢だと思います。各馬の現状・問題点を、調教する人間だけでなく部全体が理解し、その上でどういった方針で何を練習しているのかを周囲が把握している状態が必要です。そのために話し合いの繰り返しや乗り替わりが必要であり、調教者だけの自己満足にならないように気を配っていかねばなりません。

乗り手の指導についても、その人の課題を部員同士が共有し、練習を見る側も指導の方向性のある程度一定にする必要があります。各個人の練習を部全体で見えていき、育てていくことが効率良い指導を生むと思います。

馬の調教についても人の指導についても、お互いに意見を交わして共通の認識を持ちながら部全体で進めていく意識が大事であり、このことは部をチームとして作り上げていく上でも大事な要素になってくると思います。

〈部の運営について〉

去年の部報でも書かせてもらった通り、馬術部は人と人の信頼関係、人と馬の信頼関係を基盤に成り立っています。部員1人1人にはそれぞれの役割があり、それらは部のスムーズな運営のためにどれ1つ欠かせないものです。部員が同じ理想・目標を持ち、お互いに協力しながら部活運営に携わっていくことが必要です。OBの方や馬術関係者の方の協力も欠かせません。また初心者が多い部活だからこそ、基本的な馬の扱い方をより大事にし、常に馬に対する真摯な姿勢を部員に徹底していかねばなりません。

単調な繰り返しに感じられる日頃の細かい場面においても人馬の安全に気を配り、それを無数に積み重ねていくことが部を安定させ、ひいては結果にもつながってくると考えながら運営を進めていこうと思います。

〈副将〉

清田 雄平

現在、部員数は16人で活動しています。一時よりは多くはありますが、一年目が3人と少なく、近年の傾向として新入生の部活離れは確実であることを考えると、今後の活動は今現在より難しくなっていきます。その中で、馬術部がただきつだけの部活ではなく、馬術を楽しみ、部活動により人格の向上が望める部活であるためには、「余裕」と「目標」がなくてはならないと自分は考えます。そして適切な余裕・目標を得るためには、各人の日々の努力と、高い意識が必要であります。

<主務>

武藤 将充

昨年 11 月には学校から予算が出て、馬場の改修が行われました。しっかりと整地がされたのでいままでのように一部に大きな水たまりができてしまうようなことは減るのではないかと思います。厩舎にはまだ修繕したい箇所等もあるため、学校とはなしつつ、少しでも改善できたらと思います。

馬術部が、学校、OB の方々、近隣乗馬クラブ等の大きな援助により部が成り立っていることを肝に銘じつつ、周りの団体としっかりとした関係を作り、部や大会の運営を滞りなく進めていけるよう一年間活動していきたいと思えます。

<馬匹>

村木 泰子

馬術部として長く使える馬を残していくためには、「治療」よりも「予防」を心がけていくことがとても重要だと考えています。馬の体調管理を行う上で注意すべき主な項目には跛行、疝痛、事故などがありますが、まず跛行については、運動の負荷、内容が適切であるかどうか気を配ることが必要です。これにはその馬のチーフはもちろん、他の部員の理解も必要であり、部員間で積極的に意見交換をすべきだと思います。また日頃の手入れの中で、小さな故障の原因が出てきたときにそれに早めに気付ければ、大きな故障や慢性的な跛行になる前に対処することができます。これは疝痛の予防においても同じことが言えると思います。また、これは上級生も下級生にも共通して言えることですが、馬の扱いに慣れてくると、気の緩みや怠慢が生じてきます。いかなるときも、自分達は馬を扱う上では素人であることを認識し、一年生の新歓合宿で教わったことを基本にしていくべきです。人と馬の安全を確保するために、これを徹底するように呼びかけていこうと考えています。

最後になりましたが、獣医関係の OB の方々には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げます。今後ともご指導のほどをよろしくお願いいたします。

<後援会>

斎藤 孝洋

例年どおり年 4 回のコンパを主催し、現役部員と OB の方々との交流を持たせていただいているほか、OB 戦・初乗りを開催しています。また、戦績や部報、年賀状の送付を行っています。全国に散らばる多くの OB の方々と交流を持てるように、北大馬術部後援会によるホームページ (<http://hokudai-horse.xsrv.jp/index.html>) や、現役部員によるホームページ (<http://circle.cc.hokudai.ac.jp/horse/homepage/index.html>) が作成されています。また E メールによる連絡も行っておりますが、昨年トラブルが生じたため、旧来のメールアドレス

(hokudaibajutubu@hotmail.com) から、新たなメールアドレス (hokudaibajutubu@hotmauk.co.jp) に変更されて

います。メールアドレスをお持ちの方は、ご確認のほどよろしくお願い致します。なおアドレス変更の際には、お手数ですが上記のアドレスまでご連絡ください。

<飼糧>

出戸 裕人

今年はヘイキューブ1kg、燕麦1kg、ふすま0.3kg、パワーサプリ0.1kg、塩大さじ1杯強を朝、昼、夕の3回与え、乾草を1.5kgずつ朝、昼、夕、夜の4回与えています。また、ヘイキューブは昨年同様ふやかし、昨年2月から、手づくり麦酒さんからビールの絞りかすを頂き、飼いに混ぜ燕麦の量を減らして節約しています。飼糧は明治飼糧さんから購入し、乾草は長岡さんからバイト代としていただいています。ボロ山は毎年4、11月に北大農場に回収していただいています。

今年も1番乾草と2番乾草を分け、蕁麻疹を予防しています。

今年から石油高騰により飼糧の値段が上がったので、少しでも節約しながら質を保ち取り組んでいきたいと思ひます。

<会計>

田中 里枝

今年度は全体的に見て総支出入額共にやや増加しています。

北日学や全日学等への大会遠征費が去年より掛かっていること、収入面では後援会による増加が考えられます。しかし、過去の支出推移をみると飼料や交通費は増加傾向にあり、厳しい財政状況は変わっておりません。

過去の会計報告などを調べてみると、飼料や交通費が上がった要因として以下のことが考えられます。

・飼料

一部乾草の購入、飼料価格の上昇 等

・交通

燃料費の上昇、試合遠征回数の増加 等

今後の対策としては、経費節減、部員数の確保やバイト収入の増加等が挙げられます。すでに、経済状況を考慮して2頭離厩させており、二度とこのようなことにならないよう部員全員が丸となって部活動運営に励みたいと思ひます。また、これからもOBOGの方々のご理解と温かいご支援の程宜しくお願ひ申し上げます。

平成 20 年度部報の会計報告について、次の 2 点を訂正いたします。

- ・表に「繰越金」を追加しました。
 - ・グラフには不要な表記とグラフ名の訂正を行いました。
- 今後も温かいご理解とご支援をよろしく申し上げます。

《正しい表》

会計報告2008年 1月～12月

収入

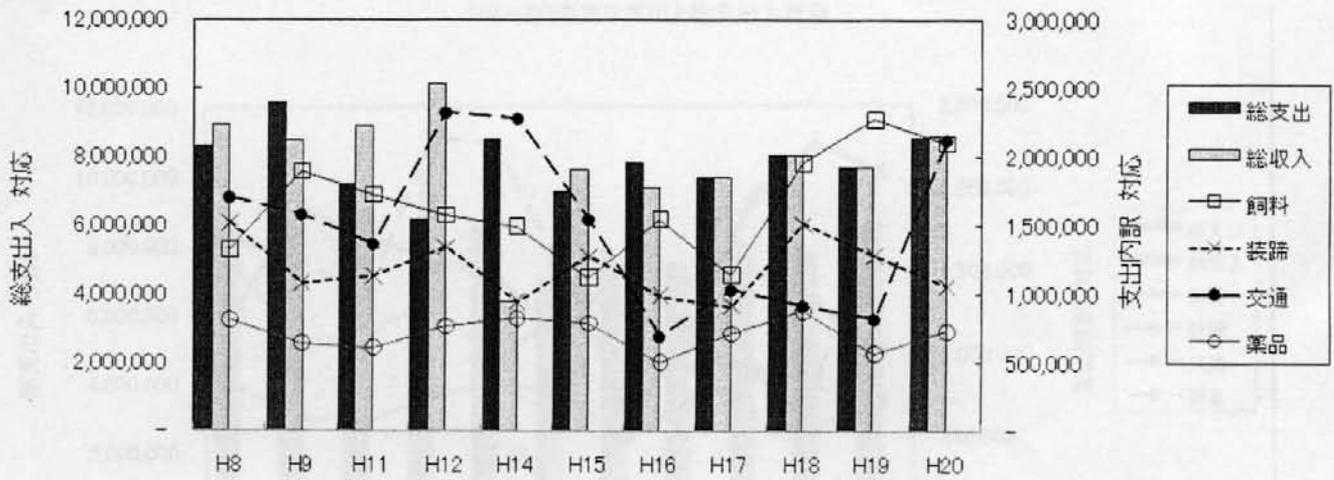
部費	1,275,460
寄付	30,000
道馬連学馬連補助	1,056,000
北大体育会強化費	404,077
半澤杯収益	361,950
道大会役務費	1,011,861
輸送補助金	76,600
馬運車貸し出し・輸送手伝い	55,000
モモセバイト	484,470
競馬場バイト	1,127,773
フレンドリー競技収入	516,000
ノーザンバイト	180,000
セレクトセールバイト	300,000
後援会	669,345
その他	932,742
前年度繰越金	102,689
計	8,583,967

支出

飼料	2,094,753
装蹄	1,053,850
薬品	725,010
馬匹	328,003
大会関係	967,528
馬備	19,302
主務	402,164
作業	111,630
交通	2,117,702
車両	514,106
ビデオ	22,085
企画	1,928
衛生	10,733
後援会	95,841
電話	35,665
雑費	56,974
計	8,557,274
次年度繰越金	26,693
合計	8,583,967

寄付
春田さん、山川さん、谷山さん

H8～H20の主な支出と総支出入推移



Let's Get a License

- ☆ 毎日入校OK
- ☆ 日曜・祝日も教習&検定実施
- ☆ 朝9時～夜10時まで教習
- ☆ 各方面無料シャトルバス運行

北大から
とっても近い
自動車学校!!

普通車・自動二輪・大型特殊

セットで取ればさらにお得♪♪

<普通自動車・大型特殊・普通二輪・大型二輪>

北海道中央自動車学校

札幌市東区北25条東1丁目1-17

TEL 711-3344

北25条



<http://www.hokkaidochuo.co.jp/>



◇戦績◇

●対東北大学定期対抗戦

(於:北大 3月16日) 参加選手:山本、綾部、岩野、清田(2)

(総合)

1位	北大 A(清田、岩野)
2位	北大 B(綾部、山本)
3位	東北大(三澤、安保)
MVP	清田、三澤

(個人)

		得点率
綾部	北煌	36.47%
岩野	北煌	35.29%
清田	北椎	37.65%
山本	北椎	34.71%

●第46回国立七大学総合体育大会馬術競技会

(於:東北大学 4月5日、6日) 参加選手:山川、宮本、吉村(4)

(総合)

1位	東北大
2位	東大
3位	京大
4位	北大

(個人・馬場)

		得点率
宮本	ラストイ	52.42%
山川	杜太郎	53.64%
吉村	杜円舞	46.82%

(個人・障害)

		減点	タイム	
宮本	杜円舞	183	162	3反 E
山川	ラカスターニャ	195	162	落馬 E
吉村	オレコングレート	4	62.68	

●第14回岩手大学招待学生馬術大会

(於:岩手大 4月26日) 参加選手:野村、武藤(3)

(総合)

1位	帯畜大
2位	岩手大

(予選・個人)

		減点	タイム
野村	ゴルトザムラー	140	108
武藤	ハル	172	108

●第36回半澤杯記念馬術大会

(於:北大 5月5日、6日)

☆太秦杯

			馬場減点	障害減点	タイム
1位	出戸	北閃	北大(2)	11	83.80
OPEN	野村	北翔	北大(3)	4	68.47
OPEN	宮本	北慧	北大(4)	25	93.47
OPEN	谷口	北煌	北大(4)		77.3

☆半澤杯

			減点	タイム
1位	歌川	イトブレーウ	JRA 札幌競馬場	11 91.09
落馬 E	山川	エルグレイ	北大(4)	

☆河田杯

			減点	タイム	J.O.減点	タイム
1位	南川	チャレンジ8	酪農大	0	75.28	1 42.69
2位	井上	テリオ	酪農大	0	75.15	2 44.59
3位	高樽	イトブレーウ	JRA 札幌競馬場	0	71.34	4 31.38
4位	内山	北閃	北大(3)	0	73.16	落馬 E

☆小池杯				減点	タイム
1位	土屋	テノリオ	酪農大	0	67.72
2位	木下	ショウナンターホ	JRA 札幌競馬場	0	69.75
3位	真田	ハイバート	フロンティア乗馬クラブ	0	73.19
4位	谷口	北煌	北大(4)	0	74.06
5位	野村	北煌	北大(3)	0	74.87
7位	村木	北煌	北大(3)	0	79.00
10位	池谷	ハルクマニア	北大水産学部	4	78.84
18位	武藤	北椎	北大(3)	18	120.97
落馬 E	伊藤	北閃	北大(2)		

☆井上杯				減点	タイム
1位	小島	北遥	北大(4)	0	79.25
2位	真田	フロンティア	フロンティア乗馬クラブ	0	79.10
3位	城	セントラルシチー	フロンティア乗馬クラブ	0	81.00
7位	吉村	北柊	北大(4)	0	78.19
8位	山中	北柊	北大(4)	0	81.88
10位	出戸	北創	北大(2)	0	83.66
11位	清田	北椎	北大(2)	0	75.66
14位	鎌田	北椎	北大(2)	0	73.19
16位	斎藤	北煌	北大(3)	0	62.65
20位	谷口	北創	北大(4)	1	88.40
21位	山川	ネイチャーヒーラー	北大(4)	1	88.53

☆斎藤杯				得点率
1位	米谷	ヒノテツト	JRA 札幌競馬場	54.53%
2位	岩本	マイネルエスケープ	JRA 函館競馬場	52.80%
3位	武藤	北椎	北大(3)	49.20%
5位	岩野	北煌	北大(2)	43.47%
6位	田中	北煌	北大(3)	40.80%
失権	真田	北慧	北大(3)	

☆市川杯				得点率
1位	山川	ネイチャーヒーラー	北大(4)	55.10%
2位	出戸	ネイチャーヒーラー	北大(2)	49.22%
3位	細谷	キティホーク	乗馬倶楽部メインフィールズ	46.86%
4位	綾部	北閃	北大(2)	45.29%
6位	山本	北椎	北大(2)	42.55%
7位	海道	北椎	北大(2)	42.16%

☆クロスバー飛越競技				減点	タイム
1位	富田	ファントリロハリー	JRA 札幌競馬場	0	73.00
2位	米谷	ファントリロハリー	JRA 札幌競馬場	1	78.50
3位	樫木	マイネルエスケープ	北大水産学部	2	84.25
4位	山中	北柊	北大(4)	3	84.25

●第22回北海道新緑馬術大会
(於:ノーザンホースパーク 5月16日~18日)

☆第2課目 part1				得点率
1位	百瀬	スペースリーダー	モモセライディングファーム	57.65%
2位	百瀬	サトノケンシロウ	モモセライディングファーム	54.31%
3位	鎌田	北椎	北大(2)	49.22%

☆標準中障害 D				減点	タイム	J.O.	減点	タイム
1位	萩野	アラビアンリスキー	タイキライディングクラブ	0	72.14	0	48.28	
2位	相田	モンテヴェルテ	モモセライディングファーム	0	83.37	0	54.73	
3位	宮本	北慧	北大(4)	0	81.06	6	60.68	
7位	山川	エルグレイ	北大(4)	4	80.29			

☆標準中障害 C				減点	タイム	J.O.	減点	タイム
1位	楠木	ワトキンス	ノーザンホースパーク	0	68.28	0	44.59	
2位	楠木	ジュティム	ノーザンホースパーク	0	76.68	0	46.84	

3位	神田	伯爵	帯畜大	0	77.23	0	51.79
2反 E	吉村	北鳳	北大(4)				

☆標準小障害 C part1				減点	タイム
1位	安藤	パハップス	マオイホースパーク	0	58.21
2位	百瀬	オーエン	モモセライディングファーム	0	59.07
3位	山川	ネイチャーヒーラー	北大(4)	0	62.29
4位	小島	北遥	北大(4)	0	63.07
7位	谷口	北創	北大(4)	4	70.11

☆標準小障害 B part1				減点	タイム
1位	百田	ジャズミンカラー	ノーザンホースパーク	0	57.39
2位	野村	北閃	北大(3)	0	59.87
3位	吉田	緑春	酪農大	0	60.09
4位	出戸	北閃	北大(2)	0	60.56
5位	谷口	北煌	北大(4)	0	68.62

☆小障害 A S&H				タイム
1位	井戸田	ミナミコージャス	ライディングファームフセ	69.42
2位	松井	タイキマーシャル	モモセライディングファーム	78.39
3位	楠木	ルーラハン	ノーザンホースパーク	81.73
5位	村木	北鳳	北大(3)	91.57
2反 E	出戸	北閃	北大(2)	

☆中障害 D S&H				タイム
1位	白石	アトム	ライディングチーム KS	71.94
2位	藤田	キタノトリ	モモセライディングファーム	75.12
3位	百瀬	ストレイラルホーク	モモセライディングファーム	75.46
11位	吉村	北鳳	北大(4)	104.92

☆中障害 C S&H				タイム
1位	高樽	ブライフライ	ライディングファームフセ	67.59
2位	百瀬	タイナータム	モモセライディングファーム	68.20
3位	楠木	ワキンス	ノーザンホースパーク	69.53
10位	野村	北翔	北大(3)	118.23

☆標準小障害 B part2				減点	タイム
1位	広瀬(秋)	ホナペティ	ノーザンホースパーク	0	57.96
2位	安藤	パハップス	マオイホースパーク	0	64.81
3位	森下	パニラシェイク	北星乗馬クラブ	0	65.25
4位	谷口	北創	北大(4)	0	67.96
10位	吉村	北創	北大(4)	4	72.28
11位	小島	北遥	北大(4)	7	92.07
2反 E	武藤	北椎	北大(3)		
OPEN	小島	北椎	北大(4)	7	91.01

☆標準小障害 C part2				減点	タイム
1位	広瀬(秋)	パハップス	マオイホースパーク	0	61.67
2位	斎藤	北遥	北大(3)	0	62.15
3位	清	アトム	ライディングファームフセ	0	69.37
4位	清田	北椎	北大(2)	0	76.15
5位	綾部	北椎	北大(2)	0	78.03
7位	谷口	北柘	北大(4)	4	70.23
8位	真田	北閃	北大(3)	5	86.00
OPEN	山中	北柘	北大(4)	0	79.21

●北海道三大学定期対抗戦

(於:帯畜大 5月24日) 参加選手:綾部、伊藤、清田(2)

(総合) 総減点

1位	酪農大	505
2位	帯畜大	524
3位	北大	596

(個人)		減点	タイム
綾部	柏咲	37	74.74
清田	柏華	3反 E	
伊藤	柏桜	59	81.77

●第48回 札幌市民体育大会 馬術競技会

(於:北星乗馬クラブ 6月10日)

☆小障害飛越競技 A

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム	J.O.減点	タイム
1位	西原	ライジングハート	モモセライディングファーム	0	59.07	4	26.74
2位	森下	ミスターブルー	北星乗馬クラブ	0	64.13	4	29.66
3位	西原	アンプロア	モモセライディングファーム	0	64.19	19	53.24
4位	山川	北閃	北大(4)	2	74.03		

☆札幌市長杯争奪障害飛越競技

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム	J.O.減点	タイム
1位	森下	パニラシイク	北星乗馬クラブ	0	62.34	0	46.68
2位	会田	ミスアリエル	札幌騎馬スポーツ少年団	2	72.19		
3位	出戸	北閃	北大(2)	7	76.53		

●第43回北海道春季馬術大会

(於:ノーザンホースパーク 6月13日~15日)

☆標準小障害 A

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム	J.O.減点	タイム
1位	川久保	アイビー	十勝柏友会乗馬クラブ	0	73.00	0	33.15
2位	児玉	シルバーアロー	JRA 日高育成牧場	0	78.58	0	35.23
3位	四位	ザッツザハリ	JRA 日高育成牧場	0	71.14	0	38.5
8位	内山	北創	北大(2)	0	69.54	4	44.51
9位	松井	タイキマーシャル	S41卒	0	69.88		経路 E
15位	谷口	北煌	北大(4)	6	85.03		
18位	谷口	北創	北大(4)	8	72.00		
20位	伊藤	北鳳	北大(2)	10	86.57		

☆標準中障害 D

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム
1位	荒谷	柏鳳	帯畜大	0	68.53
2位	西原	ライジングハート	モモセライディングファーム	0	58.79
3位	南川	チャレンジ8	酪農大	0	66.04
5位	吉村	北鳳	北大(4)	8	60.25
6位	松井	タイキマーシャル	S41卒	8	65.00

☆標準中障害 C

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム
1位	田口	ブライトフライ	ライディングファーム・フセ	0	62.15
2位	高樽	ブライトフライ	ライディングファーム・フセ	4	60.04
3位	大林	トーマスジェファソン	JRA 日高育成牧場	4	60.71
5位	山川	エルグレイ	北大(4)	4	65.15
2反 E	宮本	北慧	北大(4)		

☆標準小障害 C

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム
1位	諸橋	ホンノキング	旭川乗馬倶楽部	0	51.04
2位	清田	北遥	北大(2)	0	51.20
3位	諸橋	ジョイストーン	旭川乗馬倶楽部	0	51.46
9位	武藤	北椎	北大(3)	0	60.71
11位	海道	北椎	北大(2)	0	63.03
13位	出戸	北閃	北大(2)	1	66.81
15位	岩野	北閃	北大(2)	4	56.29
2反 E	宮本	サクラフォルツァ	北大(4)		

☆標準小障害 B part1

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム
1位	山崎	伯爵	帯畜大	0	49.51
2位	菅原	シーブリーズ	北海道静内農業高校	0	54.23
3位	真島	シーブリーズ	北海道静内農業高校	0	57.04
5位	山川	ネイチャーヒーラー	北大(4)	0	63.61
15位	山中	北椋	北大(4)	6	71.62

☆標準小障害 A S&H			タイム	
1位	遠藤	スピリッツ I	十勝柏友会乗馬クラブ	60.14
2位	四位	オリオン I	十勝柏友会乗馬クラブ	61.21
3位	飯田	トマスジェファソン	JRA 日高育成牧場	62.81
7位	小島	北遥	北大(4)	69.97
11位	山川	ネイチャーヒーラー	北大(4)	72.20
12位	松井	タイキマーシャル	S41卒	78.11
2反 E	谷口	北煌	北大(4)	
2反 E	出戸	北閃	北大(2)	
2反 E	斎藤	北煌	北大(3)	

☆標準中障害 D S&H			タイム	
1位	伊藤	アラビアンリスキー	タイクライディングクラブ	58.75
2位	小野	シルバーアロー	JRA 日高育成牧場	63.65
3位	西原	ライジングハロー	モモセライディングファーム	73.84
4位	松井	タイキマーシャル	モモセライディングファーム	76.04

☆中障害 C S&H			タイム	
1位	田口	ブライツフライ	ライディングファーム・フセ	60.78
2位	白石	アトム	ライディングチーム KS	68.42
3位	高樽	ブライツフライ	ライディングファーム・フセ	78.93
4位	野村	北翔	北大(3)	79.31
2反 E	宮本	北慧	北大(4)	
2反 E	吉村	北鳳	北大(4)	

☆標準小障害 B part1			減点	タイム	
1位	勝野	ウィンセニス	オーフルホースコミュニン	0	51.65
2位	高桑	アヒー	十勝柏友会乗馬クラブ	0	56.71
3位	神田	柏酔	帯畜大	0	59.07
7位	山中	北柊	北大(4)	0	70.32
14位	出戸	北柊	北大(2)	17	89.32
2反 E	村木	北慧	北大(3)		

☆標準小障害 C part2			減点	タイム	
1位	日置	ミラクルパワー	JRA 日高育成牧場	0	59.10
2位	大平	アトム	ライディングチーム KS	0	63.12
3位	畑	ホワイトメロディ	静内農業高校	0	69.37
2反 E	斎藤	北椎	北大(3)		
2反 E	出戸	北椎	北大(2)		
2反 E	綾部	北閃	北大(2)		
逆飛 E	鎌田	北鳳	北大(2)		

☆第3課目 part1			得点率	
1位	山田	アレジャホン	ノーザンホースパーク	57.07%
2位	川上	ドリーム	モモセライディングファーム	53.73%
3位	鈴木	テスコ	モモセライディングファーム	53.47%
7位	真田	北慧	北大(3)	46.80%
9位	田中	北煌	北大(3)	39.60%

●第一回北日本学生馬術連盟招待試合

(於・ノーザンホースパーク 6月18日)

☆(総合)			減点
1位	北日本学生選抜A		33
2位	北日本学生選抜B		117
3位	関西学生選抜		523.5

☆(個人)			減点	タイム	
4位	谷口	柏咲	北大(4)	6.5	63.54

●第33回北海道馬術大会
(於:ノーザンホースパーク 7月19日、20日)

☆総合馬術 part1

順位	騎手	馬名	所属	得点率
1位	大林	トーマスジェファーソン	JRA 日高育成牧場	58.61%
2位	吉田	緑春	酪農大	53.20%
3位	小笠原	柏凱旋	帯畜大	52.78%
7位	吉村	北鳳	北大(4)	51.11%

☆第3課目 part2

順位	騎手	馬名	所属	得点率
1位	佐藤	サチノグローリー	北星乗馬クラブ	57.87%
2位	鈴木	テスコ	モモセライディングファーム	53.87%
3位	竹之内	ウインゼニス	オーフルホースコミュニン	53.47%
OPEN	岩野	北閃	北大(2)	46.80%
馬装 E	岩野	北閃	北大(2)	

☆標準小障害 A

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム	J.O. 減点	タイム
1位	西村	カイエン	JRA 日高育成牧場	0	79.79	0	39.75
2位	松井	タイキマーシャル	S46卒	0	76.51	0	40.32
3位	沢口	オリオン I	十勝柏友会乗馬クラブ	0	79.45	0	41.39
5位	山中	北柊	北大(4)	0	81.82	0	49.38
9位	清田	北鳳	北大(2)	1	93.34		
16位	山川	ネイチャーヒーラー	北大(4)	16	77.07		
2反 E	宮本	北彗	北大(4)				
2反 E	小島	北遥	北大(4)				

☆標準中障害 D

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム	J.O. 減点	タイム
1位	伊藤	アラビアンリスク	タイキライディングクラブ	0	75.75	0	38.70
2位	加藤	柏海	帯畜大	0	76.18	0	45.39
3位	南川	ユウバク	酪農大	0	72.40	0	58.10
4位	谷口	北創	北大(4)	0	74.93	5	53.73
7位	松井	タイキマーシャル	S46卒	4	77.85		

☆標準中障害 C

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム
1位	山川	エルグレイ	北大(4)	0	79.93
2位	畠山	ダンテライオン	三木田乗馬学校	4	78.43
3位	小笠原	柏凱旋	帯畜大	8	74.20
2反 E	野村	北翔	北大(3)		

☆標準小障害 B part1

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム
1位	大庭	サブロー	十勝柏友会乗馬クラブ	0	55.01
2位	相田	モンテウエルテ	モモセライディングファーム	0	61.67
3位	谷口	北煌	北大(4)	0	65.21
4位	斎藤	北煌	北大(3)	0	65.57
5位	武藤	北椎	北大(3)	0	67.00
6位	出戸	北閃	北大(2)	0	67.54
7位	田中	北閃	北大(3)	4	63.89

☆標準小障害 C part1

順位	騎手	馬名	所属	減点	タイム
1位	本間	ブライツフラワー	ライディングファーム・フセ	0	60.60
2位	宮永	ファインウイズミー	コンドウファームライディングジール	0	60.85
3位	村木	北遥	北大(3)	0	61.12
5位	真田	北遥	北大(3)	0	65.00
7位	鎌田	北椎	北大(2)	0	69.19
8位	海道	北椎	北大(2)	0	73.31
12位	野村	ネイチャーヒーラー	北大(3)	10	100.03

☆小障害 A S&H

順位	騎手	馬名	所属	タイム
1位	百瀬	オーエン	モモセライディングファーム	69.32
2位	沢口	サブロー	十勝柏友会乗馬クラブ	69.42
3位	平島	ホワイトスカイ	北星乗馬クラブ	70.14
4位	松井	タイキマーシャル	S46卒	70.56
7位	吉村	北創	北大(4)	77.01

9位	武藤	北創	北大(3)	83.26
2反E	宮本	北慧	北大(4)	

☆中障害 D S&H

				タイム
1位	飯田	ザッツザハリ	JRA 日高育成牧場	69.35
2位	石川	カイエン	JRA 日高育成牧場	72.37
3位	伊藤	アラビアンリスク	タイクリディングクラブ	73.42
7位	松井	タイキマーシャル	S46卒	82.34

☆中障害 C S&H

				タイム
1位	小野	シルバアーロー	JRA 日高育成牧場	78.62
2位	百瀬	ストレイルホーク	モモセラディングファーム	83.9
3位	加藤	柏海	帯畜大	84.17
2反E	吉村	北鳳	北大(4)	

●第54回北海道体育大会兼第63回国民体育大会馬術競技
(於 ノーザンホースパーク 8月9日~11日)

☆標準小障害 A part1

				減点	タイム
1位	小島(正)	オリオン I	十勝柏友会乗馬クラブ	0	60.18
2位	楠木	ホナペティ	ノーザンホースパーク	0	70.69
3位	山中	北柎	北大(4)	0	66.11
8位	山川	ネイチャーヒーラー	北大(4)	8	66.58
9位	松井(亮)	タイキマーシャル	S46卒	9	77.33

☆標準二段障害飛越

			①減点	タイム	②減点	タイム	
1位	松井(亮)	タイキマーシャル	S46卒	0	37.91	0	43.12
2位	飯田	ザッツザハリ	JRA 日高育成牧場	0	38.02	4	33.26
3位	加藤	ナーシャルバトル	にいかつぷほろり乗馬クラブ	0	32.32	4	45.48

☆標準小障害 C

				減点	タイム
1位	国井	キティホーク	H15卒	0	60.30
2位	森下	ミスターブルー	北星乗馬クラブ	0	63.67
3位	金沢	スノーエンテパー	新冠乗馬スポーツ少年団	0	73.19
6位	武藤	ネイチャーヒーラー	北大(3)	4	73.50

☆標準小障害 B part1

				減点	タイム
1位	春田	トウカイポイント	ノーザンホースパーク	0	53.51
2位	床子	ジャズミンカラー	ノーザンホースパーク	0	58.47
3位	堤	オリオン I	十勝柏友会乗馬クラブ	0	58.65
4位	清田	北閃	北大(2)	0	58.93
8位	村木	北煌	北大(3)	0	68.13
9位	野村	北煌	北大(3)	0	72.04
11位	出戸	北閃	北大(2)	4	57.62

☆中障害 D S&H

				タイム
1位	相田	モンテヴェルテ	モモセラディングファーム	70.59
2位	広瀬(祥)	ホワイトマーブル	チェスナットファーム	72.27
3位	串間	ルウエリエ	ライディングファーム・フセ	69.35
4位	松井(亮)	タイキマーシャル	S46卒	75.91

☆標準小障害 B part2

				減点	タイム
1位	瀬川	トウカイポイント	ノーザンホースパーク	0	59.77
2位	中脇	ルフィー	チェスナットファーム	0	59.82
3位	渡辺	ザッツザハリ	浦河高校	0	63.81
13位	出戸	北閃	北大(2)	4	80.16
17位	鎌田	北閃	北大(2)	8	76.13
18位	武藤	北椎	北大(3)	8	94.90
落馬 E	海道	北閃	北大(2)		
経路 E	斎藤	北椎	北大(3)		

☆第3課目 part II				得点率
1位	村山	ショットガンニー	ノーザンホースパーク	54.80%
2位	堤	オリオン I	十勝柏友会乗馬クラブ	54.13%
3位	竹之内	ウインゼニス	オーフルホースコミュニン	54.00%
8位	岩野	北煌	北大(2)	46.67%
10位	綾部	北煌	北大(2)	40.00%

●第45回北日本学生馬術大会
(於・福島 8月20日～24日)

☆二回走行

				①減点	タイム	②減点	タイム
1位	山川	エルグレイ	北大(4)	0	87.14	4	82.81
2位	神田	柏爵	帯畜大	0	82.81	8	84.35
3位	檜森	柏嵐	帯畜大	4	102.22	6	94.81
9位	野村	北翔	北大(3)	20	185.52	4	82.96

☆総合馬術競技				調教減点	得点率	耐久減点	タイム	余力減点	タイム
1位	神田	柏爵	帯畜大	69.9	53.40%	0	305.8	0	71.1
2位	福原	柏鳳	帯畜大	71.4	52.43%	0	272.7	4	78.6
3位	植月	柏咲	帯畜大	70.9	52.71%	0	288	12	71.3
余・2反 E	宮本	北慧	北大(4)	72.9	51.39%	100	375.6		
耐・3反 E	吉村	北鳳	北大(4)	73.5	50.97%				
耐・3反 E	谷口	北創	北大(4)	77.8	48.13%				

☆小障害 A

				減点	タイム
1位	小林	マウンテンロード	岩手大		
2位	出戸	北慧	北大(2)	0	72.82
2反 E	小島(真)	北遥	北大(4)	17	132.46
2反 E	村木	北鳳	北大(3)		
45秒 E	伊藤	エルグレイ			

☆小障害 B

				J.O.減点	J.O.タイム
1位	川村	ハワーステイション	東北学院大	0	32.84
2位	真田	北遥	北大(3)	0	41.08
3位	今井	エペレストクライマ	酪農大	1	91.37

●第22回北海道秋季馬術大会
(於:ノーザンホースパーク 9月12日～14日)

☆標準小障害 A 飛越競技

				減点	タイム	J.O.減点	タイム
1位	小野	ラインハート	RC メインフィールズ	0	67.57	0	38.12
2位	楠木	ホナペティ	ノーザンホースパーク	0	86.31	0	42.06
3位	松井	タイキマーシャル	S41卒	0	87.40	4	39.17
12位	山川	ネイチャーヒーラー	北大(4)	12	83.89		

☆標準中障害 D 飛越競技

				減点	タイム	J.O.減点	タイム
1位	小野	ラインハート	RC メインフィールズ	0	66.26	0	39.04
2位	平島	アリストキャッツ	北星乗馬クラブ	0	82.07	0	43.89
3位	松井	タイキマーシャル	S41卒	0	74.96	0	44.12
6位	出戸	北慧	北大(2)	12	102.12		

☆標準中障害 B 飛越競技

				減点	タイム
1位	楠木	ジュテーム	ノーザンホースパーク	4	83.56
2位	山川	エルグレイ	北大(4)	8	84.82
3位	畠山(朋)	ダンテライオン	三木田乗馬学校	18	107.64

☆標準小障害 C part1

				減点	タイム
1位	大林	ナーシャルバトル	新冠乗馬スポーツ少年団	0	67.84
2位	南川	緑麗	酪農大	0	79.68
3位	金沢	ウイントライオン	新冠乗馬スポーツ少年団	0	80.68
6位	田中	北椎	北大(3)	0	82.84
11位	国井	キティホーク	H15卒	0	82.53

☆標準小障害 C part2				減点	タイム
1位	水沼	ダンディフラッシュ	北星乗馬クラブ	0	72.75
2位	清田	北鳳	北大(2)	0	77.72
3位	細井	ハップス	マオイホースパーク	0	79.18
6位	山本	北鳳	北大(2)	0	89.65
9位	野村	ネイチャーヒーラー	北大(3)	4	86.79

☆中障害 D S&H				タイム
1位	相田	モンテヴェルテ	モモセライディングファーム	73.78
2位	百瀬	オーエン	モモセライディングファーム	75.65
3位	森川	コーステディー	ノーサンホースパーク	76.50
4位	松井	タイキマーシャル	モモセライディングファーム	78.90

●第80回北日本学生馬術選手権大会
(於:岩手大 9月23日) 参加選手:谷口、吉村(4)

(予選)		得点率
谷口	オニタイジ	50.61%(ブロック内3位)
吉村	オニタイジ	50.76%(ブロック内2位)
(準決勝)		得点率
吉村	ゴルトサムラー	49.55%(ブロック内3位)

●第44回北日本学生馬術女子選手権大会
(於:岩手大 9月23日) 参加選手:村木(3)、岩野(2)

(予選)		得点率
村木	バリアント	50.61%(ブロック内3位)
岩野	厚竹	50.15%(ブロック内3位)

●OB 戦

(於:北大 10月12日)

☆120cm障害飛越競技

				減点	タイム	J.O. 減点	タイム
1位	出戸	北閃	北大(2)			4	52.17
2位	野村	北翔	北大(3)	0	71.45		
3位	山川	エルグレイ	北大(4)	7	95.85		

☆100cm障害飛越競技

				減点	タイム
1位	清田	北鳳	北大(2)	0	68.15
2位	村木	北閃	北大(3)	0	75.45
3位	一色	北閃	H19卒	0	80.18
4位	野村	ネイチャーヒーラー	北大(3)	4	83.25
5位	出戸	北彗	北大(2)	7	96.43

☆80cm障害飛越競技

				減点	タイム
1位	岩野	北遥	北大(2)	0	63.78
2位	武藤	北遥	北大(3)	0	66.00
3位	山本	北煌	北大(2)	0	75.47
4位	松井	北椎	S46卒	0	76.20
5位	住江	北椎	H20卒	0	78.29
6位	国井	北鳳	H15卒	0	78.75
7位	池谷	北鳳	H19卒	0	84.91
8位	荒瀬	北煌	H6卒	2	90.51
9位	海道	ネイチャーヒーラー	北大(2)	2	92.91
10位	前田	北遥	H18卒	6	91.53
11位	斎藤	北煌	北大(3)	6	93.75
12位	田中	北椎	北大(3)	8	101.00

☆クロスバー障害飛越競技

1位	梁取	北椎	北大(1)	72.36
2位	速水	北鳳	北大(1)	68.56
3位	坂田	北椎	北大(1)	66.63
4位	村木	北柊	北大()	65.87
5位	瀧澤	北鳳	北大(1)	65.39

☆リレー競技

順位	チーム	メンバー	タイム
1位	チーム A	北柊 宮本 山中 一色	216.00 北大(4) 北大(4) H19卒
2位	チーム現役	北柊 梁取 速水 坂田	228.56 北大(1) 北大(1) 北大(1)
3位	チーム B	北柊 荒瀬 井上 伊藤	168.79 H6 卒 S57 卒 北大(2)

●第58回全日本学生馬術大会

(於: JRA 馬事公苑 10月31日~11月5日)

☆学生賞典障害飛越競技

順位	選手	馬名	所属
1位	佐藤	南舞	早稲田大
2位	松本	ルナモジュール	専修大
3位	柘植	明峯	明治大
4位	中谷	バーデンバーデン	関西大

J.O. 減点	J.O. タイム
0	41.78
0	42.26
8	39.20
8	49.08

38位	野村	北翔	北大(3)
2反E	山川	エルグレイ	北大(4)

一走目 減点	一走目 タイム	二走目 減点	二走目 タイム
14	98.72	13	79.63
2反E		-	

☆学生賞典総合馬術競技

順位	選手	馬名	所属
1位	大友	桜蓬	日本大
2位	篠原	明政	明治大
3位	飯島	桜鶴	日本大
棄権	出戸	北彗	北大(2)

調教 減点	耐久 減点	余力 減点
48.3	0.00	4
55.9	0.00	0
56.1	0.00	0
82.6		

●第48回北日本学生馬場馬術定期新人戦

(於: 東北大学 11月15日) 参加選手: 瀧澤、速水、梁取、坂田(1)

(予選)

順位	所属	選手	馬名	得点率
1位	北大	瀧澤	杜円舞	46.67%
	各馬賞	速水	ハワーステーション	47.65%
	各馬賞	梁取	オレゴングレート	50.00%

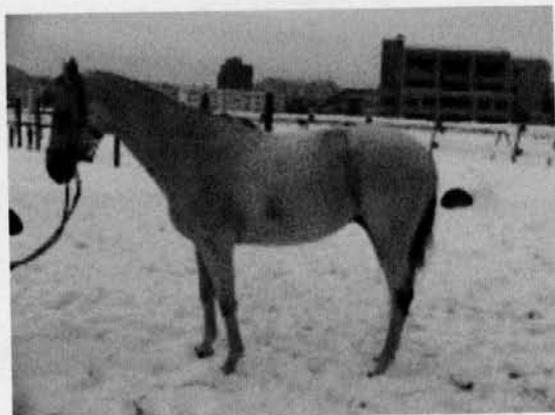
2位	岩手大
3位	福島大、弘前大

(決勝)

順位	所属	選手	馬名	得点率
1位	東北大			
2位	北大	瀧澤	インターハント	47.76%
		坂田	マスターモップ	40.12%
		梁取	ラストイー	49.53%

◇調教報告◇

北誓 (メジロゲネシス)



セン サラ 芦毛

平成5年5月30日生

北海道伊達市産

父 メジロティターン

母 メジロマリア

平成10年11月8日入厩

宮本 亮

つい先ほど、無事、馬運車が北大に着いたという連絡が入りました。

昨日、11月5日、耐久の直前になって疝痛を患い、耐久の棄権だけでなく輸送の回避までも余儀なくされかけたことを思い、今はその報告に少しほっとしているところです。今年から導入されたポイント制によりそれまで乗っていた自分の馬に後輩が乗って全日に出るという立場を体験することになりましたが、それも終わり、今は本当の意味でゲネシスとの2年間も終わったように感じています。そんな区切りを迎えたところで、この報告を書き始めました。報告の前に一つ。全日中、ゲネシスと出戸をサポートしてくださったのは木村さんと一色さんでした。僕がいてもと思うところはありませんでしたが、本来ならば僕がやらなければならないことを快く引き受けてくださり、本当に感謝しています。一色さんは耐久当日にも足を運んでくださり、下見だけでなく疝痛の対応にも力をかけてくださいました。出戸だけでなく僕までも焦りがちになったあの場面で何とか冷静に対処できたのは一色さんのおかげでした。本当にありがとうございました。

ゲネシスを担当した2年間、僕は求められた結果を残せず、それどころか馬の状態を悪化させてしまい、馬術部に悩みの種を残しただけでなく、ゲネシスを育ててきた先輩方の大変な努力をも台無しにしてしまいました。昨シーズン顕著に見られたのはラインなど、連続障害における拒止でした。蠟燭飛びをしがちで、次へのスタートが遅れるといった馬自身の問題もありますが、障害間での「追う」「引っぱる」といった乗り手の行為がゲネシスの連続障害への苦手意識に拍車をかけたのだと考えられます。もう一度、この馬には大きく体を使って飛ぶことを思い出させる必要があります。併せて、ラインなどの連続障害においても、人はできるだけ余計なプレッシャーをかけないよう、“我慢”する必要があります。

次は幸い馬歴の長い出戸が後を継いでくれるようです。彼の口の“軽さ”は一級品ですが、ゲネシスがそれに劣らずまた“軽々と”障害を飛越してくれるようになることを祈っています。

最後になりましたが、この1年間、未熟な僕を面倒見てくださったのは札幌競馬場の歌川さんでした。歌川さん

には僕が1年の時からとても良くしてもらい、プライベートでもよく色んなところに連れて行ってもらいました。歌川さんに教わったのは、「乗り方」、そして「飲み方」でした。1年の時からずっと歌川さんの乗り方を真似てきました。何度か「乗り方が似てきた」と周りの人に言われたときは少しうれしく感じました。ただ飲み方は真似できませんでした。「飲みが足んねえんじゃねえのか？」と冗談半分に言われるのは毎度のことでした。結果を残すことが自分のすべきことだと感じてやってきましたが、結局確かな結果は残せず、申し訳ない気持ちでいっぱいです。また、それは乗馬センターの馬たちにも同じです。ゲネシスに乗って犯した失敗は数多くありましたが、乗馬センターで経験した失敗がなければその数はもっともっと多くなっていたことでしょう。午前中の授業をサボって乗馬センターに乗りに行った日、午後の実習を抜け出して空けておいてもらった馬に乗りに行った日、そんな日もうこないと思うととても寂しいです。

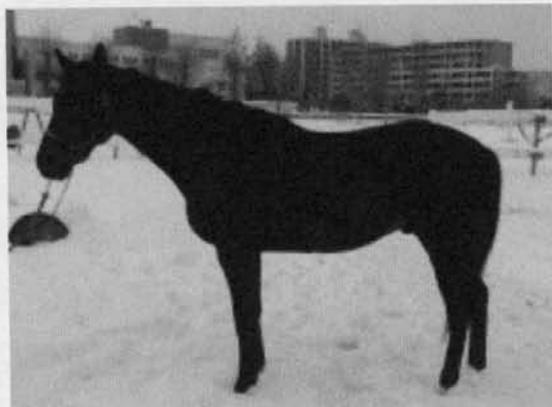
ゲネシスを中心とした2年間、いや4年間はとても充実した時間でした。人と馬にめぐまれた時間でした。幸せでした。またそんな時間を探したいと思っています。

モモセライディングファーム

札幌市清田区美しが丘3条3丁目

TEL 881-0470

北鳳 (ヤスノインディアン)



セン サラ 鹿毛
平成8年4月29日生
北海道三石郡三石町産
父 ダイヤモンドショール
母 ヒカリハード
平成13年12月2日入厩

吉村 誠司

昨年に続きヤスに乗せていただいて、この一年間は総合競技で完走することと全日学に出場することを目標にやってきました。しかしこの目標を達成するどころか、昨年よりも内容の悪い1シーズンにしてしまったことは本当に情けないです。

半沢杯が始まる前、雪解け後の馬の状態は非常によく、北大の馬場でも110cmの経路は自信を持って回れていました。しかし半沢杯の直前に癖になっている肩跛行を出してしまい、半沢杯をパスして新緑大会に臨むことになりました。

新緑大会では直前に跛行していたもののそれまでの調子の良さから120cmに挑戦することに決めました。フレンドリーでは馬の邪魔をせずに乗ることを心掛け、ヤスも障害前で詰まることなく大きく跳んでくれました。ややぶっつけ本番で不安もありましたが、次の120cmに向けていい感触を得ました。ところが本番前の練習では人が高さを意識しすぎ、スピードで高さを跳ぼうとして練習障害で拒止し、本番でもボリュームのあるオクサーで拒止し失権してしまいました。

ヤスはもともとボリュームのある障害には怯むところがあり、この大会で追って突っ込ませるように跳ぼうとしたことでさらに恐怖心を植え付けてしまいました。自分はこの時点で大きな失敗をしてしまったわけですが、まだまだシーズン最初の大会ですからいくらでも立て直しようはあったと思います。しかしその後も基本的なところから見直すこともせずとにかく走らせることしかなかったため、だんだん減却扶助も効かなくなり、下級生にも乗りにくい馬になってしまったのではないかと思います。

そんな中迎えた北日では人と馬との信頼関係も崩れていて、耐久審査で森の中に入ると完全に手の内から外れ、かといって抑えきれないくらいに障害に向かっていくわけでもなくカフィンで失権してしまいました。調教審査では昨年よりパーセンテージは上がりましたが、馬の調教段階が進んだからでもなく、乗り手の大きな成長があったからでもなく、ただ単に二年間乗って経路を回り慣れたことでの点数の伸びだったように感じます。

これからはまず脚反応、減却扶助などもう一度丁寧にやっけていき、人と馬との信頼関係を回復することが大切だと思います。そうすることで以前の障害に対する前向きさも出てくるはずですよ。パスキユールに関しては、徐々に

体を使って跳べるようになってきたと思うので、あとはコンビネーションなどで馬が自分から跳んでくれるようにしていけば自信を取り戻してくれると思います。

野外コースでは、今回の場合は人と馬との関係が崩れていたのが参考にならないかもしれませんが、まだまだ雰囲気飲まれるところがあるので、馴致は積極的に行くべきです。特に野外のコースを回るといのは大きな経験値になるので、畜大に行って一度は必ず経路回りをしなければなりません。

今回の失敗は形にこだわったり、失敗の原因もわからないまま過ごしたりした期間が長かったことだと思います。乗り手の成長なくしては馬も成長しませんし、もちろん結果が付いてくることもありません。今さら後悔しても仕方がないことではありますが、もっと早く相談すればよかった、あれをしとけばよかったなど思い起こすことはたくさんあります。現役のときに自分の実力を客観的に捉え、何が足りないのか分析して目標に向かって進んでいくことが重要だと思います。

最後になりましたが、成績の出せない自分を心配してくださり、いつも相談に乗っていただいた林兄、本当にありがとうございました。まだ自分は役目を果たし切れていないので、またヤスを東京に連れて行けるようにこれから精一杯サポートしていきたいと思います。

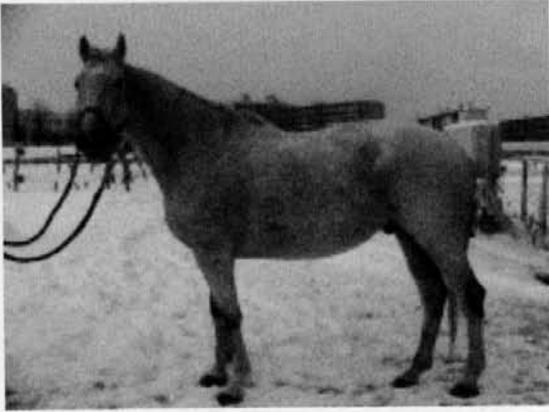
中古車と整備

民間車検工場

株式会社 **北大モータース**

札幌市北区北18条西5丁目1-36 ☎726-1526

エルグレイ



セン サラ 芦毛

平成元年6月10日生

北海道三石郡三石町産

父 メジロエスパーダ

母 スナークリーズン

平成14年9月16日入厩

山川 倫明

僕とエルグレイの一年間に対して、周りの方々は一切どういった評価を下すでしょうか。全日出場という僕らに課された最低条件をクリアしたのでよしとするか、それとも、全日での二反抗失権という結果を見て、役割を果たせなかったと判断するでしょうか。僕自身としては、全日が入賞するというのが一つの目標でありましたので、結果に関しては非常に悔いの残るものでありました。ただ、過程に関しては決して間違いはなかったと思っています。

では、具体的に一年を振り返ってみたいと思います。馬に関しては、障害を跳ぶことには何の不安もありませんでしたから、あとはいかに人が基本に忠実に乗ることで、馬が動ける状態にしてあげるかが肝心でした。具体的に言いますと、まずは、しっかりと坐骨で座れるといえますか、はまりのよい安定した騎座が重要です。鞍はまりがよければ、馬はキビキビと歩きますから、次に大事になってくるのは、馬の前進気勢を受け止めることのできる柔らかい拳でしょう。ごく当たり前のことを述べているように思うかもしれませんが、これらが馬から感覚として学んだ最も重要な点でした。これらのことは、乗り替わった秋の時点でも漠然と理解していたことではありますが、いざ乗って形にしようとしてもなかなかうまくいかないものでした。失敗例を挙げますと、拳が固く、馬を押さえつけるような乗り方をしていたということです。先に、騎座と拳が重要であると述べましたが、秋時点の自分は、騎座に関してはそれなりに安定していたように思いますが、難点は拳が柔らかく使えないことでした。自分よりも優れた乗り手に乗ってもらおうと、よい頭頭で、馬がキビキビと動くため、それを真似ようとするとう拳が固くなるという傾向がありました。このように、よい感覚を掴むことなく春を迎え、シーズン初めの半澤杯では、落馬失権という最悪の形でスタートすることとなりました。原因は、馬を動かせず、障害に向かう状態にできなかったという単純なことでした。続く5月、6月の道大会では、試合慣れた馬に助けってもらう形で110cm、120cmクラスのゴールは切ったものの、まだよい感覚には程遠く、ただ経路を廻ってきただけに過ぎませんでした。

思い描いていたことが形になり始めたのが7月初めころでした。何が変わったかといえますと、馬の前進気勢を受け止め、馬の口と一定のコンタクトを保てる、柔らかい拳を次第に使えるようになっていったことです。できる人にとってみれば、当然のことでしょうが、当時の僕にとっては、大きな進歩でした。これを機に、馬のよいバランスというものも感じ取れるようになってきたように思います。具体的には、頭頭の位置もよく、後軀の方にバラ

ンスがあり、減脚扶助もしっかり伝わる状態でしょうか。これがしっかりできれば、馬も障害に気持ちが向きま
し、飛越後のバランスバックもスムーズに行くのではないのでしょうか。実際、7月の道大会の結果にも現れました。
フラットワークで行ったことをそのまま経路に生かすように心掛け、よいバランスの一定のペースで廻ってくるこ
とができ、120cmクラスで優勝することができました。ようやく北日に間に合ったという気持ちでした。あと
は北日までの1ヶ月の間で、掴んだよい感覚をより磨いてことに専念しました。

北日までは、高齢での福島への輸送ということで、もちろんその辺りに気をつけて調整していきました。そして、
満足できる状態で二走を迎え、一走目が満点、二走目が1落という結果で見事優勝することができました。大雨の
中馬が本当に頑張ってくれました。唯一心残りなのは、二走目の後半で人がへばったことで、馬がのびてしまい、
最後の最後で落下をしてしまったことですが、これはご愛嬌ということで。

福島から帰札して、全日までは2ヶ月あまりあり、130cmという高さは僕にとって未知の世界でしたので、
全日の予行演習のつもりで、9月の道大会で130cmクラスにエントリーしました。結果、2落はしたものの、
馬の状態はよい意味で平行線、人の感覚はより磨きがかかったのではないのでしょうか。特に、飛越後のバランスの
戻りはとてもよいものでした。ここから全日までの間も、特に調整の方法は変化させず、よい感覚を保つことに留
意しました。

そして、いよいよ迎えた全日ですが、状態に関しては、やはり満足なものでしたが、結果は2反抗失権という悔
いの残るものでした。反省点も含め、全日当日のことを振り返りたいと思います。馬事公苑では、厩舎と競技を行
う馬場が離れており、たいていの人馬は厩舎付近の馬場で準備運動を行ってから、競技会場の方へ向かい、隣の準
備馬場で運動をするもので、僕も同様の方法をとりました。フレンドリーでは、会場の雰囲気慣らすことに重点
を置き、水濠を含めた5個の障害を飛越するのに留めました。内容は、満足できるバランスで、水濠の後の戻りも
よく、踏切位置もほぼピッタリで、本番に向けてやるべきことは全てできたという気持ちでした。しかし、翌日の
一走目で失敗を犯してしまったのです。前日同様、厩舎付近の馬場で速歩、駈歩まで行い、9割ほど完成させてか
ら本馬場へと移動する予定でしたが、5、6割というところで、スチュワードから、出番が近いので本馬場のほう
へ移動するよにとの指示がありました。まだ出番まで時間があつたのですが、どうしてもとのことだったので、
渋々移動をしました。なぜ、移動を直前にしたかったかという、実際、道大会でもそうしてきた通り、エルグレ
イには直前の飛越数をそれほどこなす必要はないと考え、とにかく数をこなす関東・関西勢でひしめき合う準備馬
場に長くいて、馬が興奮しすぎるのを避けたかったためです。いざ移動を試みたら、やはりそれほど早く到着す
る必要もなかったのです。このことが影響したとは言い切れませんが、運動を始めてみると、馬がキョロキョロし、
前へ出るよにとの合図を送っても、馬がふっと立ち止まるような仕草を見せました。この時には人も舞い上がっ
てしまい、これまで保っていたハミから伝わる人馬の関係はすっかり崩れていました。そのような状態で出番を迎
えたわけですから、バランスは悪く、馬が前のめりで走るため、踏切位置も中途半端になってしまいました。そこ
で4番の垂直を突っ込んで跳び、バランスを崩して、そのままバランスが後ろに戻ることなく5番のダブルに向か
い、左肩から逃げるように1反抗目です。それからは、後がないことに焦り、ただ脚で挟むだけの芸のない乗り方

で、11番のトリブルの後に鈍角で置かれた12番のオクサーで、力なく2反抗目を喫してしまったわけです。僕の正直な気持ちとしては、入賞して、北大にはエルグレイという素晴らしい馬がいるのだということ、全国の人に見せつけたいという気持ちでしたので、馬には本当に申し訳ない気持ちです。結局は、些細なことでリズムを崩してしまった自分が未熟だったということです。もう一つ反省すべきなのは、他の人に助けを求めなかったことです。全日では、自分の力でどこまでやれるのか試したいという気持ちが強すぎました。2反抗目を喫した障害も、下見の際から注意すべきだとは思っていました。そうであるなら、木村兄をはじめとした頼れる先輩が多くいたのだから、しっかりアドバイスをしてもらうべきでした。

練習の内容については詳しく述べていませんでしたので、最後に補足します。簡単に言ってしまうと、目指す状態は障害が跳べるように、馬のバランスを起こし、後駆を動かしてあげることだと思います。そのために、まずは常歩で輪乗りをし、巻乗りや停止などをいれ、脚と拳の力のバランスを確認します。それができれば、馬のバランスを起こす手段として、前肢旋回→肩を内へ・腰を内へ→斜め横歩→横歩→後肢旋回といった手順で行います。ここまでいけば8割がた完成と言っていいでしょう。あとは同じバランスで速歩、駆歩を確認したら文句なしだと思います。

後半は、ただの言い訳のような感じになってしまいましたが、要するにこの調教報告を通じて伝えたいことは、基本が大切だということです。新馬などまだ経験が浅い馬にはより多くの技術や知恵を必要としているのですが、エルグレイ・北翔などの経験豊富な馬とコンビを組めるなら、人のバランスや拳といった基本がしっかりとしていたら、馬がカバーをしてくれるはずですが、僕の弱点が拳であったように、人それぞれで課題は異なってくると思います。しっかりと自分の実力を見極めて、根気よく練習に励めば、何かしらよいことがあるのではないのでしょうか。

知ったような口を利いてしまいました。現時点で僕がどのように考えているかを皆さんに知ってもらいたいとの意図で書きました。もう少しだけ書きたいことがありますので、ネイチャーヒーラーの調教報告の欄でもぜひお付き合いください。

味の福々亭
札幌市北区北20条西5丁目
TEL 746-6065

満足の味と量!

各種定食 650円~	昼の部 11:30~14:00
カレー丼 600円~	夜の部 17:00~24:00
	定休日 土曜日

10名様以上でお越しの方は、一割引きます!

安い!うまい!ボリューム満点!!
肉みそラーメン・肉チャーハンの店

大 将

ラーメン

18条店 / 737-7330 (~AM5:00)
22条店 / 747-7776 (~AM3:00)
25条店 / 707-5707 (~AM1:00)
麻生店 / 736-8800 (~AM3:00)

25条店、麻生店では出前も承っております。ぜひご利用下さい。

北翔 (シンコウブラウン)



セン サラ 鹿毛

平成2年3月6日生

北海道浦河郡浦河町産

父 クライムカイザー

母 アーマゲイ

平成15年1月19日入厩

野村 基惟

シンコウブラウンは昨年度的全日学を終えた後の11月に谷口兄から引継ぎ、普段の練習はOBの林兄に見ていただきながら乗っていくこととなった。権利馬に乗せてもらう以上、実力云々は抜きにして目標は全日学への権利の獲得とした。同時に、しっかりとした調教が施された馬に乗り続けることによって、馬の良い動き・正しい動きを自分の体に覚え込ませることもまた大きな目標であった。

また同馬は右後肢の故障を抱えている上、いよいよ高齢(18歳)となってきたため、1年を通じて馬体管理には万全を期すことが不可欠であった。

上述の通りシンコウには既にしっかりとした調教が施されており、体躯の柔らかさや歩様の力強さ、そして何より障害に対する前進気勢が大きな武器であるように思う。乗り手がすべきことは、調教というよりは寧ろ、同馬の能力を競技会で最大限発揮させてあげること・馬の邪魔をしないことである。普段のFWから準備馬場での運動まで、常にこれを根底に据えて運動していくべきであるように感じた。

<FWについて>

FWでは、常歩から丁寧に組み立てていくことが大事だと思う。常歩では、しっかりと元気よく歩かせて輪乗りを作った中で、①巻き乗り・S字手前変換・8字乗り、②前肢旋回・反対姿勢の前肢旋回、③斜め横肢・ハーフパス、の3つステップを作って運動した。これらの運動を1つ1つこなしていくことによって、肩を張ったり腰が逃げたりすること無く、後躯を力強く踏み込んでハミを真っ直ぐ受けた状態を作ることができたと思う。この状態が作れていれば、速歩・駈歩に移行して馬が大きく動いてきても、手の内から外れずに運動できた。逆に常歩がしっかりできていないときは、速歩・駈歩になって馬がはみ出してコントロールが効かなくなったり、乗りやすさを求めて動かさきれず失敗したりするが多かった。他の馬に比べて、特に後躯を動かしながらより入念に体をほぐしてあげることが重要だと思う。

具体的には、左手前では馬としては姿勢はとりやすいものの腰が外に逃げる傾向にあり、また右手前では内方後肢の踏ん張りが効かない分だけ姿勢がとりづらく、回転すれば内に倒れこんでくる傾向があった。自分が運動していく中で、内に倒れこむ右手前で内方脚を使うことに関しては意識ができて、左手前では外に逃げるからといって外方脚や手綱に意識が向きすぎて内方脚がおろそかになることが多く、結果正しい内方姿勢が作れないといった失敗を数多くしてしまった。自分では気付かないうちに腰を逃がしたまま回転を繰り返して、結果としてそれが駆歩や経路走行などで、左手前でのスムーズな回転ができないことにつながっていった。力強い駆歩ができる左手前だからこそ、しっかりと内方脚を使って姿勢を作ることが大事だと感じた。騎座そのものをやや外方に置いた中で、内方坐骨と内方脚と一緒に作用させていくイメージだと思う。

<障害・経路走行について>

シンコウの障害飛越能力に関しては全く不安がない。そのため、ポイントはいかに「真っ直ぐ、真ん中、元気良く」という基本中の基本を実践できるかにある。冒頭でも述べた通り、FWもこれを達成するために行われるべきである。

春先は馬にも元気が有り余っており、また人が駆歩についていけず、しっかりと動かそうとすると走られて経路走行どころの状態では無かった。だからといって自分が乗りやすい程度の駆歩で障害を飛ばそうとすれば、さすがのシンコウといえどもスムーズな飛越ができなかった。初のノーザンでの試合となった新緑大会では、人がシンコウ本来ペースをつかめず、ただ駆歩をしているだけといった状態での経路走行となってしまった。走られるのを恐れて手が強くなり、結果終盤に走られてしまう悪循環であった。林兄にも「走られるぐらいなら、走らせる意識でいけ」というアドバイスをいただいた。シンコウのような動きの大きな馬では、自分が乗りやすい程度での駆歩では足りず、自分から推進していった少々走られるぐらいの意識の駆歩がちょうど良いのだと感じた。積極的に脚を使っていくことが馬を収めていくことにつながるという感覚は、シンコウに乗るまでは無いものだった。春自馬では新緑の反省を活かし、走らせるぐらいに第1障害からとにかく積極的にいった。ペースとしては新緑よりはだいぶ改善されたが、推進する際に人が動きすぎ、前掛かりになり過ぎてしまった。ペースは良くても、これでは北日学レベルの経路では厳しいというところだったと思う。公認大会は、ある程度自分では自信を持って望んだが、右への直角回転で内に倒れこまれて反抗、そしてリバプールを抜けた後のダブルのB障害を切ってしまった。ただ前に出すだけでなく、前に出しながら馬をコントロールできなければならないと感じた。同時に、ダブル・トリプル障害には特にしっかりとした駆歩で入っていかないと右へ切ってしまうことがシンコウの弱点であることも再確認した。また、人の練習のために冬から乗り続けてきたこともあって、後肢に疲労がたまってきてしまった。北日学までは運動量をやや減らし、普段の練習で谷口兄や林兄にも乗っていただきながら馬を立て直すべく調整を進めた。

北日学は、1走目で気をつけようと思っていたダブルで1反抗してしまった。ダブルに入る前の障害への向かい

方が悪く、公認大会と似た様な失敗になってしまった。追い込まれた2走目は思い切って前を出して行ったのが功を奏して、馬に助けられながら1落下で切り抜けることができた。気持ちが入った分人が動きすぎてしまっていたが、「飛んだら起こして出し直す」というリズムをつかむことができたのは大きかったと思う。

全日学では、谷口兄に乗っていただき、また馬事公苑という場所柄も影響してか、シンコウの動きがこれまでとは比較にならないほど良くなっていた。馬のバランスがしっかり起きており、力強い駆歩の中でも軽いコンタクトで馬を支えることができた。2走目は特に良い駆歩ができたと思う。経路をなぞることで精一杯で細かい部分は意識することができなかったが、馬の状態の良さがカバーしてくれたように思う。飛んでからの回転などをよりコンパクトにしていくことなど、たくさんの課題は来年の道大会などで練習していきたい。

<最後に>

目標としていた全日学出場を果たすことができ、その舞台でシンコウの持つ実力を体感できたことは非常に良かったと思う。ただ、北日学・全日学の下乗りを含めて、「シンコウの力を発揮できる状態に持っていくこと」に関しては完全に林兄・谷口兄に頼りきりになってしまった。来年はその部分を自分で行き、掴んだ「良い感覚」に向かってじっくり考えながら、そしてまた全日学の舞台へ挑めるように乗っていきたいと思う。

最後に、OBという立場にも関わらず毎朝練習を見ていただいた林兄、下乗りを含めて何度も馬を立て直していただきたくさんのアドバイスをいただいた谷口兄、本当にありがとうございました。来年もシンコウと共に馬事公苑を目指すべく1人で頑張ります。

美味しさ発見 新しくオシャレになった
時の館で、一時を
すごしてみませんか。



カレーライス
焼肉丼
ソフトクリーム
各種あります。

営業：11:00~24:00
N18 W7
TEL 726-0158

カレーから明日を見つめる
自由人舎 時館

北椎 (シーベスト)



セン サラ 黒鹿毛

平成9年6月5日生まれ

北海道浦河郡浦河町産

父 タマモクロス

母 シークイン

平成15年8月25日入厩

武藤 将充

前任の小島兄も書いていますが、シーベストは非常にいい練習馬です。高いレベルは求められずとも、素直で簡単な運動ならば楽に行うことができ、障害も LC クラスなら問題なく帰ってきて、自分が乗っている間、ハ行や病気も一切しないという丈夫さを持ち、特にシーズン始めの1, 2年生の練習にはぴったりなのではないでしょうか。

自分がシーベストのチーフをやっている間は、とにかく馬を動かすということで精一杯で、それ以外の部分に関してどうこう考えることが出来る段階ではありませんでした。また、馬を動かすために何か特別なことをしたわけではなく、巻き乗りや前肢旋回、輪乗りの開閉などのフラットワークを日々行いながら、人が徐々に上達した結果馬が動くようになったという感じでした。当初は横運動等も積極的に練習しようとしたのですが、馬の動きが悪くなってしまえばかりだったため、春すぎ頃はほとんど前述したようなことばかりを中心にしていました。それでもやはり馬の動きもすこしは良くなっていき、人も気づけば横運動をフラットワークに取り入れることが出来るようになっていました。

変わったことといえば、春にゴーフの使用を試みましたが、その当時まだ馬を動かすことが出来ない状態であったため、ゴーフがきちんと作用する長さで装着すると、それにより馬のリズムが悪くなる状態だったため、しばらくして使用はやめました。代が替わる直前の頃に使ってみたらまた違った結果が出たかもしれませんが、その後は使用することはありませんでした。その時期以外は前任の小島兄同様常時マルタンをつけて運動していました。

半澤杯では馬場にも出ましたが、とても馬場といえるようなことはできず、自身が馬場の試合に出る意義は薄いと感じたため、以後は出場しませんでした。

シーベストが元気よく動くようになってきたと感じると同時に、ハミにもたれる感じも強くなってきました。結局、のめらせていただけだったからですが、大会等で馬のテンションが高いとき等は人が我慢しきれずに持っていかれてしまうとコントロールが効かなくなり、簡単に切られ失権してしまったりしたため、多少強引な感じはありましたが、しっかりと持っていられないように我慢して乗るようになることで、切られることは減りました。

夏中盤ごろになんとか、まともな経路走行が出来るようになりました。経路を回ってこられるという自信を人が

感じてからは余計な力も抜けて、楽に回れるようになったと思います。とりあえず馬は良く動いていてくれたので、この当時はある程度満足していましたが、今思えば、のめるのを抑えようと人がぶら下がった状態であったため、最後の大会でも拒止されてしまう等、人馬とも決して良い状態で動いていたとは言えない状態だったと思います。

そのほかには、練習馬であるということで、下級生が楽にまたがっていられる状態であるかどうか気をつけて乗っていました。もともといい意味で鈍感な部分があり、手綱による操作や速度の調整もしやすい馬ですが、馬がひどくのめっていて、拳を譲ると速くなっていってしまうようなときがあったので、馬が行こうとしたところをしっかりと我慢し、一定の速度で駈歩等できるように、準備運動の中で改善するようにしました。

一年シーベストにのってきて、最終的には何とか90cmなら問題なく、100cmでもリバプールがなければ帰ってこられるのではないかと、思えるところまで来ることができましたが、今思い返せば、もっと上達できる手段はいくらでもあったと思います。チーフになって一番感じたことは自分の未熟さでした。それでも自分がチーフなのだから、という変な気負いがあったせいで、うまくいかなかった気がします。初心者の集まりであるため、同じように技量が足りない状態でチーフになる人も多いと思いますが、とくに3年生などまだ先がある場合は、チーフだからこのぐらいのことはやらないと……と考えるよりも、まずは人が余裕を持って乗っていられる、出来ることから始める事が上達への近道だと感じました。

最後になりましたが、練習を見ていただいた貫名さん、小島兄、いろいろなアドバイスをくれた諸先輩方、休部明け早々のこんな自分にチーフを任せてくれた部員の皆さん、本当にありがとうございました。この経験を次へ生かしたいと思います

赤ひげ

で

よくコンパをやります。次のコンパが楽しみだ。

札幌市北区北22条西5丁目2-5

TEL 707-5076

北焔（ウインジーニース）



セン サラ 鹿毛

平成 12 年 4 月 19 日生

北海道千歳市産

父 バブルアムフェロー

母 サクラギャル

平成 16 年 10 月 24 日入厩

谷口 善彦

今年も引き続きウインジーニースの担当となった。昨年の部報にも書いたとおり、この馬は扶助に対する許容範囲が狭く、それがFWや経路での反抗、逃避に繋がるがよく見られた。そこで今シーズンは、基本的な運動におけるクオリティを高め、馬の許容範囲を広げていくこと、つまり、まずは練習馬として成立している状態まで持っていくということを目指して調教を行った。

雪が積もるまでの期間は、昨シーズンの後半同様、強いコンタクトを要求せず、馬が楽に動けるように運動を行った。北大の馬場で経路を回るときも、高さは80cm程度にとどめ、基本的に2ポイントで乗った。人は障害のラインに入るまでの馬の前進気勢、ラインの取り方だけ注意し、障害の前後は人がじっと待っているよう心掛けた。これを繰り返すことで馬が障害に対して幾分前向きになり、以前より飛び付きが良くなってくるのを感じることができた。

しかし、その後札幌競馬場で行われたクリニックでこの状況は一転した。練習馬の部もあるということで、もう少し経路での経験を積ませ、安定感を得たかったこの馬にとっては良い機会だと思い参加したのだが、いかんせん練習のレベルが高すぎた。FWのクオリティが大きく求められるプログラムであったため、まだまだ未完成なこの馬にとっては過度な要求をされる場面が多く、そのフラストレーションが溜まった状態のまま障害を跳ばされることで、結果として昨年と同じような負のサイクルに陥ってしまったのである。このクリニックにより、せっかく馬に付きかけていた障害への自信も失い、春以降もう一度レベルを下げてやり直さなければならなくなってしまった。

雪が積もってからは、先ほど書いた通りFW、特に速歩での運動のクオリティを高めることに重点を置いて乗るようにした。ここで最も気を付けたのは拳の位置である。自分自身の大きな欠点の一つに手綱を引き込んで使うという癖がある。このような使い方をしてしまうと人の背中が丸まって馬にぶら下がり、騎座による馬への働きかけが極端に弱くなってしまふ。また、馬に遅れ、ハミも引っ張り続けることになるので馬が体を使えず、とても窮屈そう動きになってしまう。特にジーニースの場合は、体の使い方が極端に下手であり普段から馬が力む場面、窮屈そう

にする場面が多かった。そして、その窮屈さからくる馬の反抗が操作性の悪さを招いていると個人的には感じていた。そのため、人は極力前で拳を整定し、腰を張るよう意識して乗り続けた。馬がハミを外したら脚と騎座の推進を強めてハミに乗ってくるように働きかけ、ハミに突き出してきたら人は少し背を高くするイメージで騎座を正し、拳は我慢したまま脚ではさんで再びハミに収まってくるのを待った。最初は馬の口がなかなか一定の場所で安定しなかったが、先ほどの意識を持って乗り続けるうちに、徐々にではあるがハミに収まって運動できる時間が増えてきた。ある程度収まりが良く安定していると感じた日は、そこから少しずつ手綱の長さを変えて、それでも尚馬がハミに収まってくるか、つまりハミのある場所を求めて馬の口がついてくるかということを試した。手綱を長くする分には馬はハミを頼ろうと首を伸ばしてついてくるが、短く持とうとすると首を柔軟に使えず窮屈になるためか、ハミに突っ張ってくるが多かった。そのような時はあまり短い手綱のまま運動を続けず、馬が力まず動ける場所まで一度手綱を伸ばしてやり、そこで良い状態をキープできるようになってから再び要求のレベルを上げるようにした。

手綱を短くしていくとき、どの程度の突き出しまでは我慢すべきか、どの程度からは手綱をゆるめ楽にするべきか、という線引きの判断は難しい。もし馬が最終的にその場所でも上手くハミに収まりリラックスして運動できるのであれば、人は自分の姿勢・バランスが崩れないよう注意しながら、優しく働きかけ続けてやれば良いのだが、もし最後まで喧嘩し続けるのであればこれほど馬に負担を強いることはない。そのため、ジニアスの場合は馬の許容範囲が狭いこと、自分自身の技術が未熟なことを考慮に入れ、まず普段の運動に対して後ろ向きにならないことを第一とし、極力馬と喧嘩しないよう手綱をゆるす場面を増やした。この判断が結果的には良い方向に働き、雪が融けるころには速歩でなら短い手綱でコンタクトを取ったままでも、馬が力まず運動できるようになっていた。

冬場の成果もあり、春先は非常に楽に、そしてリズム良くFWをこなせた。ただし、これは速歩までの話であり、駈歩に関してはまだまだ課題が多かった。特に目立ったのが左手前である。手綱が長く、コンタクトをほとんど取らない状態では、馬がある程度柔軟に動けるが、少しコンタクトを要求するとすぐに力んでしまい、頭を上げることが多かった。原因は馬が左内方に大変硬いということに尽きるのだが、馬自身が左姿勢を取らされることを極端に嫌うため、脚の反応自体は悪くないのにも関わらず、左拳に対して反抗し左口でハミに突っ張ってくる場面がよく見られた。これは、特に馬を曲げるときにどうしても拳から誘導してしまう下級生で顕著であった。右肩を張って外に逃げるといよりは、左肩を上手くしまえず、曲がれないという具合である。そこでこの状況を少しでも緩和するため、FWにおける左手前の時間を増やし、なるべくハミを譲らせて、頭を下げたまま運動するようにした。そうすることで左口が柔らかくなること、左半身を柔軟に使えることを期待したのだ。左右の口が均等に柔らかければ内方の拳に対する反応も高まり、馬を曲げやすくなるだろうと。もちろん手綱で馬を誘導するというのはあまり良いことではないが、未経験者の多い我が部で練習馬として成立するには、やはり内方手綱による誘導に従順であるということは大事な要素だと思う。

こうしてFWを続けながら徐々に障害にも取り組んでいった。障害の練習ではクリニックの後遺症もあり、やり始

めはやはり障害に対する不信感を示すことが多かった。しかし、障害を跳ばせるということを意識しすぎず、あくまでFWの延長線上と捉え練習するうちにだいたい馬も不信感を拭えたように思う。半澤杯では見慣れない竹柵に反抗を重ねてしまったが、それでも、しっかり馴致することでこの問題は解決し、新緑大会でも及第点と言える経路廻りをする事ができた。その後は次第に馬も自信を付け、再び昨秋の状態まで持っていくことができた。しかし、こうして迎えた春自馬で再び問題が発生した。リバプールへ向かうラインで大きく外に逃避されてしまったのである。追加エントリーしてもう一度出場したが結果は一緒であった。周りからは馴致不足であると言われたが、リバプールはこれまでに何度も跳んでおり、物が入った障害が苦手であることを考慮に入れても、個人的にはどうしても単にリバプールを嫌ったことによるものだとは思えなかった。そんな時に貫名さんに言われたのが人のバランスの問題であった。つまり、馬の苦手な左回転、そしてリバプールの障害ということ人を意識しすぎるあまり、回転中にいつもより強く内方脚を使おうとし、結果的に内方にぶら下がっていたのではないかと、ということである。このご指摘が正にその通りであった。左姿勢が苦手なジーニアスが回転で失速してしまうのを防ごうと脚を強めに使ったが、その時に左手綱を支えにしてしまったため、馬の口を引っ張り、なおかつ人のバランスが内に傾いてしまっていたのである。これを機に、駈歩での人のバランス、そして意識をもう一度改めることにした。普段のFWでは常に真っ直ぐなバランスで乗るように心懸け、回転ではそのまま内方坐骨を強く入れて内方の拳はやや前に出すようにした。また、脚で回転させるということを今まで以上に強く意識し、回転し始めるときにはまず外方脚を引くようにした。これを続けることで左手前でも、回転中の失速がずいぶん無くなり、馬も以前よりは内方姿勢を取り、リズム良く走れるようになった。その後の大会では少しでもリスクを減らすため、物が入らない90cmクラスに出場したが、どちらも安定した経路廻りをする事が出来た。下級生が乗ったときでも今までよりはるかに安定した走行をするようになり、物に関しても、大会前の馴致の感じでは怯むことなく、前向きに跳んでいるようであった。春自馬での失敗が結果として人の欠点を気付かせ、馬の良化に繋がったのかもしれない。さらに、春先から馬の体を柔軟に使えるような運動を多く取り入れてきた効果か、トモの動きも良くなり、ずっと前駈に乗っていた重心が、少しずつではあるが後駈にシフトしてきたと感ずるようになった。

こうしてシーズンを終えることとなったが、正直もう少し時間があればもっと馬の完成度を高める事が出来たかもしれない。ようやく呼吸の合わせ方やこの馬に合った調教のコツが掴め、軌道に乗せる事が出来ただけに、途中での失敗が非常に悔やまれる。この馬に乗るには兎にも角にもバランスが第一である。人が前後左右にブレないこと、どのような状況下でも手綱に頼らず独力でバランスを取ることが出来れば、普段のFWや経路廻りでも相当な反抗を減らす事が出来ると思う。もちろん誘導するときは、まずは下半身から、という意識を強く持ち、回転で窮屈にならないよう拳を前で静定しながら乗らなければならない。その中で、人が上手く馬のリズムに乗って坐骨や脚で推進していければ、大きな問題は生じてこないだろう。欲を言えば普段から顎を譲らせて背中や首を柔軟に使わせることで、トモを動かし後駈にバランスをシフトさせていきたいところであるが、そのために馬と喧嘩するぐらいなら無理せず先程のことを徹底する方が良いだろう。もしくは、乗り始めだけ長めの折り返し手綱で、

ウォーミングアップ代わりに低進運動をするのもひとつの手かもしれない。数回試しただけだが、その後の乗り味が格段に違った経験がある。

結局二年間で完成した練習馬にすることは出来なかったが、昨シーズンと比べるとだいぶ馬も成長し、安定したように思う。とはいえ、下級生、特に一年生でも安心して試合に出せるようなレベルに到達するにはまだ足りない部分があまりにも多い。今後もまずは人に気を付け、悪いところを出させないよう焦らずじっくり調教しながら、永く北大で活躍出来るような馬に成長させていって欲しいと思う。

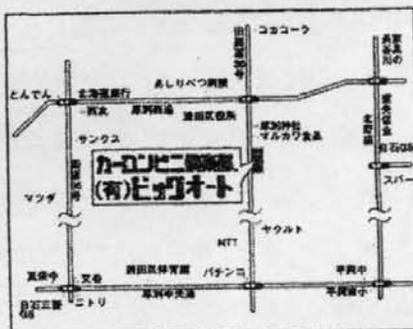
ジーニアス、二年間ありがとう。



カーコンビニ倶楽部

愛車のキズ・ヘコミを

最短**45**分～で直しちゃおう!



カーコンビニ倶楽部

(有)ビッグオート

Tel.011-888-6888

Fax.011-886-2042

〒004-0871 札幌市清田区平岡2条2丁目1番55号

営業時間：8:30～20:00 休業日：日曜日・祝日（日・祝受付のみ可）



北創(サクラスペリオール)



セン サラ 黒鹿毛

平成13年4月9日生

北海道静内郡静内町産

父 サクラローレル

母 サクラヒーロー

平成18年6月24日入厩

谷口 善彦

全日終了後、一色兄からの引継ぎでサクラスペリオールの担当となった。しかし秋以降、疲労の蓄積からくる肩のハ行がひどく、疲労骨折の疑いもあったことから、完治するまで休ませているという状況であった。そのため、本格的に運動を再開したのは年が明けてからであった。スペリオールにはそれまでほとんど跨ったことが無かったので、一色兄に指導して頂きながら手探りでのスタートとなった。最初の印象としては、一色兄が非常に丁寧に基礎調教をしてくださっていたこともあり、素直で、口も柔らかくて、将来性を感じさせる、というものだった。そこで、まずは無理をしない、つまり、悪いことを覚えさせない、変なクセを付けない、ということを一前提として、その中で少しでも馬が良くなるような調教をしようと考えた。

運動再開後は休み明けということもあり、調馬索を主体に体力作り筋力作りに重点を置いて運動を行った。索を回すときでも基本的には顎を譲らせ、背中中の筋肉を付けるようにした。また、歩度の詰め伸ばしを頻繁に行い、最終的には声だけでもそれが出来るようになるまで繰り返した。ここでも、一色兄が初期調教でしっかり教え込んでくださっていたお陰で、人がある程度感覚を掴めれば比較的楽にスムーズな移行が出来るようになった。その後は、少しずつ乗る時間を増やし、一色兄に練習を見ていただきながら常歩、速歩を中心に運動を進めていったが、口向きが柔らかく、むしろ巻き込んでしまうぐらいのところがあったので、極力拳は使わない一方で絶えず脚を使い、ハミに出続けるよう意識して乗った。また、横運動に関しては馬がその扶助をまだ理解していない状態だったので、前肢旋回から始め、徐々に斜め横足に移行していった。ここで感じたのが右ハミに対しての突っ張りである。左右で脚の反応に若干の差があり、それが影響して時々ハミからはみ出してくることがあった。速歩の巻き乗りでも同じような感じであったが、そこまでひどいものではなかったので、少し強く扶助を意識させてやれば動き自体に問題はなかった。速歩をする時は、筋肉を付けたかったこともあり、基本的には長めの手綱で低進気味に運動をさせ、巻き乗りなどは脚だけで曲がるように拳は前に置いておくだけにした。これがスムーズに出来るときは拳を同じ場所に置いたまま少し手綱を持ち直し、回転では脚を強めて内方姿勢を馬に意識させるようにした。この一連の流れ

を重点的に行うことで、脚反応も幾分良くなり、適度にリラックスした状態で姿勢も取れるようになってきた。駈歩をする時でも基本は長めの手綱で外周を回り、隅角や巻き乗りの時は内方姿勢を意識させるように扶助を送った。また、あまり背中に負担をかけたくなかったこと、動きがダイナミックなため人が遅れて口を引っ張ってしまうリスクを避けたかったこともあって、これらの運動はほぼ2ポイントで行った。3月頃には体力もだいぶ戻ってきていたので、少しずつ障害も運動のメニューに取り入れていった。やり方としては、速歩ならキャバレッティから始め、その延長でクロスや低めの垂直を跳ぶように、駈歩なら輪乗りをしながら、といった具合にいたってシンプルに行った。しばらくの間障害を跳んでいなかったスぺにとって雪上での障害飛越は、春以降の障害練習に少しでもスムーズに入るための筋トレを兼ねた準備段階という位置付けで行ったため、あまり高い要求はせず、元気に真っ直ぐ向けて真っ直ぐ抜けるということだけを考えた。シーズンが始まるまでに少しでも筋肉を付けておきたかったため、これらの他にバウンスや新雪の上を放棄手綱で走らせるといった運動も取り入れた。高いレベルではないもののこの時期に障害を出来たことは、春以降大きなアドバンテージになったと考えている。

雪が融けてからも基本的な方針・FWのメニューは変わらなかったが、こけないように馬が自然とバランスを起こしてきた冬の馬場と違い、少々前のめりになる感覚があったためそれまでより少し短めに手綱を持ちFWを行うようにした。また、輪乗りで運動しすぎると、円の大きさをキープしなければという意識が強く働き、知らず知らずのうちに人が内方手綱を使ってしまうのでなるべく外周での運動を多く取り入れた。障害に関してはコンビネーションを加えた程度で、ほぼ冬場と同じメニューで行った。こうして迎えた半澤杯であったが、障害を跳ぶということについては問題がないものの、終始テンションが高いまま障害の前後でフラフラしっ放しと、経路経験の少なさを露呈する形となってしまった。そこで半澤杯後は馬の真直性という部分に重点を置き、その中で歩度の詰め伸ばしを頻繁に取り入れた。駈歩の比重も増やし、歩度を詰める時、伸ばす時に馬が左右にフラつかないように心懸けた。詰める時は人が少し背を高くするつもりで腰を張って、脚でゆっくりとしたリズムを作り、伸ばす時には馬のバランス、人のバランスが前傾していかないよう注意しつつ脚で推進を与えた。この時、馬の脚反応というものが非常に重要となってくるため、反応が悪く、詰め伸ばしがスムーズに行えないと感じたときには一度常歩まで戻って、前肢旋回、停止・発進などからじっくり扶助の確認を行うようにした。逆に状態が良い日にはFWの流れの中でそのまま低い障害も跳ぶようにした。そうして馬に障害をFWの延長線上と捉えてもらうことで、普段のFWと障害、さらには経路を廻るということの一つの繋がりとして意識して欲しかったからである。もちろん、馬の飛越に関するスキル（バスキュールや踏切など）を向上させるためにコンビネーションやバウンス、キャバレッティも多く取り入れた。特にバウンスとキャバレッティは筋力アップとその日の状態確認という意図からほぼ毎日行うようにした。また、週末には出来る限り経路練習も行った。この経路練習では少しでも試合で馬が平常心を保てるようにするため、週末に向けて少しずつ運動中の馬のテンションを高めていき、極力本番に近いテンションで廻るようにした。新緑大会ではその成果もあってか、半澤杯と比べるとだいぶ安定感のある走行が出来たように思う。

この頃から徐々に野外の練習も取り入れ始めた。北大にあるものについては一色兄がすでに一通り跳んでくださ

っていたため、バンケットの下りで少し馬が嫌がることがあったものの、すぐに慣れ、どの障害もあっさりとなすようになった。6月初めの畜大馴致でも天候の関係上経路として廻ることが出来なかったが、単発や複数の障害としては怯む場面はほとんどなく、完飛して帰ってくる事が出来た。この馬は非常に勇気があり、野外の障害でも強気に向かって行ってくれるが、まだまだ新馬の域を出ていないので今後も悪いことを教えないよう初めての障害には慎重に取り組んで行って欲しいと思う。

この野外練習には大きな収穫がもう一つあった。それは馬のバランスである。野外という環境のせいかな今までより格段に馬のバランスが起きており、駆歩も非常にダイナミックで後駆に力が溜まっているのを感じる事が出来た。このような状態を普段の馬場でも維持したいと考え、新緑大会までは少し長めに持っていた手綱を短めに取って、馬のバランスが起きた状態で運動できるように取り組んでみた。しかし、なかなか上手くいかず、最終的に良い状態を作るには時間の掛かることが多かった。また、少し馬がふわっと浮いてきたと感じても、そのまま歩度を伸ばそうとすると再びハミにのめってくるため、バランスが起きた状態で大きな力強い駆歩をすることができないのである。まだ脚と拳の繋がりが悪く、体の使い方もわかりきっていないスぺには少々高い要求だったのかもしれない。もっと僕に技術や経験があれば教え込むことが出来たのかもしれないが、そんな自信はなく、悪いことを教えないというのが自身の定めた大前提であったので、口惜しさを感じつつも再び少し長めの手綱に戻すことにした。その代わりにこれまで駆歩ではあまり意識的に取り組んでこなかった低進運動や顎を譲らせた状態でのFWの割合を増やすことにした。そうすることで体を柔軟に使わせ、脚の推進を拳で柔らかに受け止める、という繋がりを持たせたかったからである。この試みの途中で迎えた春自馬大会では、経路走行としてのクオリティは前回の大会よりも確実に向上していたと思う。アプローチも自分が描いたように馬が動き、前進気勢もあって、初めての物入り障害にも馬が自信を持って跳んでいるのがわかった。しかし、畜大で野外を跳んでいたときと比べるとやはり馬が伸びてのめっている感が否めず、新馬という状況を考えると文句はないもののトータルでは物足りなさを感じる試合であった。

そんなスぺに転換期が訪れたのは大会の数日後であった。他地域との交流をもっと盛んにしようという目論みのもと、北日本と関西の地域対抗交流戦がノーザンで初めて催された。そして、選手だった僕と輸送の関係でノーザンに残っていたスぺは、交流戦後に元オリンピック選手で現関西大学馬術部の監督である若原さんが開いてくださったクリニックにそのまま出ささせていただくことになったのだ。クリニックの内容としては馬の伸縮に重点を置いたもので、最初は15mのコンビネーションを4歩で抜けるというものだった。しかし、あまり収縮を求められた経験がない上に、元々歩幅が広く、障害も必要以上に大きく跳んでしまうスぺにとって、一步を3mで駆けるということは非常に難しく、僕もまた技術不足からその要求を貫徹できないでいた。すると、そんな様子を見た関西大学の選手（前年度の全日チャンピオン）が急遽スぺに乗ってくださることになった。乗り始めは苦戦していたものの、次第に馬がまとまって弾発のある駆歩をするようになり、最終的には先ほどのコンビネーションをスムーズに抜けるまでになった。その時にいただいたアドバイスは次のようなものであった。

・もっと人が騎坐でリズムを作ってあげること

- ・推進するとハミに突っかかってくるので人は体を起こしてじっと我慢すること
- ・脚を使うことで馬がハミに収まってくるような関係を作ること
- ・そのためにも普段から脚の反応を高めて口を柔らかくしておくこと

再び僕が乗り替わったのだが馬の状態が良くなっていたこともあり、この馬では初めてまとまった中で弾発のある、バランスの起きた“良い駈歩”の感覚をつかむことが出来た。この状態までいくと非常に口も柔らかく、しかし手応えは十分にあるので、人は積極的に脚を使って馬を起こしたまま前を出していくことが出来るし、障害前も落ち着いて待っていることが出来る。その後クリニックで110cm程度のプチ経路まで行ったが、最後まで馬のバランスは起きたままで、多少ゆっくりとしたペースでも自信を持って自ら障害に飛び付いていたように思う。僕自身この感覚を掴むことが出来たのは非常に良い勉強になったが、それ以上に馬がこの状態を経験出来たのが何よりも大きかっただろう。結果的にこのクリニックが僕とスベにとって今年一年のハイライトだったと言えるかもしれない。それ以降、普段のFWから駈歩の時、特に馬に収縮を求めるときはシートして坐骨でリズムを与えるよう心懸け、馬が力まず運動できていたらそこから2ポイントで反動を抜き、今度は脚のリズムだけでその状態を維持できるような練習を行った。これらの反応がスムーズな時はこの状態から積極的に推進を与え、馬がのめらずにハミを柔らかく取った状態のまま前に出て行くかどうかの確認もするようにした。そして調子の良い時はそのまま障害飛越までを一連の流れとし、逆にいまいちの時は段階を落として基本からやり直した。幸いにもスベは体で覚えていくアスリートタイプだったので日々繰り返せば繰り返すほど馬の反応は良化し、短い時間でもクリニック時のような状態を作れるようになった。この上昇カーブの途中で迎えた公認大会では拳も軽く、経路の終盤にかけてのめっていくようなこともなかったのも、今までとは比べ物にならないぐらい良い手応えで経路を廻ることが出来た。また、この頃からは下級生にも頻繁に乗ってもらうようにした。これらの状態というのは自分が乗っているときに出来ればそれで良いというわけではなく、自分自身で乗っているだけでは逆にわからない部分もあるので、下級生が乗った時の運動のクオリティや下級生の感想を参考にした上で状態を判断したかったからである。以前は障害練習でどうしてもめったまま障害を跳んだり、バウンスで馬が焦ってテンポが速くなる或いは大きく跳んでしまうことがよくあった。それが、上手くFWが出来た時は下級生が乗った状態でも120cm程度のコンビネーションや単発の垂直を飛越後にのめることなく抜け、バウンスもリズムを崩さずにスムーズに通過できるようになったところを見る限り、クリニック後の取り組みの効果が表れてきているのではないかと思う。

その後、福島で行われた北日では総合にエントリーしたが、結果は耐久のカフィンで失権だった。北大の馬場でも畜大の野外でも良い跳びを見せていただけに個人的にはショックであったが、スタートしてすぐの暗い森に入っていくところで大きく怯み前進氣勢を失ってしまったことを考えるとやはりまだまだ経験不足だったということだろう。しかし、大会後に耐久コースを馴致することは出来たし、フレンドリーで福島特有の物も一通り跳んでこられたので、2年後にはもう少し雰囲気にも慣れて、普段どおりの力を発揮してくれるのではないかと思う。

現時点でこの馬に一番足りないのはやはり経験だろう。今後、馴致やクリニックを上手く利用し、もっともった

くさんの経験を積ませてあげて欲しい。ただ、そこで注意しなければならないのは辛い経験、苦い経験を絶対にさせないことである。まだ若く未完成な馬だけに、良いことも悪いこともすぐに吸収してしまう。それだけに一度悪い方向に向かってしまえば部員の技術で立て直すのは非常に困難である。その部分だけは細心の注意を払わなくてはならない。簡単に例を挙げると、回転するときに最初から内方手綱で曲げようとしないうこと、障害に向かうときはアプローチの段階で人が出来ることは全て済ませておき、障害を向いたら馬の邪魔をしないようにじっと待っていること、初めての障害を跳ぶときはしっかり見せ（燕麦を与えるのがスぺには非常に効果的）、極力失敗しにくい環境を作って跳ぶこと、等である。基本中の基本だからこそ、人に余裕がないときでも疎かにしないよう強い意識を持って欲しい。逆にそのような悪いことさえ教えなければ大成する可能性は高いと思う。1年乗っただけだが、この馬の潜在能力は相当なもので、調教さえ上手く出来れば将来的にはタイプの似ているシンコウブラウンやリーズン級の活躍も期待できると個人的には考えている。総合でも前向きな性格、抜群の歩様を生かせれば全日で十分に戦えるだろう。それ程の馬である。シンコウブラウン、リーズン、ゲネシスが高齢となり、それに続く北大生え抜きの権利馬がない現状を考えるとスぺが担うべき役割はあまりに大きい。だからこそ、今後この馬のチーフとなる人間はその点をしっかりと自覚し、責任感を持って乗って欲しいと思う。“良い経験”をたくさん積み、北大を代表する馬にじっくりと育ててあげてください。

スぺとの1年間はほんま充実してたわ。将来のエースになるべく頑張りや！！

フォトショップ たから デジカメプリント

各種証明写真

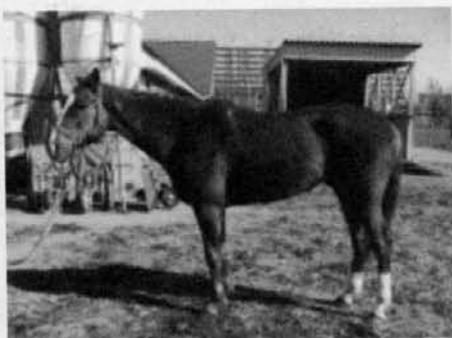
すぐ出来ます

ネガなしでも出来ます

北 24 条西 5 丁目

TEL・FAX (011) 716-2662

北終 (サクラロイヤル)



セン サラ 栗毛

平成 13 年 4 月 9 日生

北海道静内郡静内町産

父 サクラローレル

母 サクラユスラウメ

平成 18 年 6 月 24 日入厩

山中謙司

全日学後よりロイヤルのチーフとして日々乗ってきました。今シーズンはロイヤルが競技に出場し始めたシーズンでロイヤルにとっては初めてのことが多く、馬にとっては印象的なシーズンだったのではないかと考えています。1年足らずですが、ロイヤルに乗ってやってきたことや感じたことを簡単ですが書いていきます。

現在の北大馬術部の馬匹状況は競技馬が高齢になり、次の世代の馬匹が手薄な状態である。これは私が入部当初から言われていたことであり、北大馬術部では新馬育成が急務な状況である。その状況下でロイヤルは入厩してきたが、調教がなかなか進まなかったこともあり、財政状況を考えると今年の競技結果いかんでは離厩候補の一頭であった。

【ロイヤルの特徴】

ロイヤルは普段は大人しいが、その反面臆病な一面を持っており、風や馬場付近の車や人影に驚くことは少なくなかった。また、頑固な一面も持ち合わせていた。こう書くと気難しい馬に感じるかもしれないが、一度馬が納得したことに関しては素直に従ってくれる。ロイヤルの一番の長所は障害を飛ぶことに前向きなことである。この点に関してはこれまでの低障害の反復が大きいように思う。

身体的な特徴は体・口が固い。左内方姿勢の時には肩から逃げようとする傾向がある。右内方姿勢はとりづらく、拳で姿勢をとらせると後肢が外に膨れる。口に関してはハミに対する抵抗が強い。以前に札幌競馬場乗馬センターの八巻先生に乗っていただいてハミを受けるような調教をしていただいたが、まだまだハミに対する抵抗は強い。

ロイヤルはハミに対する抵抗が強いため、いいコンタクトで乗ることに最も気をつけていた。一度馬の口とケンカをすると、なかなかいい状態に戻すことが難しかった。そのため今シーズンはハミ受けというものを気にせず、いいコンタクトで馬がいい気分で運動できるように心がけていた。

普段の練習メニューは最初に調馬策を回してから、常足で脚反応を確かめてから、速足・駆足の歩度の詰め伸ばしを重点的に行った。障害練習は馬が経路を回った経験が少ないため、普段の練習から経路を回ることを想定した練習を行った。北大馬術部では障害練習にコンビネーションを用いることが多いが、コンビネーション後に横木や障害を設置し、馬に経路を意識させるようにした。そのかいあってか、春先は経路中に馬が掛かってしまうことが

多かったが、時間がたつにつれ馬が手の内に入った状態で経路を回ってくるできるようになった。また、リバプールの障害物に関しては最初は物見をするが、一度飛んでしまえば後は問題なかった。

ロイヤルで障害を飛ぶときは、飛越に前向きなロイヤルの機嫌を損ねないように注意していた。いいペースで障害に向かい、障害3歩前ではコンタクトを少し楽にして馬がなるべく自由に飛べるようにしていた。人は先飛びや、遅れないようにだけ気を付けていた。

今シーズンは半澤杯のクロス障害から最終的には100cmクラスまで回ってくることができた。最初のノーザンホースパークの大会である新緑馬術大会では馬が興奮してしまい人馬転するということがあったが、同期の谷口の助けもありなんとか競技に出場することができた。最初はノーザンホースパークではかなり興奮していたロイヤルも、大会を重ねるごとに落ち着いて競技に出場できるようになった。

また、北日学ではロイヤルに耐久の経験を積ませるために福島へ連れて行った。しかしながら輸送中の事故で馬が怪我をしてしまい、予定していたLAクラスを棄権しなければならなかった。日程の最後のほうでは運動できる状態になり、耐久コースは簡単な障害を一通り回ってくることができた。

今年は競技の結果を見ると、順調なシーズンだったが、当然ながらまだまだ課題は多い。障害の高さで言うと、100cmの垂直障害ならスムーズに飛越してくれるが、オクサーになると馬が少し躊躇してしまう。垂直障害ならば110cmを飛んだことがあるので、あとはオクサー障害の反復練習で馬が飛越に自信を持つようにすることが大事だと思う。障害物の種類ではリバプールなどは問題なく飛んでくれるが、野外での穴のある障害は苦手としている。これについても日々の反復練習が必要である。

また、右内方姿勢をとるのが苦手なので、経路中で右回転後に馬の前進氣勢が失われてしまいがちになる。そして、小さい障害なら問題ないが、高い障害やダブル障害があると左に逃避することがあった。ロイヤルはコンビネーション中でも左にヨレル傾向があり、左に逃避することは最も起こりやすい反抗なので、これについてはFwで解消していかなければならない。そして、一番の課題はハミ受けの問題である。今年は、ハミ受けというのを考えずに乗ってきてある程度の進歩が見られたが、この先もっと乗馬としてレベルアップしていくためには当然考えていかなければならない。

ロイヤルに乗ってきて、新緑大会での人馬転や輸送中の怪我など苦労することが多かったですが、新馬に乗る楽しさのほうが大きかったです。また楽しさだけでなくもちろん責任感も感じていました。新馬なので、反抗されると癖になりかねないのでその点は注意していましたが、何度か反抗されることがありました。自分の技量のなさをあらためて感じました。これからロイヤルに乗る人に注意してほしいのは、馬が納得して障害を飛ぶように日々乗ってほしいです。無理やり高い障害などを飛ばせていると、馬が障害を飛ぶことに嫌気が差ってきて、ロイヤルの性格上まったく障害を飛ばなくなる恐れがあります。馬が余裕を持って飛べる高さの障害で反復練習をすることが新馬にとっては大事なことだと思います。

最後になりましたが、練習を見てくださった八巻先生、歌川先生、本当にありがとうございました。また、前チーフの林兄、谷山姉には練習を見ていただき、アドバイスをさせていただいてありがとうございました。僕がロイヤ

ルに楽しく乗ることができたのは部員、OBの方々含め皆様のお陰です。この場を借りてお礼申し上げます。卒部後も少しの間札幌に残るので、ロイヤルが乗馬としてレベルアップしていけるように微力ながらも協力していきたいと思います。

コンパ予約受付中

サークル活動など

各種宴会、ご予約承ります



やきとり

まるた

*200名様収容

*駐車場10台あります

札幌市北区北17条西4丁目

TEL 011-747-7000

ネイチャーヒーラー



セン サラ 栗毛

平成10年4月11日生

アメリカ産

父 Valiant Nature

母 Mintullah

平成18年9月18日入厩

山川 倫明

昨年度の調教報告で、今号において、「成長したネイチャーヒーラーの姿をお伝えします」と述べました。それほど胸を張って、進歩したとは言えないまでも、今後の見通しが拓けたのではないかと僕自身は思っております。

初めに、新馬に乗る際に心がけるべきことの僕なりの考えをまとめます。まず、頭頸の伸展、つまり、手綱を伸ばした時に馬がハミを前下方にとって、のんびり大きく歩く必要があると思います。これを可能にするには、馬が扶助を理解し、また、従順でなくてはなりませんから、停止から圧迫して前進させ、スムーズにいく度に愛撫を繰り返すなどして、馬との関係を築く必要があるでしょう。馬が鼻面を地面に向かって、大きな歩幅で歩くようになったなら、次に、エルグレイの頁でも述べたように、馬のバランスが重要になってくるのではないのでしょうか。馬のバランスを起こしてくるには、脚と拳の力のつり合いがとれている必要がありますから、脚によって生まれた推進力を柔らかい拳で受け止めなければなりません。それができれば、馬は屈撓して、よいバランスの取れた状態になるでしょう。それからは、後躯の踏み込みがより活発になっていくように心掛ければよいのではないのでしょうか。馬によって、体の硬さ、左右のバランスの悪さなど、弱点はあるとは思いますが、大まかには、以上のことをできるようにすることを当面の目標にしていけば、順調に調教が進んでいくのではないのでしょうか。

次に、障害のトレーニングについて思うことを述べます。乗馬クラブの方などに尋ねるとよく、コンビネーションを用いるのが効果的であるという答えが返ってきます。北大でも、コンビネーションをよく用いておりますが、うまく機能していないように思います。悪い例としては、活発さが足りないまま、元気に跳んでいるだけになっていたり、馬がのめって、焦って跳んでいることなどが見られます。これらを解決するには、既に述べたように、まずよいバランスを習得し、それを障害の練習につなげる必要があるのではないのでしょうか。馬が人の扶助に対して従順でなければ、よい飛越にはならないでしょう。正しいバランスで行うならば、コンビネーションは馬の自信をつけさせるには最善の練習法であると思います。

できるだけ体系的に表現を試みましたが、4年間を終えて感じたことのまとめであって、現役時代にこのような明確な目標の元で乗っていたわけではありませんでした。この一年間を振り返ってみると試行錯誤の毎日でした。前号でも述べたように、前年度は人の未熟さから、馬のために何もしてあげられませんでした。そこで、冬から春にかけては、まず馬が人の脚で落ち着いて歩くようにすることを心がけました。冬場である程度、馬は脚に対して

従順になっていたと思います。そして、次の目標は脚によって生まれた推進を拳で受け止めることによって、馬が屈撓することになるわけですが、春先などは、人が頭を下げさせようとするあまり、拳が固くなってしまい、馬がしっかり顎を譲っているとは言えませんでした。

シーズン中に乗っていくなかで、人が馬の正しいバランスを意識できるようになっていったように思います。そのきっかけは、拳を柔らかく使えるようになったことでした。こうして、脚と拳の力の釣り合いがとれ、次第に馬の後軀が動いていく感覚が身についていきました。このような成長が見られるに連れて、やはり障害の方にも進歩が見られるようになりました。それまでは、コンビネーションでも馬が走るという傾向がありましたが、次第に馬がバランスの起きた状態で飛ぶことを学んでくれました。馬にも前向きさが出てきましたし、より自信をつけさせるためにも、コンビネーションはほぼ毎日行いました。失敗しない程度を見極めるようにしながら、高さも上げ、130cm程度ならオクサーでも難なく飛ぶことができるとわかりました。ただ、経路の中で、駈歩で飛越するのは、勝手が違うとは思いますが、今後も慎重に進めていかなければならないと思います。

試合に関しては、まだ会場で興奮して落ち着いて走行できないところがありますので、経験を積ませて、普段通りの動きを試合で出せる必要があると思います。それでも、100cmは完走しているので、馬が落ち着いてきたら、より高いレベルでも通用する力は持っているはずで。

最後に、乗る以外での馬との関係についても述べたいと思います。エルグレイとももちろんですが、北大では新馬の部類とされるネイチャーヒーラーとは、より丁寧に信頼関係を築いてきたつもりです。なぜかといいますと、僕たちのような技術の足りないような乗り手であっても、馬と心を通わせようとする努力でその不足分が補えると考えたからです。大したことではありませんが、曳馬ではリズムを大切に、馬と一緒に歩くような心がけました。時に、人馬の上下関係をはっきりさせなければいけないということを耳にしますが、僕は馬と対等な関係を築いてきたつもりです。僕の気持ちに通じたからかはわかりませんが、ネイチャーヒーラーは素直でいてくれるのではないかと思います。

まだまだやりたいことをたくさん残したまま、代替わりを迎えてしまいました。次に乗る野村に期待したいと思います。卒部をすとはいえ、ネイチャーヒーラーを全日に行けるような馬にするまで僕の役目は終わらないと思っていますので、現役に疎ましがられない限りは、ネイチャーヒーラーの成長の手助けをしたいと思っています。

サクラフォルツァ



セン サラ 鹿毛

平成 16 年 5 月 24 日生

北海道静内郡静内町産

父 カリズマティック

母 サクラキャンドル

平成 19 年 11 月 9 日入厩

宮本 亮

入厩してから 1 年が経ちましたが、昨シーズンは基本的なことの繰り返しの一年でした。始めは曳き馬、そして調馬索、また FW では接点を遠くして背中を使った運動を、障害ではコンビネーションを主体に行うなど、新馬育成のセオリーにのっとって調教を行ってきました。この馬はその大きな馬体とつぶらな瞳だけでなく、やわらかい筋肉と頼もしいパワーを併せ持っています。またあまり物見もせず、単純な性格なのか「飛ばばいい」と感じた障害に対しては前向きに向かっていってくれます。周囲の環境に対しては少し臆病な面を見せることもあり、しばらくは試合会場などでも慣れが必要のように感じますが、改善していくでしょう。

今シーズンもこの馬に乗らせてもらえることになりましたが、引き続きあまり無理な要求はせず、ゆっくり、そして確実に良くなっていくようにサポートしたいと考えています。競走馬時代は米 2 冠馬であるお父さんや、エリザベス女王杯を勝ったお母さんのような成績は残せませんでした。乗馬として、長く、そして部員を勇気付けてあげられるような馬に育ってくれることを期待しています。

学生割引あり



カットイントライ

北23条西5丁目山水ビル2F TEL011-747-1058

- 受付時間 AM10:00~PM8:00
- 定休日 毎週火曜日・第3月曜日

◇離厩報告◇

北閃 (パワフルショット)



セン サラ 青毛

北海道三石郡三石町産

父 ブライアンズタイム

母 ゴールデンリッカ

平成 15 年 11 月 15 日入厩

出戸 裕人

この馬は、乗馬としての調教は非常に進んでおり、この一年で人に多くのことを教えてくれました。最終的にはノーザンホースパークのリバプルーを飛ばせることができず、能力を発揮できませんでしたが、北大の馬場では本当にいい動きをし、また、障害に対してとても前向きで、どんな向け方をしても障害を飛んでくれました。ただ、性格がやんちゃだったため、誰でも扱える馬というわけではなく、少し機嫌を損ねると噛んだり、無口を着けなかったりと色々問題を起こしました。結果的にはこの部分がネックとなり、あまり上手く乗れない部員が乗るとまったく動かない、曲がらない、止まらなと練習になりませんでした。これを改善しようと色々な方法を試みましたが、どれも馬のほうが一枚上手でうまくいきませんでした。この『人が変わると馬の動きが変わる』ことを直すには僕の実力が足らず、離厩という形になりました。本当に人の実力がまだまだということを実感しました、と、反省文のようになってしまいましたが、この馬から得た多くのことを他の馬たちに還元出来たらと思います。また、OB戦後に離厩式を行い、その後ノーザンホースパークへ離厩しました。

最後に、この馬を支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。そして面倒臭そうな顔をしながらもいつも一緒に運動してくれたパワフルショット、ほんとうにありがとう。これからも元気で頑張っ



北遙 (イクスカーション)



セン サラ 鹿毛

平成 10 年 6 月 20 日生

北海道浦河郡浦河町産

父 ラムタラ

母 インバレル

平成 16 年 9 月 15 日入厩

小島真宏

平成 20 年の 10 月、北遙号はメインフィールドズに離厩しました。理由は骨瘤により練習馬として満足な運動が出来なくなったことです。

僕がチーフになったとき、イクスは骨瘤に悩まされ、思うように運動ができない状態でした。そのため冬の間はとにかく治すことを最優先に考え、本格的に運動を始めたのは、雪が溶けた後でした。休んでいる期間が長かったせいか、本格的に乗り始めた頃は馬が脚に対する反応をほとんど忘れてしまっていました。そこで停止、発進といった簡単な運動を根気よくやり続けました。障害のほうはなるべく失敗しないような高さで跳びやすい障害ということを中心に懸けました。フラットワーク、障害の練習で一番優先したことは馬が気分良くやるということで、なるべく怒るということは普段の曳き馬や手入れ中もしないようにしました。大会が始まって、練習内容は前述したことをやっていきました。6 月ぐらいになると、馬の調子もあがっていき、100cm のコースを帰ってこれる状態まで戻りました。ただ去年も 100cm のコースなら帰ってきていたので、本当に去年の状態に戻ったかなという感じで去年からの進歩はない状態でした。ここでシーズン前の目標として北日に出場できるレベルに持っていくということを掲げていたこと、その北日までもう 2 ヶ月もないということで人が焦ってしまい、障害の高さを急に上げ、結果として、もともと障害前で止まりやすかったのですが、そのせいで完全に馬自身が無理だと思うと、止まるようになってしまった気がします。また馬に気分良くやらせるということが馬に勝手にやられるということになってしまい、そのことも馬が止まるようになった原因の一つになったのかもしれませんが。さらに雪が溶けた後は大丈夫だった骨瘤が 7 月中旬に再発してしまい、北日前だというのに練習が思うようにできなくなりました。原因は、雪溶け後、ずっと骨瘤を押さえても痛がらず、大丈夫だったということで人が油断したこと、そして前述したように馬が調子を落としてしまい「北日までになんとかしないと」と人が焦って練習量を増やしたことにあります。しかし、北日では練習が思うようにできなかったにもかかわらず 2 頭しか完走できなかった 100cm クラスのコースをあと一歩で完走というところまでいき、下級生で出場した 80cm クラスでは見事 2 位に入賞しました。

ここまで書いていてわかるように、もっとチーフの僕がしっかりしていればイクスは離厩しなかったかもしれません。簡単な練習やほとんど練習ができなかった大会の方が、結果が良かったり、自分が何かしようとしたら馬が

調子を落としたり、けがをしてしまったりとチーフらしいことをしてやることができませんでした。これからチーフ、特に新馬のチーフになる人には僕のことを教訓として、なるべく焦らず、また自分のできることを越えたことをしないように心懸けて欲しいと思います。

最後になりましたが仕事があるにもかかわらず朝早くから練習を見に来てくださった慶応大学馬術部 OB の貫名さん、前チーフということで貴重なアドバイスをくださった前田兄、住江兄、本当にありがとうございました。また、大会の忙しい中北日の輸送のため、家畜車の馴致をさせてくれた帯広畜産大学馬術部のみなさまありがとうございました。イクスがメインフィールドで幸せな馬生を送ることを願います。

イクス、チーフの体重が重くてごめん

イクス、脚が痛いのに無理に練習させてごめん

イクス、能力を発揮させてあげられずごめん

イクス、ありがとう、僕にとってはキミが一番でした



◇鎌田さん追悼特集◇

◇鎌田さん追悼◇

オンタイ！ 「経路違反」では？

昭和31年度卒 岡本洗

サカキバラさーん、どうして水濠をもう渡って行ってしまったんですかー？

あまりに突然の鎌田氏の訃報を聞いたときの私の率直な気持ちです。

既に半世紀以上たった昔の部員時代を思い出すと、鎌田先輩(当時は榊原先輩)との出会いは昭和27年春のこと、我々進入部員の朝練習場は札幌競馬場の空き地だったように思う。当時、進駐軍米兵がたまに着て乗る乗馬のオート、チャンプ、ブラッキーなどに競馬場のご厚意で部員も乗せてもらっていたからである。当時の馬術部キャプテンは故、古谷先輩、白馬に跨がって格好よかったナ。

翌年に、29年国体の貸与馬用の乗馬が数十頭入厩して基礎調教が始まると、榊原先輩の存在感は抜群で厩の親分みたいだった、もちろん東京からは調教師が2名着ておられたが、彼らは部員の先生でもあったから、我々は毎早曉北大構内を自転車で突っ切って競馬場に通り毎日数鞍乗るのが当たり前、勉学のほうは？ …。

冬の練習後の手入れはきつかった、馬腹の冬毛に凍りついた雪氷は根ブラシで簡単には取れない。一計を案じ古い竹ぼうきでゴシゴシやっていたら榊原キャプテンに見つかった。「素人らしくないことやってるな、よしよし」だって。

一方、馬の健康状態管理は厳しい目で見ておられた。後年、自馬の全日本学生選手権が馬事公苑で行われたとき、小生は北斗で総合種目に出してもらった。簡単な馬場の審査のあとの野外騎乗では何と1番の出走。コース、自然障害物とも始めての経験だった。頭の中はカーッとしたまま歩度の配分などは上の空、失点ナシで快調にゴールした。北斗は道営競馬あがり(金花)だから当たり前か。しかし、オンタイからはガッツリ怒られた。「早過ぎだ。脚の手入れしっかりやっておけ、腫れて大変だぞ」。翌日、エビハラにはならなかったが、余力審査の中障碍はメロメロ。やっと入賞の程度。

初めて見る馬でもオンタイは体型、つめの状態でその乗り具合をよく言い当てられた。

第一農場のポプラ並木の横に馬場が復活し、国体後の馬が6頭入厩してからは宿直兼用部室もできて馬の日常管理はすべて部員の責任となる。馬を見る目の確かな榊原先輩は当然要(かなめ)であったし、何時か「オンタイ」という敬称がついていた。御大将の略である。

神田の古本屋で見つけてきた「フィリス氏の馬術」を一番熱心に読んでおられたのも、馬具の手入れに詳しくたのもオンタイであった。

当時の地区大会や対校競技は貸与馬による中障碍日越がほとんど。伝統の七帝大戦は主にこの方式で、京都や名古屋などそれぞれの試合の場面に色々な思い出がある。代表メンバーにはクセ馬担当、荒れ馬担当、確実派などそれぞれの方がいたがオンタイはどんな場面でも安定してこなしておられた。

只、一点たまにだが…問題もあり…それはまれに経路違反失格をやらかすこと、障碍飛越順のあとさきカン違

いである。我々じだいにはこれをやらかすと皆からポコイといわれた。

そんな時の、赤い顔でニヤニヤ照れ笑いをしながら乗馬を移動させるオンタイの顔が今でも目に浮かぶ。

そんな時代からの半世紀が過ぎた。馬のレベルも数も飛躍的に高くなったようだ。後輩の一人として年賀状の往来だけでずっとお会いできなかったが、自分自身を振り返って見ればポコクで経路違反ばかりの半世紀であったと思う。でも、大きな馬小屋が空っぽになってしまったような、何か行き場所がなくなったような今の気分です。心からご冥福を祈ります。

鎌田正人先輩を偲ぶ

昭和31年度卒 千田 哲生

ヒトの生命はわからないものだ。あの頃頑丈一徹で殺しても死なないように見えた古谷昌司さん(昭28)や大久保利彦君(昭31)、それに鎌田正人さん(昭30)が早々に鬼籍に入られた。今頃はこれに半澤道郎先生(昭6)や岡田光夫(昭17)も加わり夫々のキャラクターを丸出して賑々しく冥土でウマに乗っておられるのであろうか。

私達(大久保利彦、岡本洗、加藤昌太郎、加藤 斉=元、それに私)が入部した昭和27年4月は、古谷昌司、斉藤善一、佐藤巖、後藤義英、永井重翁、下飯坂隆、渡植貞一郎といった昭和28年卒の錚々たる大先輩が馬術部を復活させたばかりのときであった。と云うての当時は部の馬匹はおらず、競馬場のウマに乗せてもらう状態であった。

鎌田(旧姓榊原)正人さんは私達の1期先輩で、上記馬術部を復活させた大先輩が揃って卒業された後の馬術部を引き受け、大活躍をされた。鎌田さんは、旧庄内藩の名家の出で、豪放磊落、酒と囲碁に強く、小さいことに拘らぬ方で、みんなから「オンタイ」と呼ばれて親しまれていた。彼が馬術の技術に長け、北大のみならず、北海道馬術界をリードしたと、浦河町議員として、軽種馬協会役員として、活躍されたことなどは、多くのOBが記載することと思うのでくどくどと述べる必要はないだろう。小さい頃からウマに親しんでいたとかで、裸馬が得意であった。なにしろ、裸馬に乗って走ったらオンタイの騎座がむけず、ウマの背中 of 皮膚がむけたという伝説の持ち主であった。

北大馬術部が自馬を持てる転機となったのは昭和29年に行われた札幌国体であった。北海道は貸与馬競技用のウマ数十頭を購入、競馬場に繋留して元橋、荒川基騎兵将校を調教師に招聘して調教を行った。札幌乗馬クラブ、札幌鉄道局乗馬クラブ、銀蹄会、北大OB会(後の同好会)、北大馬術部などのメンバーが2人の調教師の指導のもと、調教を兼ねて毎朝競馬場の馬場で訓練を行った。当時、札幌の人口は約40万、市電はやっと北24条まで延び、円山には原生林や荒井山というスキー場がある時代で、円山や札幌神社(現北海道神宮)までよく外乗したものだ。国体が終わって、道が馬匹を払い下げることになり、わが北大馬術部も自馬を持てるチャンスがやってきた。当時のキャプテンは鎌田さんであった。部としては4頭ほしいと考え、鎌田さんが先輩方に相談したら先輩が「4頭欲しいのなら1頭削られることを念頭に5等と申請しろ」と入れ知恵をした。当時の部長松本久喜先生に相談したところ、「5頭欲しいのなら」と1頭水増しして6頭と大学当局に申請された。驚いたことに当時の杉野目晴貞学長はこれをまるまる認め、6頭の自馬を持つ身となった。厩舎と馬場は第1農場(現在新渡戸稲造先生胸像のある辺り)の一角と決まった。現在、中央図書館がある辺りは広場になっていて、そこで杉野目学長は田舎のお百姓のような乗馬服スタイルでやってこられた。6頭の中にミスアップデールであったと思うが蹴癖のあるウマがいた。杉野目学長は「なかなか良いウマが揃いましたね」とおっしゃりながらウマもあろうにこのアップデールの後ろに立って尻を撫で始めたので皆一瞬青くなった。岡部満雄(昭32)が間髪をいれず「オジサン、オジサン危ないよ。そのウマ蹴るんだよ」と注意して事なきを得た。

当時はよろず鷹揚な次代で、留年や学士入学で在学期間が延長しても対外試合出場が制限されることはなく。鎌

田先輩は昭和30年畜産を卒業されて鎌田牧場に養子に行かれた後、昭和32年に獣医学部に学士入学されたが、また、馬術部にも復部し、現役部員として活躍された。部の馬匹も飼料代を稼ぐため、道営競馬で走ったり、映画の宣伝のため甲冑に身を固めた部員を背に札幌の街中を練り歩いたりできた時代であった。

北大馬術部OB、OG名簿を見ると女性部員の第1号は池田(旧姓松田)瓊さん(昭33)になっている。私達の現役の時代にも女性が4名程いたがお客様扱いであった。しかし、彼女らは良く乗馬に來たし、何より国体の時には馬術競技の裏方として大活躍した。写真は、競馬場での乗馬訓練を終えた後、当時の競馬場事務所の前で撮ったものである。前列向かって左から荒川清さん(昭32)、岡本洗(昭31)、加藤元(昭31)、鎌田正人(昭和30)、中列向かって左から小関(昭和30、当時の小関競馬場副場長令嬢)、女性3名不詳、大久保利彦(昭31)、後列向かって左より加藤昌太郎(昭31)、千田哲生(昭31)、榎本幸人(昭32)の各人である。

オンタイの追悼か当時の裏話かわからない拙文になってしまった。「オンタイ御免」、カッカッと笑うオンタイの声が耳に聞こえる。



鎌田正人さんのことを書こうと思って、ハタと困った。

あまりにも偉大な存在で、我々の年代から云っても「雲の上の人」なのだ。軽々を書くことなんか、とてもできない。思いだそうにも、馬場でも厩舎でもいつもニコニコした姿だけが頭に浮かんで、鎌田さんから何をどう学んだのか、一つもおもい浮かばないのだ。

「鎌田さん」と、名前で呼ぼうとするからいけないのだ。私が現役のところ(昭和 30 年～34 年)から、誰でも「オンタイ」と呼んでいた。漢字で書くと「御大」。あらためて辞書を引くと「ある団体の中で、支配的な地位にある人を、親しみの気持ちをこめて呼ぶことば」とある。が、これではまったくそぐわない。第一「支配的な地位」になんか、いるわけがないし、後輩に「支配的なそぶり」を見せたことすらない。それこそ「いつもニコニコ」で、それでいていったん馬上にあると、神業のような馬の御し方を見せる。

「鎌田さん」と書いたが、我々は「榊原さん」で知るようになった。

私が昭和 30 年 4 月に入部した時、最上級の 4 年生に、亡くなった大久保利彦さんや、いまも東京 OB 会に顔を見せる加藤元さん、千田哲生さん、加藤昌太郎さんらがいた。

そのころの運動部はどれもそうだったが、「1 年違えばウマのクソ」である。3 年生や 4 年生は「神様」だ。オンタイこと榊原さんは「神様」の上の、まさに「雲の上の人」であった。1 年、2 年の時など、ロクにお話した記憶もない。近寄るのさえ勿体ない気がしたものだ。

その「榊原さん」が「鎌田さん」に変わった。浦河の鎌田牧場に婿養子に入られたのだった。日高には北大の実験農場があり、道庁の種畜場もあって、毎年春に泊まりがけで見学に行った。オンタイが鎌田牧場に入られてからは、繁殖牧場と育成牧場の二つの牧場を経営されていた鎌田牧場にもお邪魔して、泊めてもらったりしていた。そのころからようやく「先輩」として話せるようになったのだと思う。

現役時代に一度、貸与馬障害飛越の対外試合で、ご一緒したことがある。後輩の諸君から見ると、おかしいと思うかもしれないが、そのころは学部を留年したり複数の学部で在籍したりした OB も「現役」として対外試合に出ることが認められていた。

あそこ貸与馬の対外試合で一番権威のあった「七帝戦」でのことだ。京都大学の OB で確か東京五輪にもでた候補選手になっていた荒木雄豪さんが、留年 7、8 年の 27、28 歳で現役として出場することになった。

当番校(当時は各校持ち回り)が北大で、私が主将を務めていたが、何としてでも京大には、特に有名な荒木雄豪さんには勝ちたくて、恐る恐る(だったと思う)オンタイに出場をお願いした。快諾してくれた。

誰でもお分かりのように、何等かの貸与馬での団体戦は、一人が抜きんでいても勝てるものではないが、この時は精神的に気が勝っていたのか、優勝してしまった。オンタイと一緒に団体戦に出ることなど、夢のまた夢であった。

実は、オンタイとの思い出をこんな調子で書こうとは思っていなかった。表題にお書いたように、「オンタイとベル」のことを頭に描いていた。あまり知られていないはなしだ。

札幌競馬場に、たしかセントエイジという美しい栗毛の牝馬がいた。気の優しい馬で、新入生が乗ってもうまく導いてくれた。もう一頭、去勢に失敗してカタキンの、荒々しい青毛のレンザンという雄馬がいた。どうやら牝馬が発情しているときに、レンザンが馬柵棒(ませんぼう)をくぐって求婚したらしく、セントエイジが身籠もった。

それから1年、元気な男の子が生まれた。セントベルと名付けた。

私は大学を卒業した後も毎朝馬に乗りたくて、競馬場の厩舎の端にタダで小部屋を借りていた。壁一枚隔てた隣に、母馬と引き離されたセントベルが入っていた。冬の寒いときも入れて1年近く住んでいたのだから、我ながらあきれれる。

セントベルが明け2歳になって、乗り運動を始めることになった。最初は背中に静かに毛布をかけ、しばらく輪乗りを続け、これも静かにクラをおき、輪乗り。わざと鐙を垂らして両腹に当たるようにして輪のりのスピードを上げていく。ベルは汗びっしょり。かなり疲れたころあいを見計らって鞍に跨がる。これを全部一日で(実際は2、3時間)でやる。ベルは振り落とそうとして跳ねる。まだまだ元気。ここで振り落とされたら調教は振り出しに戻るどころか、新馬に妙な癖がついてしまう。大げさにいえば「死んでも落とされぬ」。これを「住まい」が隣同士の小生に割り当てられた。一生の思い出であった。

オンタイはそのときからベルに目をつけていたらしい。途中の出来事をとばすが、そのうちにオンタイがベルを障害馬か総合馬に育て、全国大会にも連れて行った。

私が卒業して新聞社に勤めるようになって、何度か取材で鎌田牧場を訪れた。取材と称して泊り込み、馬に乗るのが目的だったかも知れない。それより、オンタイが引き取って育てていたセントベルの成長ぶりをみるのが、本筋だったろう。

鎌田牧場は、確か昭和34年のダービー優勝馬シンザンを送り出した牧場だ。引退して種牡馬になったあと、懐かしく取材に向かったものだ。コダマの最初の交配(この時はまだ横取り法だったはず)と、後にシンザンの最初の交配(この時は本交)を取材できたのが、新聞記者として何にも優る財産になった。

浦河の鎌田牧場には、奥さんがおられた時、オンタイがお元気だった時、最後までお世話になった。この誌上をおかりして、心からご冥福をお祈り致します。

北海道大学への入学が決定した時から、新世界が開ける期待と不安に満ちて居た。実は私には左足に不安があって運動が極めて苦手であって、このままでは人生航路を乗り切る事が出来ないと感じて何か私に出来るスポーツを探さなければならないと真剣に悩んでいたのです。入学式当日に馬に乗って入部勧誘していた人たちに奨められて、翌日早朝から厩・馬場へ出掛けていきました。

半信半疑でふらふらしている内に、先輩各人の個性と馬達の個性を知る事に大きな興味を持つ事になり、終に離れられない存在になってしまったのです。

最初の頃は、毎日馬術部へ来るのではないのに、どんな馬に乗っても、馬の背にくっついて乗っていて、思い通りに動かしてしまう先輩が居て、全員が主将でしかないこの人を《御大》と呼んで、一目置く存在であることを知りました。

やがて、御大が結婚して奥さんと一緒に近所に住んで、獣医学部へ学士入学したので、私は常時後を突いて歩いて馬の話しを聞きながら晩御飯を御馳走になったものであった。

それから『馬学綜説』の田垣住雄さんのお宅に連れて行ってもらった事についての広範な考え方について話しを伺った。馬に乗ると云うことは、騎手のやるべき事は何であるかを考えさせられた基本的根幹はこうして形成されたものと思っています。

馬術部その先輩たちは各々各個に各様に良い手本であり、各馬に相応した変化ある乗り方を、する御大の形と、田垣さんの云う各馬の性質と体型に対する理論的降参考察の推量が、結論は得られないとしても、私の乗り方を探索する方向づけをしてくれたものです。

私は出来るだけあらゆる人の話しを聞き取ってそこから眞実のみを取捨選択することにつとめようと心掛けたものです。

卒業して間もなく中山競馬場の競走馬診療所勤務になりましたが、そこでは小岩井牧場の乗馬厩舎に勤務した事のある田山熙さんが誘導でしたので、その後について馬を収縮させる方法を教へてもらいました。田山さんは、岩崎さんの所でクセノフォンの『馬術について』を翻訳しながら本格的馬術について研鑽せられた方で、新しい知識を与えてくれましたが、質問しなければ、教へてくれる事はありませんが、質問すると徹底的に理論を、そして翌日には実技を教示してくれたものでした。

その頃は、御大は良く東京へ出て来られたので、お目にかかるその後日馬についての話しをしたことがいまは懐かしい思い出です。

間もなく東京オリンピックも候補生となって東北牧場に合宿訓練する事になりました。

騎兵学校当時の最高教官達が一日中、傍について居て最高の騎兵教習を実施していただきました。京都の荒木雄豪さんも居てくれたので、時々御大も来てくれて、大いに馬術論議をした事が思い出されます。

ようやくの事で『眞歌号』でオリンピックに出場することに決めた時、私は迷ったので、御大に電話して相談し

たことがありました。

しかし、眞歌号の訓練予定はどうしようもなく、残念な結果になってしまいました。

オリンピックへの参加経験は、私の馬術に対する考え方の不十分さが原因と明確になって、外国の騎手たちのやり方を見てカルチャー・ショックを受けた事が今でも、まざまざと思い出されます。

後日に、御大と会った時に、その話しをしたのですが、御大はその時は何も特別な事は云わないで私の話しを黙って聞いてくれたものです。

その後は、フランス馬連からピエール・デュラン大尉が指導に来てくれ、私が色んな事を質問したのですが、言葉の問題もあって、日本では時間的に余裕がないので、フランスに行つて勉強する気があればその様に手配することも可能であると話しをしてくれたので、早速、競技会に話して許可を戴き、渡仏の準備をしたものでした。

ソーミュールでの訓練は、私にとってはこと苦しいものではありませんでしたが、考え方や歴史の変遷を理解することが最も困難なものでした。結局、卒業する時に指定された 30 冊の馬術学の本を読む事を義務と考える様にと教へを得たものでした。私は獣医でしたので特別に運動生理学の講義を受けさせてもらいましたし、卒業後も三回程、特別に学校に行つて新しい獣医学の講義を受けさせてもらいました。

現在、私は御大と一緒に、世界的に変化した新しい馬術についての議論をしたいと痛切に感じています。

日本の馬術の中心は、競走馬として育成された馬匹を再調教して騎手教育に使うことが多いので、どうしても平衡保持の正しい姿勢を騎手に教へることが無い事が問題なのです。乗用馬として生産した馬を乗用馬として育成し、乗用馬としての正しい平衡維持の仕方を馬に教へてやらなければ、現在要求されている馬術の乗り継ぎが不可能であると考えます。

自分の使用する楽器が正しい音を出していることが出来なければ、正しい音楽が出来はしない筈です。

正しい身体の構え方（平衡の維持）を馬に教へ、それを維持させながら、運動することが出来なければならない筈のものです。

これが馬術感覚の根底にあるべきものです。

騎手教育の主な目的は、この馬術に今後の感覚をどのようにして教へるかを工夫し努力しなければならないのです。

この平衡維持が出来易い馬を生産し、それを利用して騎手を育成する事が出来なければ、日本の馬術レベルを挙げることは不可能でしょう。遠野馬の里は、この目的を持って構築し、運営すべきものと信じて創設したのですが、残念ながら、行くべき途を少し間違えているように思はれてなりません。

平衡とは何かと云う難しい問題に、自分の身体で長い苦闘した人でなければ、理解出来無いでしょうか？ 無理を云つても仕方ありません。

二本足で立つ人間と四本足で立つ馬の差違を感得できる人であった鎌田正人大先輩の事を思い出しながら、今更

ながら哀惜の情を禁じ得ない今日此頃です。

御冥福を御祈りすると共に、教へて戴いた事や大いに議論したことが少しでも実現するように可能な限りの努力をすることを誓うものです。

鎌田先輩（オンタイ）の思い出

昭和34年度卒 樋口正明

昨年7月、「鎌田正人さんを偲ぶ会」に参加させていただいた。

会場のノーザンホースパークで、記録・写真を拝見し、多くの方々のお話をうかがい、在りし日の鎌田先輩を語り合う集まりであった。

鎌田（旧姓榊原）さんがキャプテンのとき、私は一年生部員として馬術部の一員に加わった。部内では、いつも「オンタイ」と呼ばれていた。

昭和29年、北海道の国民体育大会が開催され、それに先立って札幌競馬場で、競技使用馬の調教が行われたことは、北海道の馬術界にとって画期的な出来事であった。オンタイは、この調教訓練に積極的に参加し、荒川先生等の指導を受けて、馬術の基本を身に付けられた。以来、訓練に励み北海道馬術界の中心となって活躍されてきた。

オンタイが獣医学部に学士入学をして、再び馬術部の活動に参加されたとき、私は3代あとのキャプテンだった。部内では、私が先輩の立場だったが、馬の調教等については、適切なアドバイスを受けていた。更にこのあと、私が留年して昭和34年、一緒に卒業したので、オンタイと私の関係は先輩・後輩・同輩という、珍しい関係を持っていた。

昭和31年、兵庫国民体育大会が宝塚競馬場で開催され、オンタイと共に荒川清・山本智さん・私が参加し、西日本馬術大会にも出場することになった。当時の馬輸送は、国鉄の貨車で行われていたのだが、海が荒れて青函連絡船が止まってしまい、貨車の到着が大幅に遅れて宝塚駅に着いたときは、フラつく馬がでていた。余裕のある日程で出発したのだが、馬のコンディションが整わないうちに、競技会が始まってしまった。このような悪条件の中でも、オンタイは馬の能力をできる限り、引き出すことに取り組み、入賞を果たす実績を挙げられている。

私は、卒業して東京都庁に勤め、在職中は北海道に行く機会はほとんどなかったが、馬事公苑での競技会とか馬術連盟の審判講習会などのとき、オンタイと一緒している。しばらく前のことになるが、馬事公苑の講習会のあと岡田先輩と3人で、世田谷の私の家で杯を挙げ、馬談義を続けたことは、忘れられない思い出になっている。

オンタイと最後にお会いしたのは、平成18年8月石狩のフロンティア乗馬クラブだった。東京都庁乗馬部の合宿に、私がOBとして参加したとき、道内の乗馬クラブの競技会が同じフロンティア乗馬クラブで開催されていた。オンタイは、この競技会に審判員として参加されていたので、久しぶりにお会いすることができた。最後の懇親会ときには、なつかしい小野忠さん（メインフィールド乗馬クラブ）をまじえて、北大馬術部のこと、さらに馬術界のことなどを語り合うことができた。

このときが、「オンタイ」との永遠の別れとなってしまった。



この鎌田正人さんの写真は、私の憧れでした。

私のアルバムには、昭和 33 年 6 月、岩手大学で行われた「第 7 回東北北海道地区大会」での「鎌田正人先輩」と書き込んであります。現在の名称では「北日本学生馬術大会」に相当します。私たちが入学した昭和 30 年代には自馬を所有する大学もまだ少なく、馬術大会は「チーム 5 名」による貸与馬団体対抗戦がほとんどでした。北大馬術部も昭和 29 年の「札幌国体」を機に自馬を持てるようになり、当時としては大変恵まれている方でしたが、自馬による個人競技の参加は「全日本大会」「国体馬術競技」などに限られていました。したがって日頃の練習でも出来るだけ沢山の馬に乗り、どのような性質・体型の馬も乗りこなせる練習が主眼でした。厳密には「馬が人を見る」と表現するのは適切でないとの論もありますが、当時の私たちは「ドント ペロリアン（馬になめられるな）」と真剣そのものでした。どんな大会でも競技の直前、初対面の馬に跨る気持ちは並大抵ではありません。張り詰めた緊張の中でそんな不安を微塵も見せず、いとも簡単に“馬と会話”されて、悠々と騎乗されるのがいつもの鎌田正人先輩でした。

この写真の鎌田さんが騎乗された馬はもちろん初対面で、それ程飛越能力のある馬には見えませんでした。鎌田さんが一つ一つ馬に話しかける風情で、馬をいたわり元気づけながら注意深く障害に向かう思いやりに、当時の私は心打たれたものです。馬も決して余裕のある跳躍には見えませんが、慎重に鼻面を障害に近づけ吟味しながら、注意深く鎌田さんの指示に集中しています。けなげなに一生懸命飛越する表情がとても可愛らしく、私のお気に入り

の写真です。とても「貸与馬」競技には見えません。

私の学生時代には「北の鎌田正人」(北大 OB)、「西の荒木雄豪」(京大 OB)とも言われ、日本馬術界の双璧的存在でした。私が鎌田先輩からご指導を得たのは、正確には昭和 32~33 年の 2 年間に過ぎませんが、「鎌田馬術」をひとこと言えば「馬の気持ちを大事にして乗ることが基本」とも言われています。いつも「乗馬とはなにか」「馬とはどんな動物か」を考えながら騎乗することを私たち後輩に助言されていました。また馬術は感覚に負うところが大きいので、その修得には「百錬自得」あるのみで、馬術の真髄は「羽化登仙」の境地にひたる楽しみとも話されています。

平成 20 年 7 月、東京 OB 会ホームページ委員会は「北大馬術部後援会ホームページ」に「部報アーカイブ」を設けました。これまでの北大馬術部「部報」の創刊号から「全巻」バックナンバーを復刻できましたが、これら「部報」の多くに鎌田先輩の提言が残されています。それら鎌田さんの馬術論をまとめ、ホームページにくおんたい話録>「鎌田正人氏 馬術を語る」としてあります。

- (1) 北大馬術部の使命 (S47 年度「部報 No.18」)
- (2) 馬術部のジレンマ (S32 年度「部報 No. 3」)
- (3) 基本馬術 (S33 年度「部報 No. 4」)
- (4) 馬の調教 (S39 年度「部報 No.10」)
- (5) 二蹄跡運動 (H16 年度「部報 No.50」)
- (6) 障害飛越 (S39 年度「部報 No.10」)

などがその主な内容です。

また昭和 39 年 8 月に鎌田さんは、北大の「北翔号」と部員の「高橋昭夫兄(S41 卒)」を日高の自宅牧場に預かり、人馬をまとめて集中調教されたことがあります。「昭和 39 年度 部報No.10」には、その鎌田さんの調教 2 ヶ月間から馬事公苑の全日学へ至る詳細を、高橋君が「北翔号について」と題して報告された稿があります。さらにこの「部報」には、鎌田正人さんが「T 君への手紙」として高橋君への積極的なアドバイスが添えられています。このような先輩、後輩の信頼関係の存在する北大馬術部を私は誇りに思い、素晴らしい北大の財産だと今でも思います。実はこのときの「北翔号」は、新冠の北大実験牧場で生まれた純血アラブ「遠汐」の仔で、小柄な「水堂」と言いました。私と小島武君(S39)の二人で日高までトラックで出かけ、この水堂を引き取りに行った思い出の馬でした。小柄な体格で、途中、トラックがカーブを切った勢いで、水堂くんが「コロリ」と荷台の上で横になるハブニングが発生しました。水堂くんは、トラックの上で横になったまま目を白黒させる仕草がとても可愛く思ったものでした。北大馬場でもアラブ特有の敏感な反応を示し、部員には「チビ」の愛称でも可愛がられました。その後この北翔号は高橋昭夫兄以外にも、五十嵐章兄(S43)、春田恭彦兄(S44)とともに全日学、国体で活躍された思い出もあるようです。

ホームページの「部報アーカイブ」を読み返していると、「昭和51年度 部報No.22」の「先輩からの手紙」の中の鎌田さんからの一文にも強い印象を受けたものです。このころ北大の繋養馬に事故が発生し、その経過報告がOB宛に届けられたことがありました。その馬術部からのお知らせに、鎌田さんは率直に部員を諭され、その鎌田さんからの返信が掲載されています。

『寒中でも皆さん元気で練習のことと存じます。事故馬のご報告に接しました。一ヶ月あまり、看病は大変ご苦労と思いますが、予後を見通して思い切って処分することも一面で愛馬心の発露と考えます。寒さと栄養失調などと聞くとなんとも可愛そうで胸が痛みます。人間どもの勝手な解釈とも考えられますが、今後の教訓として充分検討されますよう希望いたします。 鎌田正人 』

愛馬たちを事故に遭遇させないために、日頃の思いやりが必要なのは十分にみんなが分っていることではあります。分かってはいても起きてしまった不幸には、人間が責任を持って決断せねばなりません。

当然のことを話されてるのですが、われわれには若さゆえに難しい問題です。「愛」とは誠に美しく、現実には厳しいものであることを教えてくれた言葉として、鎌田さんからのお便りが、心にずしんときた覚えがあります。帯広遠征で畜大馬場を訪れることがあります。帯畜大の農場関係者と馬術部員が建てた「畜魂碑」には、ギリシャ詩人シモニデスの句「おん身らが 言のまにまに 我ら眠る」とあります。お世話になった馬たちを想うとき、この鎌田さんからの「お手紙」とともに忘れられない重みがあります。

鎌田正人先輩からは、ほんとうの馬を教えて頂きました。 ありがとうございます。 合掌

昭和33年北大チーム



鎌田正人氏の教え

昭和 39 年度卒 恩田正臣

鎌田先輩は、私が入学した昭和 34 年(1959 年)にはすでに卒業されて、浦賀の競走馬生産の鎌田牧場におられました。正確には知りませんが、昭和 30 年に農学部畜産学科を卒業割れた後、榊原姓から鎌田姓となって、獣医学科に再入学し卒業されたと聞いていました。

私が 1,2 年生の頃は、競技会の時に審判員等でお顔を拝見する程度で、先輩たちが“御大(オンタイ)”と尊称する特別偉大な人だと思っていましたので、こちらから話しかけることなどとてもできない存在でした。

私が 4 年生の時に、北大の日高実験牧場から、当時の馬術部長であり、牧場長を兼務しておられた松本久喜教授から、アラブ種の雌馬を移管してもらいました。小格ながら潜在能力の高そうな馬でした。

北翔と名付けたその馬は、学生部員が調教するにはむづかしいということで、鎌田さんに調教をお願いすることにしました。2 年生の高橋昭夫君が北翔号と一緒に鎌田牧場で合宿し、約 1 ヶ月後に札幌に戻って来たときには、すばらしい馬に調教されていました。アラブ種らしい弾発力のある軽い大きな歩様で運動し、ハミ受けもできていました。そして、高橋君の技量も格段に進歩していたのには驚きました。

さすが“御大”と呼ばれる人の調教技術と指導力はすごいものだと感じいったものです。

その鎌田さんの調教された競走馬にセントベル号がいます。昭和 37,38 年頃の道大会では、岩坪さんのヤマトオル号や帯広畜産大の竹若号やクモキリ号などを相手にして覇権を争う馬になりました。

このセントベル号で、東京オリンピックを視野に入れていたのかも知れません。

昭和 38 年の秋に、プレオリンピックをうたって国際大会が東京の馬事公苑で開催されました。この大会に出場するため、セントベル号を送り出した後に鎌田さんに事情が生じて出場できなくなりました。そして、急遽私に代役で出場するように依頼を受けました。私がある時学生の大会で東京にいたからだと思います。セントベル号には、札幌で 1,2 度乗せてもらったことがあり、乗りやすい馬だと思っていましたので、喜んで引き受けました。

130cm くらいのコースだったと思いますが、1 反抗(学生は減点 3)のみでゴールし、日本選手の中では上位に入り、次週にアバロン乗馬学校で行われる国際親善大会の日本 B チームのメンバーに選出されました。日本 A チームは東京オリンピックの候補選手です。チームは 3 名で、B チームは私と西村修一さんともう 1 人でした。ここでもセントベル号は 1 落下(減点 4)でゴールし、日本 B チームが A チームを破り、ニュージーランドに次いで 2 位になる快挙をなしとげました。

鎌田さんの調教された 2 頭の馬に乗せてもらって感じることは、調教の基本は、やわらかいハミ受けを作ること、脚に従順に、敏感に反応するようにすることだと理解しました。

馬術部の 1 年生の頃、伝説的存在だった鎌田先輩のことを、脚の力がものすごく強く、万力のように締めつけるからどの馬も乗りこなせるのだと、上級生の誰かが言ったのを聞きましたが、とんでもない誤解です。

鎌田さんの馬は、軽い脚の力で、しかし正確に扶助を与えることで、抵抗がなく従ってくれます。平成 16 年度の部報に『思いつくまま』という題で、鎌田さんの調教に対する基本的な考え方が述べられています。

私は、定年退職後に乗馬倶楽部を設立し、何頭もの新馬を調教しています。調教の基本は、鎌田さんのおっしゃるように“口向きの良い、御しやすい馬”にすることと思っています。

鎌田正人さんの訃報に接し、大変残念に思いました。

ご冥福をお祈りいたしますとともに、鎌田さんの教えをしっかりと受け留め、次代に伝えていくことをお誓いいたします。

合掌

北大復活のために

昭和 46 年度卒 松井 亮

多くの私立大学が乗馬倶楽部から実績のある高額な馬を購入して勝ちを求めている。これが馬術部のあるべき姿ではないことを、わが北大は十分自覚していることと思う。目先の勝敗ばかりにとらわれず、合理的、科学的な馬術を研究してもらいたい。結局それが効率的に競技馬を育成することになる。理にかなったものは必ず成功する。

昨年現役部員に、モモセファームで岩坪氏のレッスンを受けている高校生のビデオ映像を見せた。80~90 鞍の段階で 1m の障害飛越を練習しているものである。また小栗先輩が畜大の馬学実習生を指導した例では、50 鞍程度の段階で柏友会の公式戦に出場し、(1m クラス)、満点ゴールしている。今の北大ではどうであろう。1 m の障害コースをそこそこに回れるようになるのに 2 年近くかかっているのか。北大はこれまで馬場運動に多くの時間をさいてきた為に障害飛越における上達が遅れていることに今は気づいているだろう。ちなみにこのモモセの高校生をほぼ同時期に飛越練習を始めた社会人はそれまでモモセで馬場のレッスンを受けてきた為に鑑に体重を乗せることがなかなかできず、苦勞していた。更に我が北大において重大なことは、この 10 年間に入厩した馬が恐らく 20 頭前後はいるだろうが、安定した飛越馬が殆ど作れていない事である。普通の馬なら調教を始めて 1 年もたてば少なくともホームグラウンドで 80~100 cm の障害コースをコンスタントに回れて当然である。3, 4 年もすれば、そこそこに活躍している馬が何頭かいてもいい筈だ。現在の新馬の一部では發展の兆しも見受けられている。しかしこの全体の流れを客観的に判断してもらいたいこれだけ良馬が入手しやすい時代にあつて 10 年低迷ということはこれまでのやり方自体がでたらめなのである。正しく行えば、成果が出るまでに 10 年もかからない。今北大ははっきりと認識すべきであろう。成果の上がらぬ方法で教育された下級生が上級生になるともう修正ができず、また同じ方法をくり返してきたその結果がこの現状である。これ以上この悪循環を続けることは、希望に燃えて入部してくる後輩達にとっては迷惑であろう。大学も経営何の時代であらう。金ばかりかかってさっぱり成績を残せない運動部は廃部の対象になり得るのである。

本当に強くなりたいのなら、強かった時代の内容を学ぶべきではないか。

最初の黄金時代は故鎌田大先輩の昭和 28 年頃から札幌国体後北大に払い下げられた北嶺、北楡、らを駆使市で国体の六段、中障害等で数々の優勝、上位入賞を成し遂げた千葉、山本、森本、大場先輩方の時代である。当時の大場先輩の文章の一部だが、「愛馬に対する注意、心理の理解が調教結果を左右する最大の原因、……障害飛越にあつては用役姿勢程度以上の収縮(馬場馬術的収縮)を求めることは殆ど合目的でない、……あくまでも主眼点は長い手綱の下に頸を長く伸ばし、鼻先を鉛直線前に出して前傾させる点にある、……短期間あまりに多くのことをするような早まった考えは止めるべきである。」などここに述べられた考え方はイタリア方式に共通するものである。

次の黄金時代はイタリア方式を実践することによって作られた。馬術部としてイタリア方式をはじめたのは昭和 43 年からである。同 45 年には調教 3 年目の新馬が北日学中障害で 5 位となり、全日学へ出場した。もう一頭有望な新馬が MC クラスまで達しつつあつたが、事故で再起不能になった。その後 47 年から約 10 年間に全日学、全日本での個人優勝、全日学での 5 回の団体入賞(昭和 50~53)がある。また道内での大会ではあるが、49 年の国体予選の複合に実に 9 頭の部馬が出場し、全馬が 120cm のコースをゴールしているのである。私が知っている当時の入厩馬 17 頭のうち 10 頭が少なくとも一回は全日学に出場している。各馬がそれなりに力を発揮できるように調教してゆく。これが団体活動として重要なことであると思ふ。

さてこのイタリア方式の原則である前方騎座(ツーポイント)はそもそも何のために考え出されたのか? これがわかってないから障害前で坐骨を押し付け体をゆすって推進しようとする選手が後を絶たないのである。このことに関連してその道の第一人者である次の三人の話を紹介しよう。

青木 修 獣医師(日本馬術連盟獣医委員長)

「どんな馬でも一定の年齢になれば多かれ少なかれ腰を傷めている。馬の背は柔軟性がなく、腰の部分でのみ曲がる構造となっている」

青木氏はこの他にも馬術情報で馬の腰についてよく説明している。

藤沢 和雄 調教師

「乗り役が安易に馬背に座って、馬の腰や後軀に負担をかけることのないように、ゼッケンは小さく切って使わせている」

武 豊 騎手

「馬の動きを悪くするので、僕はだらりと脚を下げて馬の背に乗るようなことはしない」

どうだろうか？ ジョッキーは決して坐骨をおしつけて推進しようとはしない。そういう動きは馬背にとって有害無益だからである。アメリカの馬術家リッター曰く、「一部のドイツ人は坐骨で馬を推進するとか、馬場馬術が飛越馬調教においても基本であると主張しているが、私はそうは思えない」と。そして「馬の腰を後軀に負担をかけないように前方騎座で乗る。これが乗馬に際しての真のホースマンの態度である」と述べている。現部員には獣医学部生が多いにもかかわらずこれがわかっていないのは、馬の基本を勉強していないということである。

前途ある下級生の為に飛越馬術の歴史を簡単に説明しよう。ヨーロッパでは19世紀まで馬場馬術しかなかった。これはもともと王侯貴族のデモンストレーションであり、軍隊にとり入れられた。19世紀フランスの天才的馬場馬術家 Boche がこう述べている。「まず馬の持っているバランスを全て壊し、私の考えるバランスを馬に与える」。つまり馬場馬術というのは、巧みな芸術ではあるが、その内容は極めて人工的であり、自然な馬の動きではない。馬面を垂直にする、頸を屈曲させる、前軀を高く、後軀を低くして本来前方にある重心を後方へ移動させるなどという姿勢には何ら生理学的必然性はなく、馬にとって決して楽な姿勢ではない。騎兵たちはそっくり返った乗り方のまま拳もゆずらず障害飛越を行っていたため、馬たちは大きな苦痛を受けていた。

これに対して、馬の立場から考えて騎手が前傾し、手綱を伸ばして馬が楽に飛越できるように最初に考え出したのがイタリア騎兵フェデリコ・カプリリ(1868~1907)であった。馬本来の自然な動きを最優先して乗り、調教するこの方法は、カプリリ方式、イタリア方式あるいは自然馬術方式と呼ばれている。カプリリは北京オリンピックでも“近代飛越馬術の元祖”として紹介されている。騎兵の活動はパレードから、山野を駆け抜けることになっていった。それまでの馬場姿勢は人馬ともに消耗が大きかったので、必然的に前方騎座(ツーポイント)が広まっていった。60年余りイタリア方式を続けておられる岩坪徹氏は「この乗り方に無理がないからこの年まで乗れる」とのお話である。実は世界各地で自然発生的に行われてきた狩猟では皆前方騎座で乗っているのである。だからアメリカでは前方騎座をハンターシートとも呼んでいる。このように馬場馬術と飛越馬術は全く別の馬術なのである。

このカプリリ方式を受け継いだイタリア騎兵たちのめざましい活躍ぶりをドイツの馬術評論家グスタフ・ラウが絶賛している、1930、1931年の国際馬術時報(現在の馬術情報)に載った彼の文の一部を紹介しよう。「イタリア、何と言っても非常に優れている。イタリア選手の飛越法は実に精緻繊細であってもはやこの上向する余地はないほど奥義を極めている。偉大なる飛越の成績をフランス選手が第一流の駿逸をもって現したのに反して、イタリア選手はこのような成績の大部分を、小さく見ばえのしない馬をもって達成しているではないか。……」「……イタリアの選手らは既に20~25年最も厳密に研究練磨し、完璧をめざすことに専念している。だからこの方式を確信をもって示すことができおり、諸外国の才能ある選手でsっても追従できないものであることを知らねばならない。ドイツの“ザンクト・ゲオルク誌”は25年間にわたってイタリア方式を解説し、障害飛越のためにはイタリア方式を採用すべきだと主張してきた。しかし我々は飛越専門の調教のみを目的とすることはできず、あらゆる目的に応じる馬を作るため、後肢をある程度支配せねばならない。……」この文でよくわかるであろう。このイタリアの最高レベルの人馬いくせいに馬場馬術は全く必要ないのである。ところがドイツは、文末にあるように馬場馬術の伝統にこだわり、イタリア方式と馬場馬術をミックスして不自然なドイツ式を作った。本来単純明快である飛越馬調教をドイツ式が複雑にしているのである。しかし世界の多くの人々がドイツ式が正しいと信じ込んでいる。

前述のラウ氏とは別にドイツのギョルツ伯は「我々がドイツの馬をイタリア方式で調教すればイタリア並みの成績をあげられるであろう」とのべていた。まさにその通り。馬産国ドイツのパワー溢れる馬達はその後好成績を作ってきた。アメリカのリッターは「ドイツが国際競技や三つのオリンピックで勝利したことによって、ドイツのやり方がどの人馬にとっても良いことだという短絡的な結論ができてしまった」と述べている。これもラウ氏の文にあるのだが、軍馬は重量を担うから背を隆起させねばならない。だから収縮が必要である。だからドイツではイタリア方式と馬場馬術を組み合わせるといふ考えが示されている。当時障害飛越はもう純然たるスポーツになりつつあった。それを軍馬の立場で考えるというのは戦争という背景はあったにせよ、スポーツや科学に真剣に取り組む人の態度ではない。だからリッターが「時代遅れの軍隊馬術である」と批判したのである。

ドイツの馬術誌が25年間もイタリア方式を紹介したのだから、民間にはそれに純水に取り組んだ人も当然存在したと思われる。しかしドイツ馬連としてはあくまでも馬場馬術を前面に出したいようだ。昨年来日したドイツの講師は「日本の騎手は馬場馬術が足りない」と発言している。まさに伝統のしがらみである。

一方「新興国アメリカは馬術の伝統がなかったため、全面的にイタリア方式をとり入れ、飛越野外騎乗のレベルが大きく向上した。しかしアメリカの多くのホースマンはイタリア方式の基礎理論を勉強しない！ 一方ヨーロッパ人の乗り方は時代遅れだが、その教義を守るための理論を持っている。アメリカ人はそれに対抗で

きず、劣等感によって簡単に道はずれてしまう」とリッターが述べている。

北大入学以前に乗馬経験のある部員諸君はこれまで私の話に対して聴く耳を持たなかった。それは最初に教わったことが最も正しいと固く信じているからである。先入観に支配されている故に、馬場馬術を馬に要求し、飛越馬を作れていない。ある意味では犠牲者である。もっと簡単に飛越馬が作れることを認識し、いずれ再起してもらいたい。それから、狭い馬場で行われるワールドカップの難コースでは馬場馬術調教が不可欠と信じ込んでいる諸君が多いようだが、自然馬術でも十分なコントロール調教は行わねばならないのであってそれは馬場馬術とは関係なく、軟らかい口向きを作ることなのである。むしろ君たちのほうがこのような練習を行っていないだろう。ワールドカップに出てくる馬たちなら2mを当然の如く飛ぶ力をもつ。回転した後1,2歩で160cmの障害を飛べるのはそれだけのパワーがあるからなのである。数千万円～億単位で取り引きされている馬たちであり、その仔らが新馬でも数百万以上で売られる。オリンピックへ2かい出場した白井選手の愛馬もそういう馬の一頭である。恵まれたライダーたちの競演なのである。現実に戻り、自分たちの足元をかためることだ。まずは全ての新馬たちが1mの障害コースを安定して回れることから実現しよう。

結論に入ろう。良い飛越馬を作るには、馬にとって負担となること、苦痛であることを極力なくし、無理のない飛越をさせてやることである。そしてほめられることによって馬は覚えてゆく。人間だってそうではないか。馬が飛越に慣れ、熟練するためには一定数の飛越練習を反復しなければならない。馬場馬術などやっている場合ではないのだ。

馬場馬術をやりたい部員はひたすらそれを練習すればよい。使う馬を完全に分けてしまうことである。今の北大で目につく所を挙げる。まず調教以前の問題であるが、新馬を下級生の練習に使うべからず！飛越練習のそばで調馬索や輪乗りをすべきではない！練習場所を分けるべきである。冬は裸蹄にして馬場運動しかやっていないが、これでは飛越人馬が育つはずがなかるう。金がないなら馬を減らすか、もっとアルバイトを増やすかによってまともな活動をするべきである。

1. 横木またぎから、キャバレッティ、低障害通貨までの初期のプロセスをじっくりやること。ここを短期間ですまそうとして失敗している。
2. 飛越時馬が必要なだけ頸を伸ばせるように十分拳をゆるる、または手綱をすべらせてのぼす。
3. 障害が大きくなるにつれ、十分に前傾できるように(胸を下げる又は尻を前に突き出す)。そのためには鏡をしっかりふんばること(前方に向かって)。
4. 常歩以外は前方騎座を徹底する。少し尻を浮かせればよい。鏡上げは初心者には害のほうが多く、馬背にも悪いので廃止すること。踏み切り直前まで坐っていると随伴が遅れやすい。
5. 馴致のためには馬場内に常に障害を配置しておくこと。いちいちしまいこんでいては馴致にならない。新馬が馴れないうちは遠まきに歩くだけでよい。
6. 低障害のコース回りを日常的に行う。回ってみて学ぶことが多い。直線の連続障害だけでは全く不十分。低障害も回れないのに連続障害を高くするのは無意味であり、失敗を招きやすい。広い馬場をもっと活用すべきである。
7. 歩度の増減、停止、後退、発進を無理なく反復して行い、操縦への反応を高めていく。
8. ほうびのえさは必ず騎手が自ら与えること。

以上簡単なことである。馬にとって難しくないことが重要なポイントなのである。実践してもらいたい。馬は必ず良くなる。もっと研究したい人は「今村馬術」の飛越馬調教の項をよく読むとよい。

故鎌田大先輩が晩年にこう語られたそうである。「今村先生がその考えを強く発言する人であれば日本の馬術はもっとかわっていただろう」と。

諸君はどのように解釈するであろうか。

《香港》

昨年の北京オリンピックはまだ皆さんの記憶に新しいところでしょう。私は、馬術競技の日本選手団の役員としてこれに参加したので、この紙面をお借りして紹介させていただきます。私は、2003年に日本中央競馬会を退職し、2007年からは社団法人日本馬術連盟の常務理事として勤務しています。学生時代からの馬術との縁が今も続いています。

北京オリンピックとはいえ馬術競技は香港で行われました。馬術のほかにセーリングも北京でなく青島で開催されています。蛇足ですが、香港は、アヘン戦争により英国が割譲した「香港島」と「九龍半島」および1898年に99年間の期限付きで英国が中国から租借した「新界」と呼ばれる大陸側の地域からなり、面積は東京23区の約2倍、人口はおおよそ700万人です。新界の租借期限の1997年7月に英国が3地区をセットで返還し、現在、マカオとならんで中国の特別行政区となっています。馬術競技会場となった沙田(シャティン)競馬場は、新界に位置しており、中国本土の深圳市まで電車で30分程度です。

オリンピックの会期は8月8日(開会式は中国の縁起により午後8時8分8秒スタート)から22日(閉会式)でしたが、私の滞在は、馬の入厩から退厩までを見る関係から7月25日から8月25日までの32日間の長逗留となりました。滞在は、選手村(「ロイヤルパークホテル」借り切り)です。厳しいセキュリティー関門が面倒ではありましたが、快適でした。

《馬術会場是北京から香港へ》

2008年の第29回オリンピック競技大会の開催地は、2001年のIOC総会で大阪市などとの招致競争を勝ち抜き北京市に決まりました。そのときには、馬術競技も北京市で行われることとなっていました。会場予定地は、北京市郊外の郷村(元)競馬場とその周辺です。中国では賭けを伴う競馬は非合法ですが、この競馬場は、警告を受けて閉鎖されるまで相当の期間黙認され営業していました。このときの競技場プランは、郷村競馬場とそれに隣接するゴルフ場を使った広大なもので、国際コンペの結果日本のランドスケイピング会社のプランが採用され、日本でも話題となりました。内外の競馬関係者には、オリンピックの後には競馬が解禁され競技場跡地が正式に競馬場となるのではないかとの期待もあったわけです。

しかし、これまで馬の国際交流の経験がなく、現実的に防疫上の問題が危惧される中国本土において世界の各地から250頭もの馬が集まるオリンピックができるのか。中国と各国との間で検疫についての二国間協定が新たに締結されない限り、北京に渡った馬が母国に帰国することはできないのです。北京オリンピック組織委員会は15日間に短縮した入国検疫を行うとして実施計画を提出していましたが、これは中国側が決める問題ではなく、馬を送り込む側の国が中国から帰国する馬を受け入れることができるかどうかの問題なのです。北京に決まったときから国際馬術連盟(FEI)は、国際獣疫事務所(OIE)と協力してこの困難な問題について検討を続けていました。

最終的に2005年夏、北京オリンピック組織委員会は、北京では検疫問題を克服できないとの結論に達し、会場を香港とすることとしてIOCの了承を得たのです。香港にはシャティン競馬場(新界・沙田区)とハッピーバレー競馬場(香港島)を持つ香港ジョッキークラブ(HKJC)があり、その全面的な協力が得られた結果です。事情に通じたHKJCが誘致したというのが実情のようではあります。香港には馬の生産はなく、競馬は輸入馬や海外から挑戦する馬によってのみ成り立ち、日頃から国際競走の経験が豊富であることから馬の国際移動に関して全く問題はありません。メイン会場は、シャティン競馬場で、クロスカントリーは40km

ほど離れたHKJCが所有・経営するピーズリバー・ゴルフ場です。とはいえこの時点で大きな問題が残っていました。第1に僅か2年間で会場設営ができるのか。本番前年の同時期にプレオリンピックを開催しなくてはならないのです。第2に馬のウェルフェアの観点から熱帯に近い香港の8月に馬術競技をやってよいのか。特に馬の健康と気候の問題については、FEI主導の獣医師を中心とする国際検討委員会によりデータに基づいて詳細な検討がなされました。その大まかな結論として、①厩舎、インドア馬場および馬運車の空調温度を23度と

馬場全景：決勝時には18000席が満席となった
(写真：中西祐介/アフロスポーツ)

する、②都合のつかない総合馬術の一部セッション(クロスカントリーと総合馬場)を除いて、競技は日没後に



行う、③ 必要な場所にクールミストブースを設ける、などが決まりました。その結果、2年間の突貫工事を経て部分完成ながら2007年7月にプレオリンピックが成功裏に実施され、翌年には日程ギリギリでオリンピック馬術競技史上例をみない最高の馬術競技施設が完成した次第です。

因みに、香港でも夏には「日本脳炎」が動きます。日本や香港国内ではワクチン接種が一般的ですが、東南アジア以外ではワクチンが承認されておらず、多くの国で私的なワクチンの持ち込みさえも禁止しています。今回のオリンピックでは要項に「事前のワクチン接種が望ましい」と書いてはありましたが、実際接種することはほとんど不可能だったと思います。幸い会期中に発生はなかったようです。

《漢字表記が面白い》

外来語の漢字表記は中国の得意技です。HKJCの国際競走のために日本から遠征する競走馬にも音と意味を巧みに組み合わせてユニークな漢字馬名が付けられているのをご存じの方も多いと思います。オリンピック競技大会は、音から「オリンピック運動会」となり略して「奧運」です。馬術は「馬術」ですが、障害馬術競技は「揚地障碍」、馬場馬術競技は「盛装舞歩」、総合馬術競技は、馬場馬術・クロスカントリー・障害馬術の3つの審査があることから「三項賽」となります。それぞれ音ではなく意味からですが、「盛装舞歩」はまさに的を射ています。

《天気には恵まれた》

真夏の香港での競技とあって、いろいろ心配しましたが、気温はそれほど上がりず東京のほうが暑い日も何日かはありました。ただし、常に湿度は高く、雨でもないのに概ね90%前後です。雨の多い季節にもかかわらず、雨は総合馬術競技のクロスカントリーの日だけと天候には恵まれました。また、2度の台風直撃を受けましたが、幸いなことにそれは競技前の8月6日と終了後の8月22日でした。因みに、前年7月のプレオリンピックの時にも台風の直撃を受けています。香港では台風がくると、気象台からレベル10を最大とする警報が出され、国民はその警報レベルに応じて決められている要領に従って対応しなければなりません。6日の台風はレベル8、22日の台風はレベル9であり、どちらも高いレベルであり、馬も人も屋内待機を余儀なくされました。22日には日本馬を含めて多くの馬の帰国が予定されていましたが、当然ながらフライトは欠航、翌日に延期されました。

《オリンピックの馬術競技》

FEI公式種目としての馬術競技は、障害、馬場、総合、エンデュランス、軽乗、馬車、レイニング、障害者馬術の8種目です。そのうちオリンピック種目となっているのは、障害、馬場、総合の3種目であり、オリンピックに引き続き開催されたパラリンピックで障害者馬術が行われました。パラリンピック馬術競技には日本から1名が参加しています。因みに日本馬術連盟の公式種目は、障害、馬場、総合、エンデュランスです。

オリンピック3種目はそれぞれ個人と団体が競われますが、団体出場枠配分システムが今回から改められました。これは実力的に欧米に偏りやすい予選システムを、オリンピック精神にのっとり世界を7区分し、それぞれの地域に均等に団体出場のチャンスを与えようという改正です。この改正により2007年夏から2008年の初めにかけて、アジア、中近東、オセアニア、アフリカにまたがる地域代表を選抜する国対抗の地域予選が行われました。日本は、馬場馬術競技予選ではオーストラリアに次ぐ2位となり、昭和39年東京大会以来の団体出場(3人)が実現しました。障害馬術競技では僅差でニュージーランドに敗れて団体出場権を逃し、個人2人だけの参加となってしまいました。これまで障害では団体を逃したことがなかっただけに非常に残念な結果でした。総合馬術競技では海外で競技活動している選手が1人しかいなかったため団体予選に出場することができず、個人1選手だけの参加となりました。

個人出場資格は、3種目とも団体出場資格を持たない国の個人に対して、世界ランキングの上位から順次与えられます。その人数は、出場限度人馬数(障害75、馬場50、総合75)から団体出場する選手数を引いた数となります。また、ランキングにより権利を得た個人選手が同一国3人以上になれば団体とみなされます。

日本からは、3種目あわせて選手6人、馬6頭です。日本からといっても、選手と馬の訓練基地はすべてヨーロッパであり、当然馬の輸送もヨーロッパからとなります。

オリンピックに参加するためには団体としての権利の有無に関わらず選手個人が人馬のコンビで資格を得る必要があります。他の競技でいう、所謂「オリンピック標準記録」です。その資格は、所定の期間に世界各地で開催されるFEI公認の所定レベル以上の大会で、基準以上の成績を出すことにより獲得できることになっています。残念ながら日本国内ではそのような競技会が必要だけ開催されていないため、選手は海外で訓練を積み、ランキング対象の競技会で実績を残さなければならないわけですが、検疫という障壁のため馬の行き来が簡単ではないことから、継続して海外に拠点を置いて活動せざるを得ないこととなります。

馬場馬術の法華津寛選手は、東京オリンピック以来44年ぶりにオリンピックに出場するシニア世代（世界中から集まった北京オリンピックのすべての競技の選手中、67歳の法華津選手が最年長だった）であり、且つヨーロッパの多くの競技会でトップクラスの成績を出していたために、昨年来マスコミで大きく取り上げられました。日本のメディアは勿論のこと、CNN、BBC、ウォールストリートジャーナル、新華社をはじめとする世界中の大手メディアから取材を受けました。日本で馬術競技がこれほど脚光を浴びたことはこれまで無かったことです。

馬場馬術演技中の法華津選手&ウイスペー

《競技施設はすばらしかった》

メイン会場はシャティン競馬場に設けられた特設競技場です。この場所は、競馬用のオーバル馬場を挟んで競走馬厩舎地域の反対側にあり、元はテニスコートなどの運動施設のあった部分で、既存の建物もインドア馬場（70m×35m）やレストラン、会議室などに有効に使われました。この期間は競馬のシーズンオフですが、1,100頭の競走馬が在厩しており、朝9時までは競走馬の調教時間帯と決められ、走路区域にある練習馬場にはオリンピック馬は入れないこととなりました。競走馬厩舎とオリンピック厩舎の防疫上の線引きは、HKJCの獣医スタッフの重要な仕事になっていました。

厩舎施設は、HKJCがオリンピックおよびパラリンピックの後、国際競走のための外国馬厩舎および検疫厩舎として使う目的で建設したもので、鉄筋・エアコン完備の立派なものです。日本チームには、6馬房の独立棟が割り当てられ、快適にすごすことができました。

練習馬場は、FEI（国際馬術連盟）のオリンピック施設基準にのっとり芝馬場、インドア馬場のほか全天候馬場と総合馬のための芝走路および練習用クロスカントリーコースが築造されました。競技が行われる本馬場は、18,000人収容のスタンドと聖火台そして法華津選手を悩ませた問題の大型スクリーンを備えた100m×80mの全天候馬場です。インドアを含めたすべての全天候馬場はヨーロッパで主流となっているもので、ヨーロッパの専門業者が敷設シメンテも請け負っていました。これは水を含むとしっかりと締まる重い砂にフェルト片を混合したもので、砂は地元で調達しフェルト片を現地で混合して調製したとのこと。競馬用の馬場構造とは本質的に異なるこの馬場は、競馬用と比べればクッションは硬いけれども、大雨が降っても水溜りができることもなく、特にグリップが効く優れたものでした。馬術用馬場としては満点です。

総合馬術競技のクロスカントリー競技場は、沙田から40kmほど北にあるピーズリバー・ゴルフ場に建設された特設コースです。68頭のクロスカントリー参加馬は、エアコン完備の大テント厩舎に前日輸送されました。この1日だけのためにコースはもとより厩舎とグルームの宿舎を用意しなければならないのだから主催者は大変です。クロスカントリーの距離は、暑さを考慮して当初から5,700mと短く設定されていましたが、直前になってさらに短縮され4,560m（分速570m、29障害39飛越）となりました。距離は短いものの最高難度のオリンピックであり、無過失で走破した馬がいなかったほど、難しいコースではありました。1日だけとはいえピーズリバーにはメイン会場にあるすべての施設が整っていました。競技運営および観客に必要な施設はもとより、馬の診療施設においても最新の診療機器と全身麻酔の手術が可能な設備が整っていました。また、厩舎の全馬房に補液吊り上げ用の滑車が備えられ、多くの馬がクロスカントリー走行後補液治療を受けていました。欧米オセアニア流のクロスカントリー・ゴール後の馬のケアは、極めて入念です。脱鞍して直ぐに氷がびっしり入った大きな水槽の水をバケツに取り迅速に全身を洗います。平行して心拍と体温を何度もはかり、これらが正常に戻るまで洗い続け体を冷やすのです。馬房に戻ってすっかり馬が落ち着いた後に補液です。補液の量は脱水の程度の判断によりますが、通常15リットルを静注します。日本の代表馬ゴージャスジョージには30リットルの補液が与えられました。このことについてFEI獣医規程は、競技場での治療行為について「臨床的な理由のない少量（1~5リットル）の補液の要求は受け入れない」と規定しているように、日本で行われている補液からすればかなり大量です。



《自己ベストの演技にはほど遠く》

さて各選手の順位は残念ながら期待を裏切るものではありませんでした。

総合馬術競技の大岩義明選手は、オリンピック直前に一流の選手がそろったドイツの大会で8位と健闘していました。特にクロスカンントリーではメダル級の実績があり自信を持って臨みましたが、3つの連続障害を1セットとするトリプルの第9-A障害の着地後、正面幅が1mに満たないBに向かえず1反抗、さらに二つの障害が斜めに設置されたダブルの第21障害をストレートで攻めるため斜めに向かったA障害で右に切られて二つ目の反抗を数えてしまいました。3日目の障害馬術でも2落下を喫して49位に終わりました。オリンピック初出場のプレッシャーと上位を狙う気負いが失敗の原因となったものと思われます。

馬場馬術競技の演技はNHKで録画放映されました。法華津選手のウイスパーは、オリンピック直前にヨーロッパで最も権威のある大会で5位に入賞するなど素晴らしい成績をあげていたのに、年齢ばかりでなく世界のマスコミが注目していました。しかし、この臆病な牝馬は

大岩選手&ゴージャスジョージ

(写真：中西祐介/アフロスポーツ)

最初の本馬場練習の日から大型スクリーンに脅え、ひどい興奮状態になっていました。馬房の前にテレビを置いて見せるなど、競技までの期間、スクリーン馴致は随分やったのですが、本番の演技途中、スクリーンに直面する常歩の斜め手前変換中に画面に映る吾身がズームアップされたのを見て、爆発してしまいました。馬は立ち上がり逆方向へ走って逃げ出してしまったのです。準備運動中にも遠くに見えるスクリーンを気にして、満足な調整ができぬままの本馬場入場でした。そのため決勝には進めず35位に終わりました。事前の監督会議で審判団に対してスクリーン消すように多くのチームから意見が出されていましたが、聞き入れられず法華津選手のほか多くの馬がこのためと思われる失敗をしています。法華津選手の馬は最もひどく怯えた馬の1頭ですが、極度の興奮のため途中で棄権した馬も出ています。

今回の大会で女性選手最高齢の八木三枝子選手はミスなくまとめたもののスコアは伸びず42位に終わりました。北井裕子選手は前半のミスの後半である程度挽回しましたが、得点率は60%にわずかに届かず45位。3選手ともめざした自己ベストの演技にはほど遠く、団体は10位の成績に終わりました。後にアメリカのドーピング違反が発覚して9位に繰り上げとなりました。



杉谷選手&カリフォルニア

(写真：中西祐介/アフロスポーツ)

障害馬術競技(高さ160cm、水濺幅420cm)に出場した2人の選手は、ともに予選第1走行をノーミスでクリアし、大きな期待が集まりました。しかし、予選第2走行で佐藤英賢選手は6落下(減点24)をしてしまい、予選第3走行には進めずここで敗退。1996年のアトランタから連続オリンピック出場を果たしている杉谷泰造選手の第3走行では2落(減点9)で3日間の合計減点が26となり、決勝ラウンドに進むためのリザーブ1位にランクされました。決勝ラウンドはその3日後ですが、その間に重大な発表がありました。

予選直後のドーピング検査で上位にいたブラジル、ドイツ、アイルランド、ノルウェーの各1頭の検体から知覚刺激剤(カプサイシン：唐辛子の刺激成分)の

陽性結果がでて、選手に暫定資格停止処分が課せられ、それら4人の選手が決勝参加不能となったのです。さらに馬のインスペクションでメキシコの馬が跛行で脱落。結局5頭が抜けてリザーブにノミネートされていた全4頭が決勝ラウンドに進むこととなりました。決勝のラウンドAに臨んだ杉谷選手は、痛い3落下(減点12)を喫して上位20人(結果的に減点4以下の22人)が進出する決勝ラウンドBには残れず、最終的に29位で自身4回目のオリンピックを終えることとなりました。

《ドーピング防止は馬の世界でも重大課題》

ドーピング問題はさらに続きました。上記の4頭は、決勝ラウンド前にA検体の検査を終えた15頭のうちの陽性事例ですが、その後、障害馬術競技決勝で個人5位となったブラジルの馬からも知覚刺激剤陽性結果がでています。また、馬場馬術競技でも個人13位のアメリカの馬から抗炎症剤（フェルビナク）が陽性となりました。A-検体陽性結果に際しては、当事者が望めばB-検体の検査が行われB-検体も陽性となれば、ヒヤリングに引き続きFEI司法委員会により規程に則って処分が出されます。処分は、競技成績の抹消、罰金および資格停止からなり、違反の程度によって罰金の金額および資格停止の期間が申し渡されます。この処分に対して選手には上訴権があり、さらにはスポーツ仲裁裁判所（CAS）への提訴権利期間30日が与えられます。従ってこれらの手続きが終わるまで処分は確定せず、順位の訂正まではかなりの日数がかかります。

障害馬術競技で摘発された知覚刺激剤は、馬の下肢部に塗り、その部分の知覚を過敏にして障害物に接触するのを嫌がらせ、障害の落下を防ぐ目的で使用するというものです。これは血液や尿からの検出は困難ですが、FEIの規定では馬の被毛等を検体として採取できることになっています。

競技者のドーピング防止は、1999年にIOC主導でスイスに設立された世界ドーピング防止機構（WADA）がコントロール（国内では財団法人日本アンチ・ドーピング機構：JADA）しており、その規程の中で、「動物を関与させる競技種目はその国際競技連盟が競技者と同様の規程を設けてドーピング防止を動物にも適用すること」となっています。馬術の場合、FEIがWADA規程とほぼ同様の馬に対する規程をもち、それを受けて日本馬術連盟も国内版の馬のドーピング防止規程を設けています。もちろん選手については、他の競技と同様WADA規程（国内競技にはJADA規程）が適用されます。

《オリンピックを日本に》

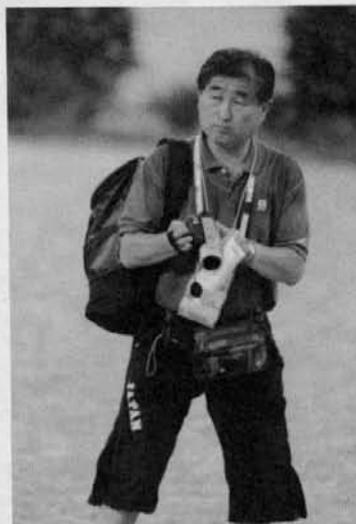
現在、2016年のオリンピック・パラリンピック開催地として東京が立候補しています。東京のほかシカゴ、リオデジャネイロ、マドリードが招致合戦を繰り広げており、2009年10月2日コペンハーゲンで行われるIOC総会で開催地が決定することとなっています。東京が勝った場合、馬術競技会場は「夢の島（クロスカントリーは海の森）」が予定されています。

日本馬術連盟としても、東京都東京オリンピック招致本部および東京オリンピック招致委員会（NPO法人）と協力して準備を進めているところです。香港の経験が大いに役に立っています。まずは馬術競技場のレイアウトです。これは2008年秋にFEIの審査を受け合格していますが、観客、選手、馬、役員、業者が円滑な動線を確認すべくさらなる検討が必要です。同時に、会場のセキュリティー対策がオリンピックでは非常に重要となります。7月末から8月にかけての開催予定なので暑さ対策は香港と同様です。政府レベルの課題ではありますが、各国から馬を受け入れるにあたり検疫は重要な問題となります。また、香港ではの市民が英語を話し、彼らはボランティアとして大会運営の多くの部分を担っていました。日本であれだけの人数の英語ボランティアが集まるのか若干不安があります。

それより何よりも選手を送りこむ日本馬術連盟としては、成績上位を目指す取り組みが至上命題となります。オリンピックを目指して資格取りに挑戦し上位を狙える選手がひとりでも多く出てきて欲しいものです。

2016年東京が実現したら、大会運営のための英語ボランティアに皆さんの参加が是が非でも必要となるでしょう。
筆者：障害馬術競技の決勝コースにて

（写真：中西祐介／アフロスポーツ）



この記事は、北海道大学獣医学部同窓会関東支部の許可を得て会報第34号（平成21年3月発行）の記事をそのまま転載したものです。

◇北海道大学水産学部馬術部◇

主将 長崎諒

僕たち水産学部馬術部は、学部校舎が、札幌から離れ函館に位置するため、函館競馬場の乗馬センターに通い、先生から乗馬技術の指導を受けさせてもらい、活動しています。なので、全学馬術部と違い、自馬を持っている訳ではありません。が、一人一人が馬とふれあうことを楽しみ、乗馬技術の向上を目標に活動している点では、全学馬術部と共通していると思っています。

僕ら代は、全学からの経験者はなく、みんな函館から馬術を始めました。なので、乗馬技術に差はなく、みんな先輩や、先生の指導無しにはまともに仕事もできなく、不安だらけでした。しかし今では、みんなで互いの協力のもと、活動して行くと言う決意を胸に、それぞれの仕事にも慣れ、なんとか初めての大会にも出場してることが出来ました。出場する数少ない大会のうち、モモセダービーと、酪農学園主催の山下杯に出場してきました。完走できた者、出来なかった者、入賞して喜んだ者、出来なくて悔しかった者いましたが、次の大会への良い目標になったのと共に、他大学の騎乗、活動を見て、自分たちの活動を見つめ直す機会にもなったことが、大きな収穫であったと思います。

現在は三年生六名、四年生五名、院生三名、に新たなメンバー、二年生を加えて練習しています。二年生は、経験者一人、残りは未経験者、という、少し不安かつ、少数ですが、一人の経験者を中心に、また、僕たちの代からの指導で、良い部活にして行きたいと思います。

個々の目標を大切にしながら、同じ、馬と心を通わせることを目標とする仲間の集まり、部活として活動して行けたらと思います。



◇卒部にあって◇

●宮本 亮(獣医・前主将)

あっという間の4年間でした。めちゃくちゃ楽しい4年間でした。卒部した今となつてはそんな日々がとても懐かしく感じます。朝起きて家を出る前にコーヒーを飲まないで落ちつかない以上に、朝起きて学校に行く前に厩舎に行かないことが落ち着かなくさせ、気づいたら月曜だろうが何だろうが毎朝毎夕、厩舎に通っていました。カフェイン中毒以上に馬中毒だったのでしょうか。勉強なんてどうでもよかったです。その気になればやればできる勉強より、どれだけ乗っても思うようにいかない馬と向き合っていることのほうが何倍も楽しかったです。夕当後の白いごはんのうまさは忘れられません。たまに買った発泡酒の苦味は格別でした。そして何の面白みのない授業でよだれを垂らしながら居眠りをする事の気持ちよさは馬術部員にしか感じる事の出来ないものでした。卒部した今となつてはそんな喜びが薄れつつあります。ごはんも、発泡酒も、居眠りも、もっといいものだったのになあと感じてしまいます。

現役部員には、今のがむしゃらな生活を楽しんで欲しいと思います。しんどくても、最後までやり通して欲しいと思います。結果として何かを残せなくても、きっと自分の中には何か頼りがいのある、どっしりとしたものが残っていてくれると思います。「きっと今ここでやりとげられること、どんなことも力にかわる」ってk i r o r oが歌ってました。「どんな季節も意味のない風は吹かないはずだから、強くはかなく咲く花のように、今を受け止めて」ってコブクロが歌ってました。この先、色々かつらいこともあるでしょうが、頑張ってください。少しでも役に立てるなら、どんな形でも、協力したいと思っています。

最後に、4年間で出会ったすべての馬と、すべての人に・・・ありがとうございました。

——進級すごいですね。

——オーラ馬術といえばこの人。主将お疲れ様でした。

——最近再試で見かけることが少なくなって寂しいです。

——ヘン顔が面白いです。

——オセロ期待してます。

——引退してからの快進撃がヤバい。

●小島 真宏(経済・会計)

馬術部での4年間は本当に山あり谷ありの生活でした。良いことばかりでなくもちろん嫌なこともありました。悲しいこともありました。ただ嫌なことがあっても、悲しいことがあっても、次の日の朝、馬達を見ると「がんばろう」と思えました。

「自分は馬が好きだから馬術部に入ったんだ。」

「馬が好きだ」という気持ち。

現役のみんなも、部活のことで悩んだときはこの気持ちを思いだして欲しいと思います。

4年間様々な人、そして馬たちに支えられて卒部することができ、今は感謝の気持ちでいっぱいです。普通の部活では体験できないことを体験することができ、また上辺だけではない心から信頼しあえる仲間たちと過ごすことができ、大変ではありましたがとても充実した4年間を過ごすことができました。入部した時と比べ、人間としてひとまわり大きくなれた気がします。

——シーベは元気です。

——相変わらず優しいですね。

——未だに私にとっては建部兄です。

——そのボソッというツッコミ最高です。

——馬にも部員にもやさしい先輩でした。

●谷口 善彦(農・バイト・北日幹事)

あつという間の4年間でした。これほど充実した時間をくれる部活は世界中探してもないと思います。本当に色々な経験をさせてもらいました。

考えて、考えて、考え抜くことが求められる日々の中で悩み苦しみながらも人間としてたくさん成長させてもらいました。1年の時に何もわからないまま、ただただ興奮し感動した全日という夢舞台で自分自身も戦うことが出来ました。くだらないことを言い合ってアホみたいに笑ってた練習後や夕当後のひとときが今ではかけがえのない宝物です。

優しい中にも厳しさがあり、楽しい中にも緊張感がある、言葉だけでなく態度でも部活を引っ張ってくださった頼りになる先輩方。だらしない僕にも最後まで愛想を尽かすことなく、4年間という長い道のりを共に歩いてくれた個性的なドンパたち。上手くなろうと一生懸命練習に取り組み、普段のしょーもないフリにも面倒くさげらず笑顔で応えてくれる真面目で優しい後輩のみんな。そんな数々の人に支えられてここまで来ることができました。

朝は早いし、バイトは多いし、冬は寒いし、周りからは「なんでやってんの?」と言われるような部活ですが、そんな馬術部生活が送れたことを僕は心から誇りに思っています。

部員全員が僕みたいな気持ちで卒部の日を迎えられるよう、現役のみんなは明るく元気で活気のある部活作りを目指して頑張ってください!!

本当にありがとうございました。

——最後までムードメーカーでした。寂しくなります…。

——いろいろありましたね。やはり谷口さんには敵いません。

——日本で9番目の男

—ジーちゃんのカワイさによく気づいてくれた。

—卒部しても後輩から引っ張りだこ。人気者は今も健在。

—競馬強いですね

●山中 謙司(工・後援会)

入部から卒部まで本当にあっという間でした。部活中心の生活で一日があっという間に過ぎていき、気が付けば季節が変わっていく感じでした。そんな日々が終わり、達成感と喜びと少しの寂しさを感じて生活しています。

馬術では色々な経験をすることができました。この経験はこれからの人生で必ず生きてくると思います。いや、むしろ生かしていかなければならないと思っています。

最後にマイペースな人間で特に先輩・特にドンパ・特に後輩の皆さんにはご迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫び申し上げます。もう少し札幌に残るのでまだまだご迷惑をおかけしますが、これまで通り大目に見ていただけると助かります。

—お疲れさまです

—院がんばって下さい VIVA 兵庫☆

—またトルにあいに行きましょう

—ロイヤルが大好きです。

—マイペースです。

—また車はまったら呼んでくださいね。

—ふとしたやさしさに心が染みます。

●山川 倫明(経済・主務)

馬術部の特徴といえば、一頭の馬と真剣に向き合えることではないかと思います。乗馬クラブに行ってもなかなかそうはいかないでしょうし、ましてや社会人になってしまえば、十分な時間もとれないのではないのでしょうか。そう考えると、本当に貴重な経験ができました。

パワフルショットには、何度やってもノーザンのリパプールで反抗され、自分の未熟さを思い知らされました。ネイチャーヒーラーは、調教の難しさと楽しさを教えてくれました。エルグレイは、東京に連れて行ってくれ、少しだけアスリートな気分を味わわせてくれましたし、馬術とは何なのかを教えてくれた気がします。馬達とは、少しずついい関係を築くことができたのではないかと思っています。

ただ、人との関係はいまいちでした。周りからすると、僕はやっかい者だったかもしれません。この反省を生かし、これからはもっと大人にならねばと思っています。部活も色々な人に支えられながら成り立っているというこ

とをもっと認識すべきでした。

最後に、お世話になった方々へ、本当にありがとうございました。

——北大18年ぶりの北日チャンプ。これからもお願いします。

——ネイチャー溺愛です。

——厳格です。

——セイコマを更に発展させて下さい。

——精神的な強さにいつも驚いてしまいます。

——「らしさ」が良かったです。

●吉村 誠司(獣医・馬匹)

四年間馬術部を続けて本当に良かったと思います。馬術部をやってなかったら中身のない大学生活を送っていたことでしょう。これまで自分を支えてくれた皆さん、ありがとうございました。そしてこれからの馬術部を担っていくみんなは、つらいこともあるかもしれませんが、楽しい馬術部になるように頑張ってください。何か面白いことが欲しければいつでも振ってください。冬タイヤを履いていきます。

——高度なギャグは健在。これからも宜しくお願いします。

——最近のネタはキレがイマイチ??

——学部で会うたびにマリを見てほくそ笑んでます。いちゃいちゃ。

——独特のオーラがあります。

——振り逃げ多くないですか?

——トラをよくいじめてます。

●真田 有貴(水産・記録)

毎日すごい個性的な部員に囲まれ、自分の個性の無さに悩んだ事もありましたが、虫嫌いなのに一番心静まる場所がボロ山となったり、○キロ太ったり、作業着でコンビニ行ったりと色々な意味で成長できた二年半でした。三年目に北日で北遥で出させて頂いたりと本当に楽しかったです。

一年の時に憧れた先輩のようにはなれなかったけれど、大好きな馬と過ごせて充実した馬術部生活でした。そういう思いでやっていけたのは、OBの方々、先輩、ドンパ、後輩、馬達、そして実家の両親のおかげです。

ありがとうございました。

北椎、北替、そして北遥にまた会いに行きます。

—今どこに？

—いつか六花亭にいきましょう。

—最近音沙汰ないです。元気ですか？

●伊藤 海(水産・企画)

「あ〜…なんかサッカーとかもう飽きたし、大学から新しい部活始めたいなあ。初心者から始めて国体とか狙えるやつとかなないかな…」私が馬術部というものに興味を持ったのは以上の不純な動機からによるものでした。すいませんでした。しかし、実際に馬場に何度も足を運んでいるうちに馬術への興味、また元来の体育会系精神に火がつき一気に馬術部ライフへのめり込んでしまいました。

そんなこんなでプラトーとスランプを繰り返しているうちにあっという間に北日学がやってきました。最後の試合でエルグレイという大学馬術界を代表するような名馬に乗せていただいたことは感謝しても感謝しきれません。試合結果は散々たるものでしたが、私にとっては最高に充実した3分間でした。山川兄、ありがとうございました。

一年半を振り返ってみて、毎日の朝練、パワとのNHP合宿、宮本兄との長きにわたる木曜泊まり、エルグレイとの北日学、どれをとっても素晴らしいものばかりでした。30年後くらいに、酔っぱらってこれらの思い出を部下に誇らしげに語っている自分が容易に想像できます。本当に楽しい一年半でした。

先輩方へ。最後になりましたが、生意気な後輩ですいませんでした。半澤杯、札幌・函館対抗戦で少しでも上手くなった姿を見せられることで恩返ししたいと思います。ドンバのみんな、これからもよろしく。函館でぬるま湯につかっている俺になんか負けないようにがんばってね〜！ではまた会いましょう。

—これからが楽しみだっただけに函館行ってさびしい。

—水産でも頑張ってください。

—ナイス RUN

—色々忙しいみたい、でも元気そうで何より

—Dあると思います

◎宮本兄と北替



◎小島兄と北遥

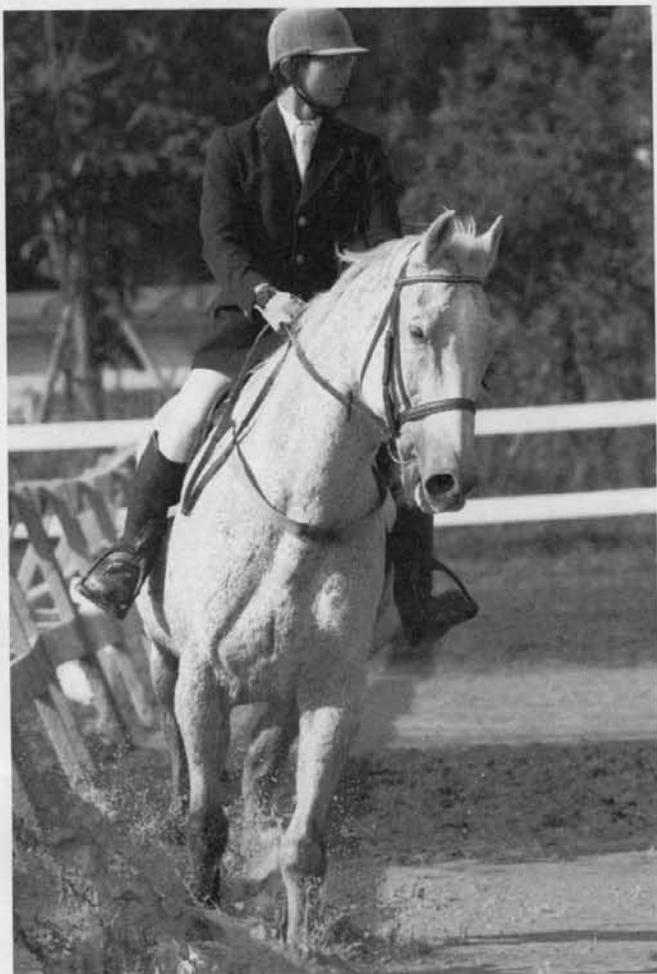


◎谷口兄（追いコンにて）



◎山中兄と北旋風

◎山川兄とエルグレイ



◎吉村兄と北鳳号



◎真田姉と北遥号



◎伊藤兄



○部員紹介○

3年目



後列左より 武藤、斎藤、内山

前列左より 田中、村木(&トラ)、野村

◎野村 基惟(獣医・主将)

目標は全人馬の健康と安全。結果はついてくると信じ頑張ります。

——シンコウと全日にゴージャックしましょう——

——何かと頼れる主将

——何でも出来て精神的に強く、見習いたいです。

——ドンパも軽く流しちゃう。このイケメンめ！

——頼りになる主将です！

◎内山 知(農・バイト)

今年は畜牧の内山です。

——愛するスペと頑張ってね。

——“どや顔”

——競馬の知識は北大一!?

—後輩ができてよく「振る」ようになった。

—料理の作り方教えてください。

◎齋藤 孝洋(文・後援会)

気がつけば最後の一年になってしまいましたが、残りの日々を大切に頑張ります。

—ジーニのうつを治して下さい。

—最高学年になってもまだまだ名物部員。

—馬術部のマスコットの存在？

—Volume up!

—ふわふわしてます。

—トラを溺愛してます。

◎田中 里枝(農・会計)

なんちゃって馬術部員は今年も頑張ります。

—厚別

—シーベの母。お菓子いつもおいしーですw

—様々なことを考えてくれているので助かります。

—シーベのこととなるといつも以上に心配性ですね。

—実はめっちゃおもしろい、坂田とのカラミは perfect です。

—真面目でしっかりしているけど稀にボケを放ったりします。

◎武藤 将充(工・主務)

馬術部員でいられるのもあと少し

—工学部大変そうですね。リーズンと乗り越えて下さい。全日！

—一緒に全日へ行きましょう。

—学校忙しいみたいですがリーズンと全日行って下さい。

—よく後輩や齋藤をゆきにうずめている。楽しそう。

—スマブラめっちゃ強いです。

◎村木 泰子(獣医・馬匹、トラチーフ)

あと半年なんて信じられないです。今しかできないことを、精一杯やりたいです。

——女チーフ by 谷山姉☆

——不思議な子も多いけど、女の子たちをまとめて頑張ってる。

——よく考えてますね。すごいと思います。

——協調性があり、しっかりしていて、大人だなあと感じます。

——裏表なく接してくれる。憧れです。



上段左から岩野、鎌田、清田

中段左から綾部、出戸

下段左から海道、伊藤、山本

◎綾部 美晴(理・副務)

いつの間にかやら上級生…部の役に立てるよう頑張ります。無理はしない感じで。

—フォルツァの母。

—馬責は責任もある大変な仕事ですが、やり抜いて成長してください。

—2年生の中でお母さんの存在?

—意外と一番しっかりしてたりして。

—料理上手。馬術部員に嬉しい差し入れも。

◎岩野 公美(獣医・大会関係)

もっと上手になりたい。

—最近なんとなく落ち着きが増したように思う。

—メガネは、どこへ?

- ポーっとしてるようできて、ポーっとしてる。
- 誰とでも場が和んで気が安らぎます。
- 天然じゃないんです、ズレてるんです。でもおもしろい。

◎海道 磨里(獣医・衛生)

最近、凶々しさが増しましたでしょうか。これもご愛嬌ということで。

- ガッツガール←ガッツだけは某解剖学教授に認められた。
- 頑張り屋。その向上心を忘れずに。
- いい奥さんになれるよ
- 一生懸命さを見習いたいです。
- パワー全開、マリドゥワールド炸裂!!!

◎鎌田 真由美(獣医・記録)

七転八起。転がってばかりですが、馬との大切な時間を私なりに過ごします。

- よく母親をみる
- ファッションセンスが素敵です。
- 馬術部の縁の下の力持ちになるか!?

◎清田 雄平(理・副将)

清田のここ、空いてますよ

- 今年はぐっと忙しくなるけど部と自分のために頑張ってるよ。
- この1年は君の成長(いろんなイミでね)にかかっているよ。
- 世間に対して反抗的に見えるけど、世の中のルールはちゃんと守ってます。
- 肺は黒いけど腹は白い!?

◎出戸 裕人(理・飼糧)

さあ折り返し、ここまでは平坦な道、ここからは…

- ゲネのさく癖止めさせられのか?! ガンバ。

——色んな意味で軽量級。北大のエース。

——噂の全日ライダー

——体重も軽いがノリも軽い。

——ゲネと最強のコンビ作って下さい。

◎山本 栄輔(獣医・馬備)

無事進級することができて良かったです。

——君の図々しさには負けます。

——ずうずうしさで進級。

——色々あって大変だったけど頑張ってください。

——なかなか「やりおる」奴です(笑)

1年目



左から坂田、速水、瀧澤

◎坂田 直子(工・企画・大会関係)

北海道の冬を乗り切ってしまいました。氷点下じゃないというだけで今は毎日が楽しいです。

——変

——てんばらないで。

——結構ぬけている。

——低姿勢なようで実はよくキレル

——なんだかんだで馬術部の愛されキャラだよ。

◎瀧澤 省吾(農・作業)

他人紹介書いてるうちに自分のだめさを改めて感じました。

——男1人やけど 男として成長してね。

——君にかかる期待は大きいです。あと2年で成長しよう。

——プレッシャーは大きいかも知れないけれど、期待の表れです。頑張れ!!

——打たれ強い楽しみな存在です。

◎速水 秋(獣医・薬品・ビデオ)

入部して早1年です。これからも頑張ります。

— 私生活はだらしない

— どこか抜けている。

— 好奇心のかたまり。

— 馬術部への染まり具合は最速。チャリも速い。

— ちょっと変。

ノーザンホースパーク

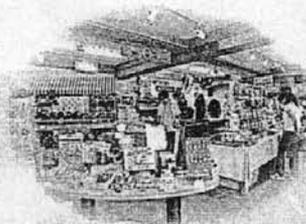
新千歳空港より無料送迎有り

K's Garden

〒059-1361 苫小牧市美沢 114-7

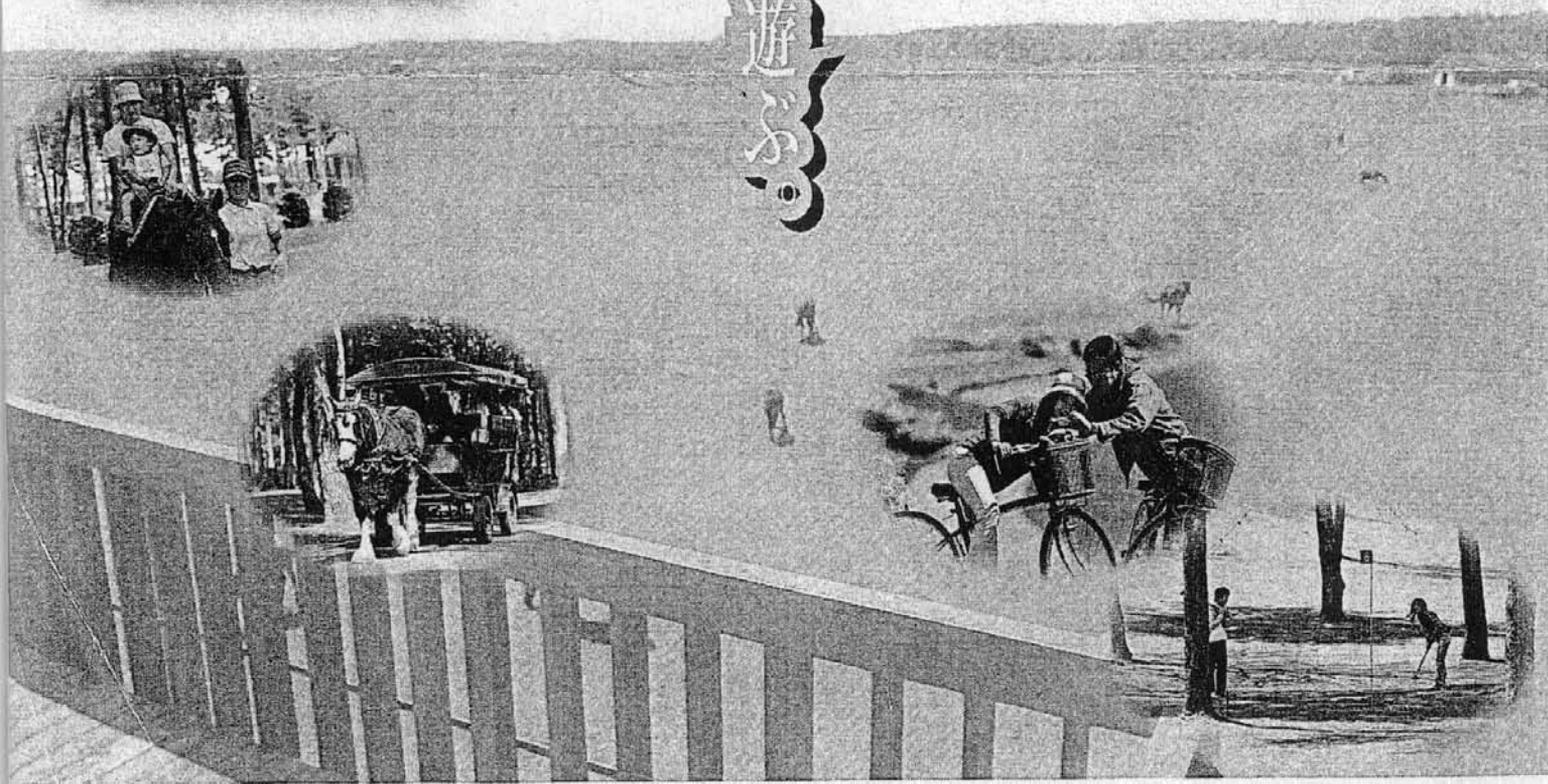
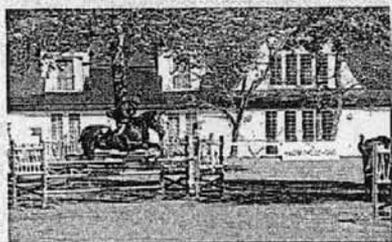
TEL 0144-58-2116 FAX 0144-58-2377

www.northern-horsepark.co.jp/



こころ潤す。

季節と遊ぶ。



MEIJI



時代の大きな転換期を迎える中、酪農・畜産分野においても
効率だけでなく、安全な生産物の提供、
地球環境への配慮が求められています。

当社は設立以来一貫して、良質の飼料と優れた飼養管理技術の提供を通じて
豊かな食生活の向上に貢献しています。

明治飼糧株式会社

〒130-0021 東京都墨田区緑1-26-11 明治乳業札幌ビル6階

【リクルートニュース】(新卒者採用中)!

●職種/営業部(担当エリアにおける飼料家畜販売)の自社営業の営業、コンプライアンス的業務等(毎日)の業務に携わっていただきます。
●初任給/大卒170,800円、養子224,000円 ●休日/年休11日7日 ●先給/入社/世帯給(昭和59年、北海道(札幌)、札幌支店)平成元年、北海道(札幌)支店)の勤務歴出身者が活躍しています ●企業/明治 歴史はありますが、常に新しい気持です。常に最先端の技術と、良質な飼料の提供に努めています。

【連絡先】札幌市中央区北4条東2丁目8-2 マルイト北4条ビル 8F 明治飼糧 札幌支店 TEL 011-261-9141

◇編集後記◇

部報の発行が遅れてこのような時期になってしまったことをとりわけ早い時期に原稿を出してくださった OB、先輩の皆さんに申し訳なく思います。部報は4月始めの発行を目指すべきものです。来年はそれより早い発行を目指してまいります。

今年度は、偉大な先輩の一人である鎌田さんの追悼特集を組ませて頂きました。お忙しい中ご協力くださった OBの皆さんにお礼申し上げます。

OB 寄稿にご協力くださった松井さん、春田さんをはじめ、原稿執筆や広告集めなど様々な形で部報制作に協力してくれた現役部員に心から感謝しています。

岩野 公美

坂田 直子

北海道大学馬術部部報 第54号 平成21年 6月発行

編集者 北海道大学馬術部部報担当

岩野 公美

坂田 直子

印刷所 ひまわり印刷株式会社

〒053-0815 北海道苫小牧市永福町2丁目1-4

発行所 北海道大学馬術部

〒001-0023

札幌市北区北23条西12丁目

TEL・FAX

011-737-1626

銀行口座 北洋銀行 391-1-0443731-1

表紙写真撮影者 大場善明 (S36卒) 山川兄とエルグレイ号 (09年全日)

